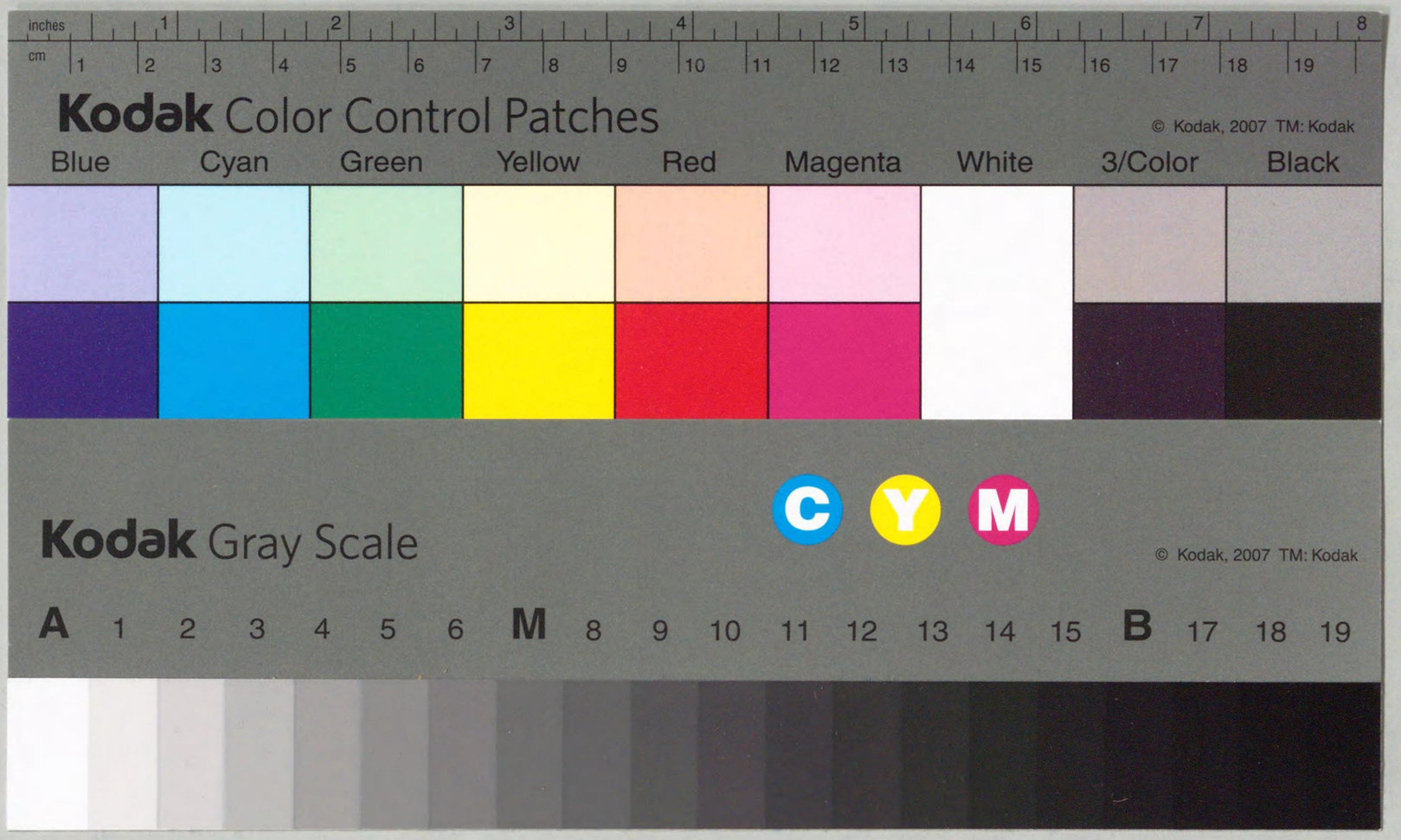

五十嵐力講述

修辭學講話

早稲田大學出版部藏版

修辭學講話

早稻田大學教授　五十嵐力講述

一

まづ始めに、今度の講話の仕振から申上げようと思ひます。

私は修辭學の講義といふものを已に幾度も試みました。現に其中の一番精しく纏まつたものが「新文章講話」といふ書物になつて、皆樣の御目通りに出て居ります。で、今度また此の學問のお話をするにしても、前の通りをそのまゝ繰り返したくありません。それ故、つまりは同じ内容ながら、今度は少しやり方を變へてお話をして見たいと思ひます。

第一には、學究的態度を振りすて、學者言葉といふものを成るべく使はぬことに致しませう。皆樣をば制服制帽に身を堅め、學問や術語を覺える爲めに大學の講堂に集まられる御方と見ずして、或は畑の間に鍬を杖いて立ち、或は店先に算盤を手にして坐つて居られる、そこへ私がぶらりと出掛けて行つて、問はず語りに、曾て學んだ學問の思出話を、耳近い素人言葉で試みるといふ格でやりませう。例へば、學者達が「能力を經濟的に使用する」といふ事ならば「頭を無駄なしに使ふ」と云ひませう。「鹽分を多量に含有してゐる」といふ事ならば「鹽が勝つてる」といひ

ませう。西洋好き、支那好きの好んで用ゐるやうな四角な文字や片假名言葉も出來る限り使はない事にして、成るべく、今の、日本の、素人向きの言葉を使ふことに致しませう。第二には、強ひて纏まつた組織を立てずに心に浮かんで來るそのまゝを書き竝べることに致しませう。改めては參考書を見ず、強ひて精しく備はることを求めずして、かねて讀んだことのある修辭學上の知識の中で、著るしい、大切だと思ふものが、ひよこり〳〵と頭に浮んで來る、それをば段々書きつらねて行つて、書き積もつた結果皆樣に「はゝァ修辭學といふのはこんな學問か」と、大凡そに解つて戴けば滿足、といふ心持で書いてまゐりませう。私は強ひてきりつと書き纏めることが、必ずしも學問の能事ではないと思つて居ります。昔の聖賢の書かれたものは殆んど皆思ひ浮かぶまゝのボツ〳〵書きではありませんか、而してその取り纏めないボツ〳〵書きが、いつまでも世に忘れられずしてそれらを立派な「學說」や「科學」の形に纏めた、謂はゆる學者といふ智惠者の細工說の方が片端からずん〳〵忘れ去られるのが世の中の實際ではありませんか。

こんな土くさい心持で書くのですから、私のお話には學者の講話に見るやうな術語の說明や、出典しらべや、組織や權威やといふものが、さつぱりありません。これはあらかじめ御承知おきを願ひます。

二

修辭學とはどんな學問か。それが吾々の第一に辨へ置くべき事柄かと思ひますが、修辭學といふは、つまり文章の學問といふ事でありますが、悉しく云ふと、文章の甘味といふものはどんな所にあるか、文章の巧い拙いを定める目安は何處にあるか、どうすれば立派な文章が書けるか、同じ事を言ひ表はすにも、どう云へば一番相應はしくなり、自然になり、面白くなつて、讀む者を感心させるか、といふやうな事を調べる學問、これを修辭學といふのであります。

修辭學は又「美辭學」とも「文章學」とも呼ばれて居ります。世の中には「文章學」を「修辭學」「美辭學」とは違つた學問のやうに心得てゐる人もありますが、實は全く同じ物で、唯だ「修辭學」といふ語が「文章學」といふのに比べていさゝか品ありげに見えるといふに過ぎません。尤も、斯樣な名稱の成り立つた由來を考へると、それ〴〵に少しづゝは違つた歷史がありませう。西洋で修辭學といふ意味の言葉、卽ちレトリックといふ語は、もと「話す」「話し手」などいふ意味の語から轉じたので「巧く話す方法を講究する學問」といふ程の意味であつたと申します。卽ち西洋の修辭學はしやべる方、說話の方から源を發したので、そんな所から「雄辯學」といふ語が「修辭學」と同じ意味で、同じ程廣く盛んに行はれて居たものでありました。それはギリシャの大昔、今から二千四百年ばかり前に、ギリシャ人の中の理窟屋のしやべり好きが、裁判所で巧くしやべつて、裁判官を動かして、訴訟に勝てやらうといふので、聞き手を感じさせるおしやべり術を研究した、これが修辭學の抑もの濫觴だといふのを見てもわかりませう。當時盛んに行はれた名高い論法に、どちらに轉んでも負けぬ辯論法、兩引かけの術といふのがあつて、例へば、弱い者が強い者を毆打たと云つて告發された場合には「弱い者が強い者を打つといふは有り得ぬことぢやないか」と云つ

て逆捩を喰はせ、強い者が弱い者に訴へられた場合には、「強い者の方に罪の歸するのが初めから知れ切つて居るのに、毆打罪を犯すといふは有るまじきことではないか」と云つて理窟を捏ねる、といふことがありましたがこんな三百的論法に裁判官も威服してコロリと參らされたものと見えます。こんな處にでも西洋人が昔からおしやべりで、理窟こきで、出しやばりで、權利の言ひ張りやであつたことが見えて居りますが、とにかく西洋の修辭學といふものは、その二つの研究題目たる言と文と、卽ち辯說と文章との中、(此の二つは、つまりは同じ物であるが、身振や聲の抑揚などに手傳はして、主として耳に訴へる辯說と、文字竝べの工夫によつて主として目に訴へる文章との間には、いろ〳〵な點で違つた呼吸があります)言の方、卽ち辯說の方から出立し、「言」を本尊とし「文」を添物としたものでありましたが、年經る中に段々手を分かつて「雄辯術」と名のつく方が主として「言」の方のおしやべり術を取り扱ひ、修辭學が主として文章の方を取扱ふといふことになり、近世になつては、昔の修辭學が雄辯術と相竝べて同じ意味に用ゐられたとは反對に、「作文法」といふ語と相竝べて殆んど同じ意味に用ゐられるやうになりました。つまり西洋の修辭學といふ言葉は、もと辯說本位であつたのが、段々移り變はつて文章本位になつて來たといふわけでありました。

支那はおしやべり好の國でありますが、それ以上に文字自慢、文章好みの、大の邊幅修飾國であります。殊に其の修辭論の始めて出たのが、四六駢麗など云つて、文字竝べに下手工夫を凝らして死文を作つた時代であり、又その初めの著述が、磨き切つた詩文に關する批評心得を說いたものであつたので、自然に書く方の文章が本尊となりました、從つて「學」といふ名は附けら

れなかつたが、遊說、辯論などいふ方面には殆んど目もくれずに「文章」「修辭」といふ書く方に專屬するやかましい品位のある語が適用されるやうになりました。「修辭」といふは「易」の中に「修辭立其誠」とあるのから來たのださうで、「文」はあや「章」は「音」と「十」との寄合字、卽ち音樂の譜が「君が代」が「苔のむすまで」までちやんと完了したもの、卽ちあやのある美しい思想が首尾完全に纏まつて現はれたものといふことなさうです。かういふ八釜しい文字も、日本へ來ては淡泊な國民性の洗禮を受けて唯だ「思想を言葉に現はしたもの」といふ丈の意味に平凡化されてしまひましたが、支那といふ國は、吾々なら唯だ「おめかしをする」といふことを「衣冠を正す」などと開き直つて云ひたがる文飾國ですから、其の文字づかひなどには、それは〳〵調べ草臥れる程こんがらかつた由來がある」のです。

「美辭學」といふ語は別に由來を質して使つたのではありますまい。「美しい辭づかひとはどんなものかを調べる學問」或は「辭を美しくする方法を研究する學問」といふ位の意味で好い加減に使つたのだらうと思ひます。

日本は昔から「言擧げせぬ國」と云つて、おしやべりや空論を卑しんで來た爲めでもありませうが、我が國語の中には此の學問を簡單に現はす言葉がさつぱりありません。

名は實のお客樣とも云ひました吾々の目的は專ら實を摑むにあります。餅といはうと、オカチンと云はうと、アンモと云はうと、それは餅好きの關する所ではありません、餅好きに取つては、唯だ餅米をふかして搗いた、白いねんばりした塊を得ればよいのであります。酒と云はうと、般若湯と云はうと、ワインと云はうと、水邊の酉と云はうと、憂を掃ふ玉箒と云はうと、それは

酒飲みの關するところではありません、酒飲みに取つては、唯だ人を醉はす飲料を得ればよいのであります。此の學問も同じ事で、國により、時代により、人によつて、「修辭學」の、「美辭學」の、「文章學」の、「レトリック」の、「オレートリー」の、「コムポジション」のと、いろ〳〵に云つては來ましたが、つまりは文章を研究する學問と云ふ事で、平たく云へば「文章學」といふことになるのであります。

三

此頃では、「修辭學」「文章學」といふと、唯だ、思想をはつきりと現はし、進んでは面白く現はし、美しく纏めて現はす事を研究する學問といふ位に平たく考へるやうになりましたが、昔の修辭學者は此の道を天地人間の大道などに引きつけて偉い事を云つたものでありました。魏の文帝は「經國の大業、不朽の盛事なり」と云つたと云ひますが、支那の修辭家等は、空想的の弊があり、往々にしては言葉を弄ぶやうな嫌ひはありながら、皆そんな風の事を云つて居ります。詩文論の骨髓として彼等の口癖に用ゐた典雅、遠奥、精約、壯麗、新奇、雄渾、沖淡、高大、洗煉、勁健、綺麗、含蓄、豪放、飄逸、贍達といふやうな言葉は、彼等が脫俗がりの空想家なることを語ると同時に、其の思想の可なりに高いものであつたといふ事をも語つて居ります。

此等の點に於て修辭に關する思想のしつかりして而も深く高かつたのは學問の祖と呼ばれたギリシヤのアリストートルでありました。彼れは修辭の必要なる所以四ヶ條を擧げてかういふ事を述べて居ります。第一に、眞理と正義とは本來非眞理、不正義よりも强かるべき筈のものである。それ故もし眞理正義が非眞理不正義に敗るゝことがあらば、それは辨ずる者の過失によるので、左樣な場合には修辭の術を盡くし之れを正して、眞理正義に勝たしめねばならぬ。此の場合に修辭は誤を正すといふ役廻りをするのである。第二に、純粹なる學理の說明を會得し得ぬ俗衆どもに對しては、それを通俗に碎いて合點させる必要がある。此の點に於て修辭の本領の一面で、此の場合に修辭は教訓の役廻りをする。第三に、首尾よく人を說得するには、一つの問題を兩面から論じて、自分の說を立てると共に反對說を破らねばならぬ。修辭學は論理學と同じく、善人にも、惡人にも、正しい說にも、邪な說にも、偏頗なく武器を貸すもので、從つて吾等が一つの說を立てようとする場合には、いかなる反對說が立ち得るかを示して、之れを破つて、よりよく我を說き立てる方法を考へさせて呉れる。此の場合に修辭は暗示、誘導の役廻りをする。第四に、人間の人間たる特色は身體活動の點よりは寧ろ言語を有するといふ點にある。もし身體によつて自分を防衛し得ないのが人間の不面目ならば、言語によつて自分を防衛し得ないのは更に不面目と云はねばならぬ。そして修辭は言語を使つて自分を防ぎ衞る働きをなすものである。卽ち修辭學には誤りを正してくれ、むづかしい事をやさしく面白く言ひ表はす方法を訓へてくれ、反對側の說を勘づかせてくれ、自分を守り、面目を立てさせてくれるといふ四つの大きな効用がある。

といふ是れがアリストートルの修辭の四大效力論でありますが、今日から見ると少し餘處の繩張まで入り込んでゐる傾きはありますが、其の見識はとにかく堂々たるものであります。今日の吾々には、自分の領分を大切に守つて研究するといふ事が必要でありませうけれども、

同時に心掛の根柢においてかういふ見識を持ちたいものと思ひます。

四

修辭學の研究範圍は人によつて大變に違ひます。或は、思想の說明理解といふ點を重んじて、旨と論理の諸方式を論ずる人もあります。つまり文章は我が頭の中にある思想を滿足に說明して相手にはつきりと理解させる爲めに書くもので、而して此の目的を達するに肝要なる事は、思想の關係、論理の筋道を明確にすることであると考へるのでありませう、さういふ人の修辭學は自然に論理學の末家のやうなものになる傾きがあります。或は、相手に感心させるといふ方面を重んじて、心理の解剖に力を入れるといふ人もあります。これはつまり良い文章といふは人を動かして面白い、愉快だ、と思はしめるもので、そのやうな文章を書くには、人といふものはどういふ文を見ればどう感ずるといふ人間の精神活動の原則を知らねばならぬと考へるのでありませう、さういふ人の修辭學はやゝもすれば心理學の變形のやうになることがあります。或は、文章は言語文字を媒介にして思想を傳へるものだといふ點を重んじて、言語文字の起源發達作用等の說明に骨折る人もあります。或は文章修辭は社會國家の公益の爲めのもので、善人が之れを用ふべきもの、惡人に利用されてはならぬものであるといふ所から、倫理、敎育、社會公益等の研究に骨を折る人もあります。或は、文章を作るに大切なる事は高尙な趣味の現はれることであるといふ所から、趣味、嗜好といふものの說明に力を入れる人もあります。或は、文章の中の華ともいふべきは文學詩歌であるといふところから、或は文學の歷史を說き、或は韻律詩作の法を說く人もあります。或は、文は人なり、立派な文章を作るには作る者の性格から鍛へねばならぬといふ所から修辭家平生の修養を說く人もあります。かやうに修辭學の說く所は廣くいろ〳〵な方面に亙つて居り、又是等の事柄は皆多少修辭學に關係して居る事ではありますけれども、是等は決して修辭學の中心をなし、根幹骨髓をなして居る者ではありません。然らば修辭學の中心を成して居るものは何かといふに、私のいさゝか取調べる所では、左の四箇條に歸するやうに思はれます。

第一、文章基礎の論
第二、文章修飾の論
第三、文體の論
第四、文章組織の論

第一は如何なる文章も其基礎として備へねばならぬ大切な要件、例へば意味が明らかに解るやうに、人の氣に障らぬやうにといふやうな事を說く部面であります。第二は意味がわかり、氣に障らぬといふ土臺を備へた上に、いろ〳〵の裝飾を添へて文章を美しく面白くする方法を說く部面であります。第三は花やかなる文章、淋しい文章、昔風の文章、今風の文章、硬い文章、軟かい文章、漢文風の文章、洋文式の文章といふやうな、文章のいろ〳〵な姿の事を論ずる部面であります。第四は、或は初、中、終、或は初めの文句、承けの文句、本尊の部分、止めの部分といふやうな、一つの文章を組立て纏める上の工夫方式を論ずる部面であります。此の四つが古今東西の修辭學、文章學に通ずる最も主要なる要素で、此の四要素を一通り備へて居ればと

にかく一種の組織立つた修辭學と云つても差支ない位のものであります。で、是れから此の四つの要素について簡單なお話を致します。

五

大體について云ふと、修辭學は與へられた思想に就て最もよき言表法を考究するもので、思想の供給まで立ち入るものではありません。例へば御菓子を食べたうまかつたといふ事を言ひ表はす場合ならば、先づそれについていろ〳〵の事が思ひ浮かびませう。例へば「此のお菓子はうまい」とか、「おいしい」『味がよい』『まづくない』とか、「此のお菓子の有する味が我が舌を快く刺戟する」とか、「涎が流れる」『食指が動く』『天下一の美味だ』『頬冠りして食はなきや頬が落ちさうだ、」とかいふやうないろ〳〵の事が浮かびませう。さういふ場合に修辭學はその中で或時或場合に、或人が或御菓子を味はへた事を寫すに、どれが適當かといふ事を教へる丈で、書くべき内容まで與へて呉れるものではありません。何處へ行くにはどういふ風に行きなさいといふ道しるべを與へて呉れる丈で、何處へ行くべきか、而して何を爲すべきかといふ行先や用向まで教へて呉れるものではありません。ですから、修辭學を學び作文本を讀むと誰れでも名文が書けるやうになるなどいふのは大嘘の皮で、事實は同じ事を書く場合に、修辭學を知つて居れば知らないよりはよく書けるといふ丈の事であります。（場合によつては却つてよく書けないかも知れませんが）好い文章を書く一半の條件は良い思想材料を持つて居ることです。しかしながら是れは其の人の勉強や見聞や頭の質によることで、修辭學の與る所ではありません。修辭學の教へる所は、唯だ已に持つて居る材料思想に對する最もよい言ひ表はし方であります。要するに修辭學といふは、昔から今まで多くの人の書いた文章について、うまい所、拙い所、うまい理由、まづい理由を研究して、文章の美、妙といふ味はひがどんな所に、宿るものかといふ事を說く事、已に出來上がつた文章に對しては、その美醜巧拙を判斷する標準を與へ、是れから文章を書かうといふ者に對しては、已に有つて居る材料について最善、最適切の言表法を知るべき策を與へること、まづざつとこんなものと思へば大した間違は無からうと思ひます。さて與へられた思想を最も善く現はす基礎として第一に必要な事は、無難に現はすことであります。「巧みに」『美しく』『面白く』といふやうな事は、意味が滯りなく通じた上の沙汰であります。その思想を無難に現はす要件が二つあります。一つは筋が立ち趣意が通る樣にすることで論理的要件ともいふべきもの、一つは國人普通の言葉遣ひに從ふことで文法的要件ともいふべきものであります。修辭は此の二つの要件を基礎として其の上に立つので、理窟が立ち法格に合つた上に、文章に磨きをかけ光澤をつける事を研究するのが其の本領であります。此の二つの要件を充たす爲めに肝要な事が澤山ありますが、取りすべて云へば、二つに歸しませう。一つは明らかに寫すといふことです。もう一つは穩かに寫すといふことです。第一の明らかに寫すといふ事の中には、紛れなく誤解されぬやうに言ひ表はすといふ意味の精確と、誤解されぬ上に解り易くといふ意味の明瞭との二つが含まれます。第二の穩かに寫すといふ事の中には、雜り氣のない選り拔きの國語を用ゐるといふ意味の純粹と、其の場〳〵にピッタリと嵌まつた言葉を用ゐるといふ意味の穩當と、此の二つが含まれます。精確と明瞭と純

粋と穩當と、やはらけて云へば間違はれぬやうに解り易く、よい語を使つて、それが或時或處に於ける或人に適當するやうに言ひ表はすこと、これが文章の基礎として最も肝要な四つの條件であります。

六

思想を明らかに寫すについて、第一に必要なのは意味の紛れぬやうに書くことであります。文意の誤解されぬやうに書くことを精確と申します。精確は基礎の中の基礎要件と云つても差支ありません。文意が誤解されては他のあらゆる要件が全く効力を失ふからであります。

文義を精確ならしめる爲めに注意すべきことが大凡そ二個條あります。第一は意義の紛らはしからぬ語を用ゐる事で、第二は語の關係を明らかにすることであります。

文章を組立てる材料の中最も單純なるものは個々の語である、而して個々の語を結び付け組み合はせて句を成し、節を成し、章を爲し、篇をなすのである。それ故文義を精確にしようと思へばまづ其の使用する一つ〳〵の語を精確にせねばなりません。之れについて注意すべき事は表面から云へば成るべく意味の狹く限られた語を用ゐるやうにする事、裏面から云へば意味の二通り以上に取られる曖昧な語を用ゐぬやうにすることであります。意味の狹く限られた語とは、適用される範圍の狹くはつきりと定つた語、卽ち少範圍の事物にのみ當てはめられる語で、修辭學では之れを殊語と申します。例へば「傳染病」といふと、コレラか、赤痢か、猩

紅熱か、チフスが解らぬけれども、チフスといへば多くの傳染病の中の或一つだと紛れなくなりませう。「人」といへば古人か、今人か、東洋人か、西洋人か、日本人か、解らぬけれども「大正時代の日本人」と云へば紛れずに解りませう。「日本の青年」といへば更によく解り、「青年教育者」、「何郡何村の小學校に奉職する青年教育者」といへば更に〳〵よく解りませう。かういふ語を名づけて殊語といふので、又斯樣な理由から殊語を用ゐることが文意を精確にする上に効用があるのであります。今の國定讀本などにも殊語を用ゐぬ爲めに紛らはしくボンヤリとなつたのが澤山あります。例へば卷二の浦島太郎の傳說を書いた所に、

「昔浦島太郎といふ人がありました。或日海邊へ出て見ると子供が大勢で龜をつかまへておもちやにしてゐます。……

云々といふ一篇があります。此の「人」といふ語がをかしくはないでせうか。此場合、讀者たる子供は浦島の傳說を始めて知るものと見るべきでありませうが、初耳の子供が此の「人」といふ言葉を見て、どんな人物を想像するであらうかといふに、「人」といふ言葉は汎く人間一般を指す言葉であるから、子供は之れを見て、役人ともつかず、百姓ともつかず、大工ともつかず、左官ともつかず、老人ともつかず、若者ともつかず、唯だ〳〵ボンヤリした人間といふものを思ひ浮かべるでありませう、或は役人の子は官吏を大工の子は大工をといふやうに自分の家庭に緣の近い人間を思ひ浮かべるでありませう。それから少し讀んで行くと、若い漁師だといふことが解つて來るから、驚いて、前の何者ともつかないボンヤリした人間の像(想像圖)を撤回し拭ひ去つて、新規に若い漁師の面影を書き直す必要があります。言ひ換へれば讀

者に觀念を築き直し、心の御繪を書き直すといふ無駄な手數をかけることになります。かういふのを初めから殊語を用ゐて、例へば

「浦島太郎といふ漁師がありました。」

と云へば、それを讀む子供は、役人をも大工をも左官をも思ひ浮かべずして、直ぐに腰簑をつけ櫂棒を肩にした漁師を思ひ浮かべることが出來ませう。又更に狹く限つて、

「昔丹後の國與謝の海のほとりに、浦島太郎といふ若い漁師がありました」

と云へば、白髮のぢいさん漁師をば間違つても思浮かべずして、直ぐにピン〳〵した若い漁師を思ひ浮かべるでありませう。かやうな失敗は、要するに「人」といふだたつ廣い言葉を使つた爲めに起こつたので、從つて文義を精確にする爲めに殊語を用ゐる必要のあることは是れで十分に解るだらうと思ひます。

意味の二通り以上に取られる曖昧な語とは、例へば「故人」といふ語は「歿くなつた人」の意にも「ふる馴染」の意にも取られ、「慊焉」が飽き足る意にも飽き足らぬ意にも取らるゝ類ひを申します。而して「故人」といふよりは「死人」といふ方が精しく、「慊焉」といふよりは「飽かず」といふ方が誤解されぬことは云ふまでもありません。私は曾て或人から

「來る何日夕景より參上致すべく候。」

といふ端書を貰つて夕食前から來ることか、夕食後に來ることか不精確な爲めに夕飯の用意に迷つたことがありましたが、これも要するに「夕景」といふ曖昧な語を使つた爲めであります。

七

個々の語が連つて句をなし文をなし、節をなします。それ故個々の語を精確にするに次いで語と語との關係を精確にせねばなりません。語と語とがよく組合つて相互の關係が精しく解るやうに、無關係不相應な語を挿まぬやうに、關係の附け方に手落のないやうにしなければなりません。

例へば服部嵐雪といふ名高い俳人の名高い句に

蒲團きてねたる姿や東山。

といふのがあります。人の蒲團を着て寢た姿と京都の東山の形とが似て居るといふ事を歌つたのでありませうが、或人の蒲團を着て寢て居る樣子が東山の形に似て居るといふとか或は東山の形が人の蒲團を着て寢て居る樣子に似てゐるといふことか、どちらにも取られて紛らはしいと思ひます。而してそれは要するに「や」といふテニヲハが前句と後句との關係をよく附け得ぬ爲めでありませう。どちらの意味に取つても名句たる事に累ひは及ぼさぬかも知れませんが、人を迷はすのは決して褒めたことではないと思ひます。

國定讀本の卷十に「家畜」と題する一課があつて、その中に

羊や山羊は毛が必要である。長くのびると刈り取つて毛織物の材料にする。羊の肉も亦食用となり、山羊の乳は牛乳のやうに飲料になる。

といふ一篇がありますが、最初の「羊や山羊は毛が必要である」といふ文が「羊や山羊が無事に

生きて行くには毛衣が必要だ」といふことか、「人が羊や山羊を飼ふのは毛を取つて儲ける爲めだ」といふことか、どちらにも取られて紛らはしいと思ひます。つまり言葉の繋ぎ方、語句思想の關係のつけ方が本當でないからで、もし右の二つの意を精確に書き分けるならば、

人が羊や山羊を飼ふのは毛を得んが爲めである。

とか

羊や山羊には長い毛があつて身體を保護して居る。

とかすべきであらうかと思ひます。

八

思想を明らかに寫すについて第二に必要なのは、解り易く書くことであります。これは精確と區別して明瞭とでもいふべきでありませう。文を解り易くするには、先づ意味が紛れぬやうに、誤解されぬやうに書かなければなりません。理窟上は難の打ち處がなく精確に出來てゐる文章でも、或は難字難語があり、或はくどく、廻り遠く、或は捩れこじらけ、或は略し過ぎ詰め過ぎてある爲めに解り惡いのもありませう。而して若し文章の目的が多くの人に滯りなく我が思想を傳へるにあるならば、又頭痛の心配なく無駄な時間をつぶさせずに、我が意を呑み込ませるにあるならば、誤解されぬ上に解り易いことを要するのは云ふまでもありません。

文章を解り易くするについて注意すべき事がおのづから二方面に分かれます。第一は相手を見て加減する事、委しく云へば讀者の知識程度を見て我が言ひ表はし方をそれに適應させる事であります。第二は如何なる場合に、如何なる人を相手にして書く文章に於いても常に必ず注意すべき事であります。

相手を見ての筆加減に三つの方面があります。第一は通俗なる語を用ゐる事、第二は簡易に言ひ表はす事、第三は周到に言ひ表はす事、此の三つであります。前に云つた通り文章の元素は一個々々の語がある、それ故文章を解り易くするには、まづ個々の語を解り易くせねばなりません。是れが用語の通俗といふ事の第一に必要な所以であります。例へば「我が見たる東京」と云つて事足る場合に、「我が瞳子裡に映じたる東京」といふが如き、「佛教を奉ず」「佛の教を尊ぶ」と云つて澤山な場合に、

「王侯貴人爭つて乾毒の教を奉じ、唯だ人に後るゝを恥づ」。

と云ひ、或は「能仁の教をあがむ」と云ふが如きは無益の難語使用で、人に餘計な迷惑をかけるものと云はねばなりません。

第二には言ひ表はし方を簡易にせねばなりません。簡易とは手短にあつさりと言ひ表はすといふ意味、裏から云へば、廻りくどからず、長たらしからず、待ち遠からず、拗れず、入り組まずして無駄なく書くといふ事表から云へば簡單に、素直に、句讀短に、端から極めるやうに、境目が判然たるやうに書くといふ事であります。例へば「それ然り豈にそれ然らんや」といふよりは

「されど」と簡單に書く方が解りよく、「無かるべからず」「有らざるべからず」と逆に云つたり、打消を重ねたりするよりは「あるべし」と素直に書く方がよく通ずるでありませう。或人が婦人同士の交際を論じた文章の中に

「又女が常に親友と言ひ合つてゐる同士の關係はどんなものであらうか」。

といふのがありましたが、それも文句が入り組んで廻りくどい爲めに解りにくいので「又女同士の謂はゆる親友の關係はどんなものであるか」と云へばあつさりと解るであらうと思はれます。國定讀本の十一册目「時間」と題した一課の中に

業務に從事する間は熱心に之れを行ひて他事に心を勞すべからず。又事既に過ぎて思ふも益なき事に心を勞するは時間を徒費すること甚だし。爲したる事に過ちなく、後悔することなき者は幸福にして賢き人なり。

といふ一節がありますが、それもごた〳〵と入り組んでゐる爲めに解りにくゝなつたので、もつと切れ離れをサッパリとして、

一の業務に從事する間は、熱心に之れを行ひて、他事に心を移すべからず。又過ぎたる事にくよ〳〵して心を勞するは、徒らに時間を費す所以なり。過ちなく悔いなきは、賢き人にだも望み難し。若し過あらば、深く悔いて再びせざらんことを期すべし。思ひても返らぬ事を心配するは、未練なり、愚痴なり。

とでも改むれば、解り易くなるであらうと思はれます。

九

簡易といふ點から見て注意すべき事は、いろ〳〵あります。無用の打消や裏返語を用ゐるのも其の一つであります。例へば「有る」と云つてよい事を「無きにあらず」といひ、「あらざるはなし」といひ或は「なからざるにあらず」など云つて、叙述を廻りくどくし、讀者に餘計な心配をさせるものが、古人の文にも今の人にも決して少なくはありません。

況んや一世の親子として、など其の心(子を愛する心)なからざらん(謡曲木賊)の如きは「など子を愛する心なからん」或は「…あらざらん」と云ふべきで「なからざらん」では、作者の本意とは全く反對になつてゐるではありませんか。「あらざらん」では作者の本意とは全く反對になつてゐるではありませんか。かういふ文章は、文に曲折を添へようとした結果、左捩りの積りなのが、知らぬ中に右捩りになつたのでありませう。こんなのが今の大家の文にも折々見えます。例へば、

古人の經驗は決して無視すべからず。吾人が獨特の發明なりとして自ら矜誇する所にして、却つて古人の爛熟したる長物たるもの甚だ少なしとせず。(日曜講談)

の如きも、本意は「長物たるもの甚だ少なし」といふ事で、一捩り丈して正しく現はせば「長物たるもの少なしとせず」或は「長者たらざるもの少なし」とすべきもの、それを二重捩りにした結果、いつの間にか本意の反對になつたのでありませう。世の中は何でも眞直、正直に限ります、餘程特別の必要がある場合でなければ、決してつまらぬ打消や裏言葉などを用ゐるべきものではありません。

關係を行違ひにする書き方も此の點から見て注意すべき事であります。例へば、

海國の人は山國の人よりも魚を好む、それ山國の魚が海國のより新鮮ならざればなり。

といふのは關係の行違の爲めに解りにくくなつたのであります。是れは、上の半分を活かすならば下の半分をば「海國の魚が山國のより新鮮なればなり」と改むべきで、下の半分を活かすならば上の半分をば「山國の人は海國の人よりも魚を好まず」と改むべきでありませう。中村敬宇先生の『西國立志編』の中に

人は幼少より善き習慣を養はんことを要す。少年の中に習慣となれる事は、終身永續して變ぜざればなり。たとへば木の皮に文字を刻むに、其の木の長ずるに從ひ文字も次第に大きくなり行くが如し。

といふ文がありますが、是れも叙述が行違ひ、食ひ違ひになつてゐます。「永續して變ぜぬ事」と「長ずるに從ひ大きくなる事」とは、決して調和して竝び存すべき事ではありません。若し「變ぜぬ事」を中心思想に立てるならば下の句を「其の木の如何に長じても、其の文字の消えざるが如し」とすべきでせう。又「消え失せずして大きくなる事」を中心に立てるならば上の句を「少年の習慣は終身永續して而も擴大生長するものなり」とでもすべきでありませう。

句讀を長くする事も、此の點から見て戒むべき事であります。例へば、

今から丁度二ヶ月前、七月の下旬と云へば、最も暑い盛りであるが、此の暑い時に、私は二人で海水浴かたぐ、伊勢參宮を致さうと思つて、汽車に乘り、鵜飼を以て名高い長良川を經て、名古屋に着きましたが、かの名高い金の鯱は高く市の上に聳えて居りまして、謂はゆる太陽と其の光を競ふなど云つて居りましても、とてもお話になりませんが、とにかく日本に於ける最大なるもので、他處へ行つても見られないものでありますから、少々は光つてゐても惡くはないと思ひますが、車中より遠方なので其の光を見ることが出來なかつたのでありますが、まあ幸か不幸か知りませんが、空が曇つてゐたからでありませう……といふ風の文章は、昔の文にも今のにも少なからず見えますが、長く絡んで行く爲めに非常に人の心を疲らすことになります。

まだ他にもいろ〳〵ありますが、要するに簡易に、手短に、入り組ませずに書くといふ事が、文を解り易くするといふ點から見て非常に大切な事であります。

十

第三には言ひ表はし方を周到にせねばなりません。周到といふは言ひ表はす必要のある事を手落なく綿密に言ひ表はすといふ事であります。かういふと、前なる簡易の注文と矛盾するやうに見えますが、さうではありません。簡易といふは無駄を省き邪魔になる引絡まりや、不自然な捩れこごらけを無くするといふ事、周到といふは、言はずにはおけぬ事、省いては解り惡くなる事を落さずにいふ事で、少しも反對して居るのではありません。

室鳩巢の『駿臺雜話』といふ書物にある話であります。或る處に鴟鴞を飼つて、それを囮にして鳥を捕る人が居つたが、或る時殺生友達の處から、その鴟鴞を借りたいと云つて使をよこした。其の使の持つて來た手紙に「みゝづく」を略して「づく」といひ、末に

づくとは耳づくの事にて候。みゝづくと書き候へば文字数多く事長になり候故につづくと書き候。

と斷つてあつたといふ事が書いてある。後に斷る位ならば、初めから「耳づく」と書くがよい。文字を約めようとして却つて餘計な文字を添へ、詞を短くする爲めに却つて多くの詞を使ふのはよくある事で注意すべきことであります。

昔、奥州の或る城下の表町といふ處に小島内記といふ歌人がありました。或日其の家で疊屋を呼びましたが、仕事が濟んで、夜は酒食の御馳走があつて、肴には鱈汁が出ました。ほんのりと醉うてから、主人の翁が例の相手構はずの歌がたりが始まつた。「なんと疊屋、お前も一つ歌を稽古してはどうか。歌は天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、男女の間を和ぐとも云うて、恐ろしい功能のあるものぢや。おれが教へてやるから、暇々に少しづゝやつて御覽」。といふ。疊屋は恐縮して「御冗談仰しやつては困ります、私等風情にどうしてお公卿樣の眞似が出來ませう」と頭を掻く。と、「何の六かしい事はない、歌は名々が心に思つて居る事を、素直に調子よく言ひ表はす丈のもの「豆腐屋が來た「疊がうまく刺せた「汁が甘い「酒に醉うた」何でも歌にならぬ事はない。善は急げぢや、眼前の景で、先づ一つやつて見よ」。「へへい、左樣で御座いますか、では旦那樣一つやつて見ませう。かうも御座りませうか。「表町の小島内記殿のたゝみさして思ひもかけなき鱈汁を食ひけり」。いかゞで御座りませう」。「むゝ面白い、面白いが、それではまだ只言といふもので歌にはなつて居らぬ。歌は三十一文字とも云うて、五文字、七文字、五文字、七文字、七文字、即ち五七五七七と五句三十一文字に竝べねばならぬ。今よんだ事でよい、それを五七五七七の順序に竝べて御覽」と云はれ、然らばと首を捻つて讀み出でたのが次ぎの句であつたといふ。

「おも町のこじなき殿のたゝ刺しておもかげもなきらじる食ひけり」。

面白い事は面白いが、これでは意味をなして居りません。略し過ぎると往々にしてかういふ事になります。

又或理學者の著述の中に、かういふ文がありました。

結晶形は最も想像し難きものなれば、初學者は時々製造場に赴きて、膽礬、明礬、其の他の結晶が成長して燦爛たる奇觀に接すべし。

是れでは語が足らぬ爲めに「結晶」が「奇觀」に接するやうになります。「燦爛たる奇觀を呈するを實見すべし」など云ふべきであります。

話が彈み過ぎて、思はず長逗留を致しました。どれ一つ腰を伸ばして行く手を急ぎませう。

十一

「通俗の語を用ゐよ」「簡易にせよ」「周到にせよ」といふのは、相手の知識程度が低い場合の特別注文で、相手によつては、通俗ならずとも、又簡易、周到ならずとも差支のないことがありますが、玆に文章を解り易くする爲めに、何時、如何なる場合にも、何人に讀ませる文章に於ても、常に必ず守るべき事が三つあります。第一に秩序、第二に聯絡、第三に統一、言ひ換へると、順序が立つて引きつゞいて纏まるやうに書かねばならぬといふことであります。

アリストートルといふ希臘の名高い哲學者が、其の名著の『修辭學』に於いて、愉快、苦痛とは何ぞといふ事を研究し、愉快といふは吾等の精神が一種の運動をなすこと、及び程よい加減に休んで、その本性に再び落ちつく事である、苦痛といふは其の反對のものである」と云ひ、而して名文は讀者の心を程よく働かして程よく落着かせるものでなければならぬと說いて居ります。人の心の作用をいかにもよく看破つた尤もな論であります。全くの休息は決して愉快なものではありません。寢てばかり居るのは、激しく働くよりもつらいことでせう。されば、と云うて、過度に働くのも、無論愉快ではありません。つまりは身心を程よく働かして、餘り疲れない中に休むこれが愉快といふもの、たい居る事と過度に働く事それが不愉快といふものであります。文意に於いてもその通りで、考へ味はふるに足らぬやうな平凡な事をのべつに書いたのや、散漫、無秩序、無統一で趣意のつかみにくいのは決して立派な文章とは言はれません。立派な文章はやはり程よく讀者の心を働かせるもの過度に心力を疲らさぬものでなければなりません。

十二

讀者の心を疲らさずして心ゆくやうに讀ませるには第一に其の書く事が順序正しくなければなりません。第二には前に言つた事と後に言ふ事との間に聯絡がなければなりません。第三には書く事全體が締まつて纏まつて居らねばなりません。秩序、聯絡、統一、この三つを缺けば文章は必ず散漫、無秩序支離滅裂見るに堪へぬものになります。

同じ數を計へるにも、一二三四五六七八九十と、序を追うて進めば、心よく言ひもし、聞きもされるが、三八七一五二など出鱈目に續けるのは、言ふ方も苦しく、聞く者も快くありません。こんな知り切つたお馴染の事でさへさうならば、初耳の、しかもむづかしい事などを書く場合に、秩序聯絡のない叙述が、人の心を疲らす事は、云ふまでもないことであります。

文章に秩序あらしめるには、先づ文中に記す各〻の事柄を混同せぬやうに、即ち各〻の思想の境目が判然たるやうに書くことを要します。例へば親の事は親の事子の事は子の事と分け寫して、特別の必要なき限り、親子の話を混淆させぬやうにせねばなりません。次ぎには序次顚倒せぬやうに、即ち一端より寫し初めて他端に終はるやうに書くことを要します。例へば、歷史を書くには上古、中古、近世と順を追ひ、傳記を書くには、幼年時代、青年時代、壯年時代と叙述を進める類ひであります。『國定讀本』卷十の二十三課「家畜」の初めに、

（犬や猫も家畜の中に數へられるが）家畜としても
田を耕させたり、荷車を引かせたり、重い物を
ろ〳〵の勞働に使役する。其の上牛肉と牛
といふ一節があります。が、順序立が面白くないので、讀者に餘計に頭を使はせる嫌ひがあります。なぜかといふに、初めに家畜として大切なものは牛馬、羊、豚であると云つてすぐに田を耕させたり、荷車を引かせたり、重い物を負はせて遠くへ運ばせたりと云へば、讀者は大概これは牛、馬、羊、豚に通じた記事だと思ふでありませう。或は羊、豚に田を耕させ車を引かせる筈がないと變に思ふ人があるかも知れぬが、少なくとも牛馬の兩方にだけは通じた記事のつもり

で讀んで行くでありませう。ところが忽ちにして「農家では牛を色々の勞働に使役する」といふのであるから、讀者は慌てゝ「何だ牛だけの記事で、馬は入つて居なかつたのか」といふので、俄かに馬を除外して、觀念の築き直しを始めねばならぬことになります。從つて讀者に餘計な手數迷惑をかけることになるのであります。私の考では、是れは寧ろ牛を主位に立て、而して、前に「扨牛について云ふと」といふやうな一句を置いて、

「田を耕す、荷車を引く、重荷を負うて遠くへ運ぶ、牛の農家に役立つこと、少々ではない。其の上飲食物では、肉と乳とを與へてくれる」

と云へば、穩かに秩序が立つであらうと思はれます。

十三

文章に聯絡の必要な事、唐突無關係なる叙述の避くべき事は、特に云ふまでもありません。聯絡は一句一節の短い間にも、一篇の長い文章全體の間にも必要であります。例へば貝原益軒の『大和俗訓』にある

志立たざれば學ぶこと成就せず。×故に古人も志ある者は其の事竟に成るといひ、又志立つは學の半なりと云へり。×譬へば弓射る者の的に志し、道行く者の宿に志すが如くなるべし。

の一節の如き×印をつけた所が聯絡せぬやうに思はれます。「志立てば學ぶ事成就す」故に古人も志あれば事竟に成ると云へり」。「學ぶ者の道に志すは」弓射る者の的に志すが如し」。

とでも改めねば穩かではありますまい。『國定讀本』の七册目に、

目は見ゆれども字の讀めざる人を明きめくらといふ。×然るに目は見えずして、大學者となりし人あり。塙保己一これなり。

といふ一節がありますが、是れも「然るに」の蝶番が一向前後の句を繋いで居りません。之れをよく聯絡させるには、

目は見えながら文字の讀めざる明きめくらの多き世に、盲目にして一代の學者となりし人あり、塙保己一これなり。

とでもせねばなりますまい。

聯絡は讀者の興味を繋いで行く最も大切な要件の一つです。聯絡の穩かならぬ文章は、到底讀者に心ゆかしめることが出來ません。

十四

次ぎには文章全體に統一。あらしめねばなりません。統一とは、書き表はす事柄が纏まつて統べ括りの附いてゐることを申します。例へば儉約の大切な理由を書くならば、「無駄づかひは宜しくないことである。それが習慣になると、身持が自墮落になる、品性が卑しくなる、家族の迷惑になる、親類に厄介をかける、國家の損害になる、何一つ善い事はない。況んや病氣、失職、天變、地異、明日をも賴まれぬ人の身を以て、平生貯蓄の心掛なくば、まさかの場合にどうするか。儉約は自他の幸福を來たし不幸を救ふ道である……」などと云はゞ、事柄が纏まつてよく解るが、

着し其の間に「旨い物を食ひたい、美しい物を着たいといふは人情である」、「誇にも太く短くと云ふ」、「今日を樂しめ、一寸さきは闇の世だ」などいふ文句を挿んだならば、意味の通ぜぬ、趣意の立たぬ文となるでありませう。是れは内容の趣意の上の事でありますが、形式の文句の上でも同じことで、文章が纏まるには言葉文句の一々が、呼べば答へ、授くれば受けて、前後の照應締め括りの工合が立派に出來るやうでなければなりません。此の統一といふ事は文章組織上の眼目であつて、一篇の文章全體を形づくる上に於いて特に必要な事であるが、一句一節の短い間に於いて亦深く注意せねばなりません。

形式上一句一節の間の統一をなすには、第一に語句互によく照應して組み合ふやうにすることを要します。例へば『徒然草』の

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假りの宿りとは思へど、興あるものなれ。

の如きは、點を打つた六字がある爲めに照應を缺いて纏まらない文になつて居ります。それは「家居のつきづきしきこそ興あるものなれ」即ち「相應なるこそ興あれ」といふべきで、「相應にありたい事こそ興あれ」では意味をなさぬでありませう。又或人の阿蘇山の研究に

火山の形は往々富士山の如く單純なるものの少なし。

といふ一節がありましたが、「往々少し」では一向譯のわからぬものになります。それは

火山には、其の形の富士山の如く單純なるもの少なし。

とすべきで、「往々」と云へば單純なるものあり」と云はねば照應しないでありませう。

十五

文章に統一あらしめるには、また主格に統一あらしめ、文の相を整へることが必要であります。主格の統一といふは文の主格がしつかりと定つて、その領分内の語句を統べ括ることを申します。例へば「吾れ衣食の爲めにせず、溫袍の爲めにせず」の主格にはなれるが「爲めならず」の主格になることが出來ません。「吾れ溫袍の爲めならず」では、文を成さぬからであります。もし「爲めならず」を活かすならば、「吾れの學ぶは」といふやうな別の主格を要しませう。即ち此の文には二つの主格が混入して「吾れ」といふ語は「爲めにせず」の一句を支配しては居るが、己が領内に居る他の一句「爲めならず」を支配することが出來ません。譬へて云ふと「爲めならず」の一句が「吾れ」といふ主格の家來のやうな顏附して居りながら、其の實謀叛して居るのであります。かやうな文は「吾れ衣食の爲めにせず、溫袍の爲めならず」とあるべきであります。

アルツィバーセフは現代の作家として、現代の問題と疑問とは常に彼れを苦しめて止まないも同じ事で、「……作家として常に現代の問題と疑問とに苦められてゐる」としなければ、主格の統一が成立たぬでありませう。

文の相とは、例へば「子供は犬をかはゆがつた」といひ、「犬は子供にかはゆがられた」といふを、働きかけらるゝ相の文、即ち所動相の文といひ、「山は

聳え川は流る」といふをおのづから然る相の文、卽ち自然相の文といふ類ひで、文句を累ねる際に働きかける姿の句ならば働きかけらるゝ姿の句ならば働きかけらるゝ姿の句と、同じ相に揃へることをいふのであります。

（後醍醐天皇の密計）あらはれぬとや思ひけん、かの者どもはやがて腹切りつ。又別當資朝、藏人內記俊基同じやうに武家へ捕られて嚴しく尋ね問ひ守り騷ぐ。事の起こりは御門世を亂り給はんとて、かの武士どもを召したるなりとぞ言ひ扱ふめる。

といふ文がありますが、前には「捕られ」と働きかけられる相に書いて、後には「尋ね問ひ守りさわぐ」と働きかける相に書いた所が、甚だ穩かでなく、從つて誰れの所行か不明になるやうな傾きさへあります。これは「武家へ捕られて嚴しく尋ね問はる」と、悉く働きかけられる姿にするか或は全體を武家の所行にして「武家俊基等を捕へて嚴しく尋ね問ひ守りさわぐ」とせねばなりますまい。

とにかく文章を解り易くするには、如何なる場合に於いても、如何なる人に讀ませる如何なる種類の文章に於いても、常に必ず秩序、聯絡、統一のあるやうに書かねばなりません。

十六

文章の意味が精確で解り易ければ、達意の文としては、まづ申分がないと云つてもよいが、それ丈では、まだ正しい滿足な文章とは云はれません。滿足な文章と云はれるには、精確明瞭な上に穩かなる事を要します。「穩か」とは人の氣に障らぬやう、讀む者に不快な感じを起こさせぬやうにすることであります。意味だけが解つても、氣取つた、不相應な、野卑な、尾籠な詞づかひなどがあつて、人に顏を背けさせるやうでは、まだ滿足な文章とは云はれません。こゝから見て純粹といふ事が必要になつて來るのであります。

純粹の要むる所は、まじり氣のない、立派な上品な國語を用ゐることであります。總じて不純粹不調和な取合はせは用が辨じても可笑しいものであります。洋服に足駄も可笑しい、烏帽子直垂に蝙蝠傘もをかしい、禮服に頬冠りも可笑しい。文章も之れと同じ事で、いづれの國にも其の國特有の語法といふものがあり、而して之れに從はないと雜駁で不調和で、正しい文とは云はれぬやうになるものであります。例へば「余は卵を食ひたり」と云へば怪しまずに讀めるが、「卵は余によりて食はれたり」と云へば變に感ぜられるであります。「身をつみて人の痛さを知れ」亭主の好きは客にもてなせ」と云へば調和した純粹な日本文となるが『新約書』にあるやうに、

己れ人に施られんとする事は、亦人にも其の如く施よ。

と云へは、同じ事でも、西洋くさく直譯くさくて立派な國文の仲間入りが六かしくなりませう。

「己れの欲せざる所、之れを人に施す勿れなども、欲を云へば漢文くさい不純な臭味があります。文を純粹にするには、表面から云へば其の國其の時代に遍く通ずる上品な語及び語法を用ゐねばなりません。裏面から云へば、外國語、廢語、濫造語、方言、術語、諺語、俚語等を用ゐないやうにせねばなりません。（イギリスの修辭學者は、此の事について National usage; Present usage; General usage; Reputable usage に從はねばならぬと云ふ事を云つて居ります。usage とは慣用例

即ち言葉の使ひ慣はしといふ事で、つまり文を純正にするには國民的慣用例に遵ひ、現代の慣用例に遵ひ、一般遍通の慣用例に從ひ、文學の大家の用ゐた、社會の嘉みし重んずる用語例に從はねばならぬといふことであります。但しどちらにも「特別の必要なき限り」といふ但書の要ることは無論です。

十七

第一、必要もないのに外國語を濫用するのは宜しくない。これは希臘の大昔以來やかましく云うて居る事で、イギリスなどでは外國語の濫用を夷ぶり(Barbarism)と云つて卑しんで居る位であります。例へば、廣く普通一般の日本人に見せる文章に於いて、「何國の何村は僕の故郷です」或は「搖籃です」と云つてよい所を、わざと「僕のクレードルです」といふのは變なものでせう。「氷を嚙み、砂糖を嘗める」と普通に云つてよい場合に、故らに「アイスを嚙み、シューガーを嘗める」と云ふのは變なものでせう。「東京停車場といふべきを「東京の車站」といひ「午前九時半頃」といふべきを「上午九點約半餉」といつたら變なものでせう。斯ういふ言ひ表はし方は、よし意味を明らかに傳へられるにしても、必ず聽く者讀む者の癪にさはり、感情を害して、立派な穩かな思想も、快く受け容れられぬやうになるであらうと思ひます。

同じ道理で邦語を外國文風に組立てる事も亦注意して避けねばなりません。例へば前に擧げた「卵は余によりて食はる」「私は海岸にまで行くべく急ぎつゝある」「今の政治家の誰れでも に向つて公正廉潔なるべく忠告する必要あり」の類ひで、個々の言葉は立派な穩かな日本語で

も組合せ方が夷人くさい爲めに、是れまた讀む者に一種の不快感を與へる嫌ひがあります。

一八

文章は言語と同じく、普通の場合には國本位なると共に時代本位なるべき筈のもので、今の人に讀ませる文章ならば、特別の必要なき限り今の語で書くべきものであります。此の點から見て避けねばならないのは廢つた語と自分細工の新語とであります。廢語の使用は古文好みの人の文に屢〻見るところでありますが、之れを讀ませられる多數人の迷惑は一通りではありません。例へば山陰道、山陽道の事を昔の言葉で「そともものみち」「かけともの道」と書いたら、學生を「かくしやう」と云つたら、どうか。これでは本來思想の橋渡しとなるべき筈の言語文字が、却つて思想を隱す雲霧となるでありませう。

新語の濫用も、同じ意味で愼まねばなりません。新語とはまだ世の中に廣く通じない言葉、自分勝手に造つた言葉で、例へば燐寸を「アメリカ附木」といひ、鐵道を「まがねみち」といひ、汽船汽車を「むしけぶね」「むしけぐるま」といふ類ひであります。無論新語を使つてよい場合、使はねばならぬ場合も多少はありませう。未曾有の新事物が現はれ出た場合、落ちつかない言葉を改良する場合などがそれであります。例へばエックス光線、ラヂウム、飛行機、自然主義といふものが新たに出來たならば、それを現はすべき新語が要るわけであります。「町奉行」といふ言葉が新時代に相應はしくなくなれば「裁判所」といふ新語を要し「倉役」「鍵役」といふ語が新時代に不適

當になれば「所得稅」といふ新語を要し、「まんざい」「はんぜい」といふ發音が今の世に適せぬならば「バンザイ」(萬歲)といふ新らしき讀み方を要するわけであります。しかし新語の使用は、かやうな特別の場合にのみ限るべきことで、普通の場合には、やはり其の時代に適する既存の言葉を用ふべきわけのものであります。

一九

次ぎに、國人一般に讀ませる文章は、其の國に遍く通ずる語で書くべき筈のものであります此の點から見て避くべきものは方言、術語、及び前に擧げた新語即ち(自分の勝手に造つた細工言葉)であります。

一地方の人に見せる文章、或は地方の特色を寫す小說などに於いてはおのづから別であるが、國人一般に見せようとする普通の文章に方言を挿むのは解りにくい嫌ひがあり、又穩かでなく、往々人に迷惑をかけることのあるものであります。橘南谿が出羽の國に旅して小佐川に往かうとした時に、雨降の夕方であつたが、次ぎの宿への道程を里人に尋ねると、鬼が出て人を食ふから見合せよと敎へました。南谿は之れを聞いて初めは人を馬鹿にすると思つてゐたが、よく〳〵尋ねると、此の地方では狼をおにといふ事がわかつてゞッとしたといふ事が『東遊記』に書いてあります。方言濫用の戒むべきことは是れでもわかりませう。

無論國人一般に見せる普通の文章に方言を挿んで面白くなることも度々あります。例へば歌や雅文などに方言を雜へるのも、たまには面白いでありませう。賴山陽が薩摩の方言で

詠んだといふ狂歌。

おこぢよたち、はよ來ちえ見やい櫻じめ、づだんばらから月がはつ出た。

の面白味は方言を用ゐた點にありませう。(お孃さん達早く來て御覽なさい、櫻島へ、中腹から月がひよいと出たといふこと)。十邊舍一九の『膝栗毛』などの面白味も半ばは方言を用ゐた點にありませう。こゝには唯だ特別の必要のない限り普通の文章に方言を濫用せぬがよいといふ丈であります。

專門の學問或は藝術にのみ用ゐる語を術語といひ、或は科語、專門語と申しますが、術語は本來專門の學術に關する文章にのみ用ゐるべきもので、普通人に讀ませる普通文に用ゐるべきものではありません。例へば「天氣が荒れて來た」と、通俗に云つてよい場合に、氣象學上の術語を用ゐて「低氣壓が波及した」と云つては厭味になりませう。「世の中の事は思ふやうにならぬ」と云つてよい場合に「主觀と客觀と一致せざるは世事の常なり」と云つては變なものになりませう。無論場合によつては術語を使つて文章の活きることもあり、殊に特別の專門家を寫す時などには、それ〴〵の專門語を使はねばならぬ場合もあります。例へば日蓮上人が人から物を貰つた時の禮狀に、よく

南無妙法蓮華經と給候畢。

といふ文句があつて、いかにもよく法華宗開祖の心持を現はして居りますが、かやうな特別の場合を除けば、術語を濫用せぬのが讀者の心を穩かに動かす所以であると云はれませう。術語の中で世間普通に行はれるものは、無論此の限りではありません。

二〇

その次ぎに注意すべきは品のよい語を用ゐる事、下品な語を用ゐぬ事であります。小說、戲曲などに於いて田舍者、泥醉漢、博徒、破落戸、などを、さながらに活き〳〵と寫すやうな場合は別として、普通文に於いては、成るべく上品な語を用ゐて文品を損はぬやうにせねばなりません。訛語、俚語、及び前にも擧げた手細工の濫造新語などは、此の點から見て避くべきものであります。訛語とは「なまり言葉」即ち語の本來の意味を間違つて用ゐたもの、俚語とは俗間に行はれる野卑な言葉、即ち俗語であります。

例へば「勉强」といふ語は、本來精を出して一所懸命に仕事をする事、殊に學問をする事に使はれましたが、後には轉じて商品の價をまける事に用ゐられるやうになりました。しかしながら「勉强する家は榮ゆ」といへば、一方には勉强の意味と誤られる恐れがあり、まけるの意とすれば文の品位が大いに下つて來るでありませう。「無用」といふ語は訛つて「すること勿れ」といふ禁止の意に用ゐられるやうになりました。けれども「往來無用なり」といへば、往來はいらぬ事といふ意にも取られる氣遣があり、又禁止の意に取れば文の品位が下つて來ます。誤字、假名遣ひ、讀み違ひなども、一種の訛語と見るべきものでありませう。宜を宣と誤り、析を柝と誤り、或は誠の道をふみな違ひぞ」と讀み、「進退谷まる」を「たにまる」と讀み、福祿壽を「ほくろくじん」と讀む類は、皆一種のなまりで、その文品を害ふこと少々ではありません。

俚語とは馬鹿、米羅棒、くたばる、へこたれる、けつかる、しやがるの類ひで、これが文章を不純にし、品位を下げることは特に云ふまでもありません。左の二つの例を御覽なさい。

夫れ山は動ざる形を現じて、古今に至る神道を顯はし、里は平安のちまたを見せて、人間長久の聲みてり。（謠曲、春日龍神）

中村（敬宇）先生の志に至りては、予之れを知ること詳かならず。然れども其の西國立志編をかき、西洋品行論をかきしを見るに、思ふに歐洲文明の道德的方面に着眼し、到底之れを移植するにあらずんば、國家の進運を期すべからざるを信ぜしならん。（帝國の新生命）

以上は主として雅文即ち中古文を標準として純粹、不純粹を論じたものであるが、しかしながら雅文のみが文章ではありません。文章には雅文があると共に談話體の謂はゆる口語文もあり漢文直譯體もあります。從つて嚴密に云へば、純不純は文章によつて異なるべき筈で、雅文が若し口語文や漢文や西洋文の要素を不純粹として斥けるならば、それと同じ理由で、口語文や漢文體の文章は雅文を不純粹として排斥することが出來ませう。要するに本尊たる當の文章の格好樣式に調和しない要素が取りも直さず不純粹なので、不純粹とはつまり不調和といふ事であります。尙ほ改めていふと、口語體の文章ならば首尾一貫して口語體にし、王朝式の古文ならば一貫して古文式にし、漢文調ならば一貫して漢文調にする、是れが純粹なる文章の要求する所と云つて差支ありません。前に「すべきなり」「あらざるべけんや」と云つて後に「である」「御座ります」といふのは不純であります。同じ人につき、前に「斯う〳〵された」「しかじか仰せられた」と敬語を使つて後に「云々と云つた」「かう〳〵いた」と書き下げるのは不純であり

ます。之れを要するに、普通人に讀ませる普通の文章に於いては、其の國、其の時代に遍く通ずる上品なる語を用ゐて調子の首尾整つた文を作る事、これが文を純粋にする所以であります。

二一

文章を穩かにする爲めに、純粋に次いで肝要なのは穩當といふ事であります。

精確、明瞭、純粋の三つの註文に合ひ、立派な言葉を用ゐて、紛れなく解り易く書いても、まだ滿足な文章とは云はれません、滿足な文章と云はれるには、其の上に穩當なる事を要します。穩當とは一々の語が寫される事柄に適當し、言葉や文句や譬喩や引事の選み方竝べ方が、場合場合に應じて、よく嵌まり、よく落ちつく事をいふのであります。

靨は頬にあれば愛嬌を添へるが、額にあつては醜い。御飯は飯櫃や茶碗の裡にあれば綺麗だが、吸物椀や刺身皿の中にあつては穢い。孔雀の羽は孔雀の身に着けば美しいが烏の翼に挿まつては相應はしくない。文章も其の通りであります。例へば「巨魁」といふ語は立派な語でありませうが、之れを大石良雄の場合に當てはめて「大石良雄は赤穂四十七士の巨魁なり」と云つては落ちつきません。「巨魁」といふ語が良雄の場合に嵌まらないからであります。抑も同じ意味の語はどの國語にも澤山ありますが、しかしながら、或時、或場合に於ける、或事物を穩かに適切に現はし得る語といふものは、世の中にたつた一つ丈しか無いものです。例へば「自分」といふ事を現はす語は、朕、我、私、わたし、わし、わあ、僕、拙者、小生、迂生、やつがれ、それがし、わらは、わたい、あたし、手前など三十四十は優にありませうが、其の中で或時或場合に於ける或人を適當

に現はし得る語は、たつた一つしかありますまい。「汝」といふ事を現はす語は陛下、閣下、貴下、足下、君、あなた、そなた、お前、手前、貴樣、そつち、われ、などゝ、それも澤山ありますが、其の中或場合に於ける或人を最も適當に現はし得るものは、只だ一つしかありますまい。而して其の適切に嵌まつた一語を用ゐないと、文章に落ちつきといふものが出來ず、從つて讀者に安心して氣持よく讀ませることが出來ません。是れが穩當といふ事の文章に必要な所以であります。

之れに關して參考になりさうな二三のお話を致しませう。

服部嵐雪といふ俳諧師が、謠曲「雷電」の一節を例にして、句を活かすには、いかにも適切で都合よく其の場合に當嵌まる事柄を引いて來ねばならぬといふ事を門下に教へたことがあります。「雷電」は、菅丞相は筑紫の配所に薨ぜられて後、雷神となつて讒者の一類を亡ぼされるといふ筋を書いたものであるが、其の中に菅公の亡靈が比叡山延暦寺なる舊師の法性坊を訪はれた一節があります。月白き秋の夜半に、法性坊が天下太平の御禱りに取掛らうとして居ると柴の戸をほと〳〵と敲く音がする。松風の聲か不思議やと物の隙より見れば、さきに筑紫で果てられたといふ菅丞相なので、驚きつゝも内に請じて、「さて御薨去の由承つていろ〳〵」に弔ひ申したが屆き候やらん」とたづねると「我れは此の世の人ではないが、切に賴み入りたき事があつて驚かした。我れ梵天帝釋の憐みを蒙り、鳴神となつて遠からず内裏に飛び入り、我れにつらかりし雲客を蹴殺さうと思ふ。其の時は朝廷より必ず僧正を召さるゝであらう。構へて御參りあるな。折入つて願ひまゐらすは此の事」といはれると、僧正はしばらく考へて、折角の御賴みなれば、宣旨はあつても一二度までは參るまじと答へらるゝ。丞相は重ねて「いや勅

使度々に及ぶとも必ず參内あるな」と頼まるゝ。押問答の末、僧正はきつとなつて「王土に住める此の身なれば、勅使三度に及ぶならば、いかでか參内申さゞらん」と答へられると、丞相の姿が俄に變はつて鬼のやうになり、

折ふし本尊の御前に柘榴をたむけおきたるを、おつ取つて噛みくだき、妻戸にくわつと吐きかけ給へば、柘榴忽ち火焔となつて、戸びらにばつとぞ燃え上がる。僧正御覽じて、さわぐ氣色もましまさず、洒水の印を結んで鍾字の明を稱へば、火焔は消ゆる煙の中に立ちかくれ丞相は行方も知らず失せ給ふ。

とあります。嵐雪がいふには、こゝに柘榴を用ゐたのは動かぬ所である。腹の立つまゝ、佛前に有りあふ物を取つたといふ所だから、一ず考へると蜜柑でも、饅頭でも、羊羹でもよささうなものだが、蜜柑や饅頭を噛んだのでは火が出來ぬ。柘榴の色が燃え立つやうに紅に、其の樣子が破裂彈のやうに威勢よく彈けて居ればこそ、之れを噛んで吐き出せば火焔ともなるであらうと想像されるので、此の場合柘榴の外に使ふべきものがない。斯樣な動かぬ材料此の場合これでなければならぬといふ材料、他の物で代理の出來ぬ材料を用ゐたればこそ、此の文が活躍して居るのである。發句に於いても此の用意が肝要であるといふ風に說いて居ります。

穩當は基礎論の上からのみならず修飾論、文體論、組織論のあらゆる方面に通じて最も大切なる注意でありますから、序にもう一つ昔の文人が穩當なる言葉を求めて苦心した御話を致しませう。

今から二百年も前の事、伊勢の阿濃津に川喜多自然齋といふ人がありました。壯年の頃頭

を丸めて京都に出で、洛外の千代の古道といふ所に住んで、わびしく風流の道を樂しんで居りましたが、或時

〇〇〇〇心の花をしをりにて夢に

といふ三十一文字の一部分(五句三十一文字の中の四句二十六文字)が御夢想でもあるかのやうに、ふつと心に浮かびました。自然齋はからぬ獲物に狂喜して、それから最初の五文字を附けようとして苦心しましたが、どうしても浮かびません。數百日間考へぬいたれども、どうしても案じつけられないので、遂に當時の歌界の棟梁武者小路實護卿に訴へました。實護卿は自然齋が殊勝な志に感じて數十日考へて呉れられたが、是れもどうしても考へつかないので、遂に靈元法皇に訴へました。法皇も殊勝に思召して數日間考へさせられたが、到頭落ちつた句が浮かばせられずして御返しになる時に「斯ういふ事は北野が得手だから、天滿宮へ行つて賴めと云へ」と實護卿を經て叡慮があつたので、自然齋はがつかりしながらも聖旨を畏みて、早速北野の社頭に七日の御籠りを致しました。二日三日は何事もなく過ぎました。五日六日やはり同じ事であります。滿願七日の夜を過ぐしても一向驗が無いので、その朝のほの〴〵明けにすご〳〵と社を辭して鳥居の方へ來ると、宮人が三人朝ぎよめをしてゐたが、其の中の七十餘歲とおぼしき老翁の宮人が、箒の手を休めながら同役に向かつて「おい御同役

この頃の事は思ひ寢になつたな。

と云ひました。其の言葉を耳にした自然齋の驚きと喜びとは、まあどんなであつたでせう。

それこそ天満宮の御告に相違ない、誠意が神に通じて長い間の苦心が報いられたのは有難いと、早速に社頭に歸つて喜びを申し、やがて實護卿を經て靈元法皇に奏聞しました。かくして名歌の片割が首尾よく相應はしい他の片割を見出して、こゝに纏目なしの自然な一首の歌が出來上がりました。

おもひねの心の花をしをりにて夢に分け入る三芳野の山。

「心の花」以下の二十六字の前に坐るべき一句は、此の「おもひねの」の五字以外に無いではありますまいか。昔の歌人にはかういふ涙の出るやうな有難い苦心をした人がありました。而してそれは要するに最も穩當なる一語を求め搜した苦心に外ならぬのであります。

如何なる事物でも、最も適切穩當に之れを言ひ表はし得る言葉は世の中にたつた一つ丈しかありません。此の唯だ一つの語を搜し當てる事が古來の名匠の最も苦心した所で、之れを搜しあてねば立派な名文章が出來あがらないのであります。故に語句事例の穩當といふ事は、一面から見ると文章通の極致といつてもよいのであります。尤も疵の無い滿足な文章を目安とする基礎の論に於いては、それほどやかましくいふ必要はないが、とにかく穩當なる語句を用ゐるといふ事が滿足な文章の大切な一要件たる事は爭はれぬ事であります。

二二

左に二つ三つ不穩當な文章の例を擧げて見ませう。或人の萬國史に、

ファビアスはカルタゴの滅亡を以て己れの任となしき。

といふ文がありました。おのづから滅びるるといふならば前の句を「カルタゴの討滅を以て」とするか、或は「カルタゴを滅す事を以て」と、他働風に書かねばなりますまい。

歐洲の社會の制裁と日本の社會の制裁とを比較して見ると、多少の差がある、多少といふよりは寧ろ反對の差がある。これはたゞ「寧ろ反對してゐる」といふべきでありませう。

反對してゐるては差のあるわけがない。

此の時代にはまだ麻醉劑が發見されなかつたので、手術室で患者の苦み叫喚く慘狀はダーキンの如き、凡ての苦痛に對して感情の鋭敏な人の到底見るに忍びぬ事であつたので、自分はどうしても醫者にはなれぬと、決心した。（邦譯種の起原、序）

なれないといふ決心は有り得べからざる事で、これは「醫者にはならぬと決心した」か、或は「醫者にはなれぬとあきらめた」とかすべきであります。

基督教に於ける人道福音は、家庭に其の泉を發し、流れ〳〵て遂に全世界に氾濫したのである。

氾濫は洪水の害の事であつて、弊害の廣く及んだ事にいふべき語ではない。人道の福音ならば「全世界を潤した」とか、「世界に弘布した」とかいふべきでありませう。

佳い方の例を引くと、最も廣く行はれて而も割合に解り易い古文の中で『徒然草』の如きは、ま

づ最も穩當なる文章に富んで居るものでありませう。此の點に着眼して此の書を讀んで行けば、到る處にぴつたりと嵌まつた言葉、落ちついた組立を見出だすことが出來ます。開卷第

一、

つれ〴〵なるまゝに、日暮らし硯にむかひて心に移り行くよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、怪しうこそ物狂ほしけれ。

の一句からして、まづ据わつて動かし難く、非を打つ隙間が無いやうではありませんか。「つれ〴〵」「日ぐらし」「よしなし事」「物ぐるほし」などには、それ〴〵「退屈」「ひねもす」「一日」「終日」「わけもない事」氣ちがひじみた」等の、同じ意味の言葉が澤山ありませうが、此の文の趣味風格を害はずに置き換へ得る語はまづ殆んど無いやうに思はれます。句作りとても其の通りで、しつくりと組み合つてよく聯絡調和して居る工合、一句も動かせようとは思はれません。要するに最も穩當なる語を選び出だして最も穩當に組み立てたからでありました。

名高い月花の論の條なども其の通りで、

花は盛りに月はくまなきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春の行く方知らぬもなほあはれに情深し。

「月は隈なき」は「月の曇らぬ」「月の光の照りわたる」ともいへませう。「たれこめて」云々は「籠もりゐて春の過ぐるを知らぬ」とも云へませう。しかしながら、さうすれば「くまなき」「たれこめて」の趣味風情が失はれてしまはねばなりません。組立方を見ると、「たれこめて春の行方知らず、雨に向ひて月を戀ふも……」と改めても、意味の上には差支がありません。しかしながら「月は隈なき」を直ちに承けて雨にむかひて月を戀ひ」といひ、次ぎに「春の行方」と云つて遙かに「花は盛りに」の初句に應じた面白味、或は前に花月と順序して、後に月花と次第した錯落の趣味が無くなるでありませう。とにかくこれも、一語も換ふべからず一句も移すべからざる名文であるといふことが出來ます。

二三

西洋の修辭學者の中には文體の要素或は性質といふ一つの大きな部類を設けて、其の中に前に說いたやうな精確、明瞭、純粹、穩當等の諸要素を含ましめ、尙ほ其の外にいろ〳〵な要素を竝べ說く人があります。其の心は、是等の要素は立派な文章の是非具へねばならぬ性質で、是等の基礎が無くては立派な文章が出來あがらぬといふのでありました。その列擧する數と說き方とは人によつて同じではないけれども、前に述べた四要件を說かぬ人は殆んどありません。又是等の四つの外に說かれるのはおもに左の數者であります。

諧調(Euphony)　耳に快く響くやうに口調よき語を選み又整へよといふ要求で、言ひ換ふれは、讀みよく、聞きよく、口づきよく、耳ざはりよく語を整へよといふ意味であります。それについて、文の勢力明晰を加ふるに必要な場合の外は同句同文の中に同語を繰り返すな、優美莊嚴、悲喜哀歡、それ〴〵に內容相應の語を用ゐよといふやうな注意があります。

調和(Harmony)　前の諧調とほゞ同じく、文の組立がよく整つて纏まつて口調よく讀めるやうに書けといふ意。和諧せる音を用ゐる事、感情を表はすに適した音を用ゐる事などがその

おもなる條件であります。

勢力(Power, Strength, Energy, Force)　文に力あらしめよ、強みを加へよといふ意で、それについて、思想上では眞摯直截なれ、言表上では平明簡潔なれ、短音の殊語を用ゐよ、語の重複を避けよ、文脈の移り目續き目のつゞけ詞に注意せよ、重要なる語を要所におけ、漸層的に排列せよ、重要ならざる語を結尾に置くことなかれなどいふ條件が說かれてあります。

統一(Unity)　文に締まり纏まりがあるやうに書けといふので、調和と通じて居ります。條件としては、成るべく主格を多くすることなかれ、關係の親密ならざる思想を一つのセンテンスの中に集むること勿れ、括弧的挿入的の記載を避けよ、センテンスを完了せしめよなどいふ事が說かれてあります。

安易(Ease)　諧調、優美、調和、圓滑、文雅、高雅(Euphony, Beauty, Harmony, Smooth, Grace, Elegance)等いろ〳〵の意味を含むものとして用ゐられてゐる。中には穩當と全く同じ意味に用ゐて居る人もあります。「目安く」とでも譯すべきでありませう。落ちついて、調つて、美しく、品よくといふほどの意味であります。

圓滿(Perfection)　手落なく言ひ盡へ磨き上げるといふ程の意で、變化あり、統一あり、口調よく、品よくといふのが主なる注意であります。

右の中で重く視られるのは精確、明瞭、純粹、穩當、勢力、諧調等でありますが、基礎といふ點から見て最も重く視られてゐるのは精確、明瞭、純粹、穩當の四つであります。要するに文章の基礎として注意すべき事は、まづ我が言ふ所が立派に思想を成すやうに、我が言ふ所の意義が誤解

されぬやうに、解り易いやうに、言葉の用ゐ方が立派で、落ちついて居るやうにすることであります。是等の註文が滿たされて、始めて正しい文、疵の無い文、達意の文滿足な文が出來あがるといふのであります。

二四

前に說いた文章基礎の要求は凡ての文章に必要な事でありますが、文章に關する注意がこれで盡きて居るといふのではありません。達意を主とする文章、例へば商工業家の實用文、數學、科學の文、法令の文などは、基礎的要件を充たした丈でも十分であるが、美術的文學的の文章、例へば論文、詩歌、小說、戲曲などいふものになつて來ると、尙ほ其の上に美なる事があり、趣致風韻のある事、趣致あらしめ、趣致風韻あらしめる事を文の修飾といひ、修飾の仕方形式を詞姿と申します。次ぎに修飾、詞姿の何たるかを說く爲めに、簡單に基礎と修飾との關係を述べませう。

文章を美しくするには先づ之れを正しくせねばなりません。文を正しくする事は文を美しくする事の土臺であります。文を正しくするに主として必要な事は前に述べた精確、明瞭、純粹、穩當の四つであるが、尙ほ他の方面から之れを二つに概括することが出來ます。一つは趣意が立ち筋が通るやうにする事で、之れを論理的要件といひます。もう一つは國人普通の言葉遣ひに從ふ事で、之れを文法的要件と申します。修辭は此の二つの要件を基礎として其の上に立つのであります。卽ち論理と文法とを脚下に踏まへ、更に其の上に出でて、文章に琢

麽をかけ光澤をつけるのが修辭の本領であります。論理は文章に表はす趣意を與へます。文法は其の趣意を言ひ表はす方式を示します。此の二つは修辭の足掛(あしがゝり)を拵へられるので、其の足掛を踏みはづし、其の法則を破つては、百千の美辭名句も砂上の樓閣同樣で何の役にも立ちません。つまり文章の第一義は思想の傳通といふ事で、書く事が理窟に合ひ、書き方が普通の用語法に從へば、我が思ふ事は先づ滯りなく讀む者の心に通ずる。かくの如き文を稱して達意の文といひます。而して修辭とは達意の文に修飾を施す事の謂ひであります。故に論旨を供する事と用語法を敎へる事とは、共に修辭の本領ではありません修辭の本領は、與へられた趣意を遍通の語法に從つて適切に美しく言ひ表はすにあります。文章を達意以上、間に合ふ以上に美しくするにあります。而して此の美しくする形式、卽ち修飾の仕方を稱して詞姿(Figures of speech)といふので、要するに詞姿とは詞のあやなし方、換言すれば言ひ表はし方の變態卽ち思想發表の形式が普通と違つて人を感ぜしめるものをいふのであります。

例へば「松島は景色のよき所なり」といへば、意味が解るといふ丈で一向面白くもありませんが「松島やあゝ松島や〳〵」といへば大層面白くなりませう。「非常に危し」と云へばそれきりの事であるが「危きこと累卵の如し」といへば特別の趣味が添うてまゐりませう。「貴樣は馬鹿なり」といへばつまらないが「馬鹿だ貴樣」と倒まにいへば面白くなりませう。是れは竝一通りの言ひ表はし方によらずして、或は咏嘆し、或は譬喩を用ひ、或は倒まに言ひ現はした爲めで、かやうな變はつた形式を用ゐると、譬へば人が紅白粉(べにおしろひ)をつけ、衣冠束帶することによつて美しさと品位とを增すやうに、思ひもかけない趣致風韻が添うて來るのであります。

尙ほ一二の例を引いて見ますと、例へば「朝日が梅の花を照らす」といふ事を言ひ表はすと致しませう。その言ひ表はし方は「梅花旭日に映ず」「梅の花朝日に照らさる」「梅が香ふ朝日が照らす」「梅花に朝日」など、外にもいろ〳〵ありませうが、是等はいづれも文法に合つて思想の筋の滯りなく現はれた、間に合ふ役に立つ文であります。しかし唯だ間に合ふ役に立つといふ丈で、趣致風韻の味ふべきものが殆んどありませんが、一たび修辭の文飾が加はると、面目が忽ち一變して、一脈の春溫どこともなく讀者の胸の奥にしみわたるやうになります。

梅が香にのつと日の出る山路かな(芭蕉)

言ひ表はす事柄が殆んど同じくして風韻は雲泥の違ひがある。こゝに至ると「間に合ふ」「正しい」などいふ境を通り越して神品已に塵界のものではありません。

かやうな例は他に幾つもありませう。「今日は暑いな〳〵」とは誰れも思ふ夏の日の感想であるが「いふまいと思へど今日の暑さかな」といふと盡きぬ味はひの生じて來るのは何の爲めか。「秋の夜の空に星が光る」といふありふれた事柄が

星すでに秋の星の眼を見ひらきぬ(紅葉)

の十七字となつて俄かに讀者の眼を見ひらかせるのは何の爲めか。「一雨降ればよい」といふ平凡な思想が「あはれ一村雨のはら〳〵と降れかし」の一句となつて人の心を動かすのは何の爲めか。外ではない、修辭の文飾が加はつた爲めであります。古來和歌が有りふれた事柄、誰れも思ふ思想を歌つて、人の心を和らげ、天地を動かし、鬼神を感ぜしめると稱へられたのも、半ばは修辭の力によつたのであります。無論修辭に萬能の力があつて、無中に有を生ずるので

はありません。それは唯だ與へられた思想事柄を種子とし、之を心核として其の周圍に相應はしい美しい衣裳を纏はしてやる丈で、その衣裳の纏はせ方、裝飾の附け方によつて、いふに云はれぬ趣味光彩が加はつて來るのであります。例へば、用語を選む事、語句の順序を定める事、本尊の思想に緣の深い事物を添へ加へる事などが、其の裝飾手段のおもなるもので、かやうな裝飾手段の文章を美にし、清くし、強くし、莊嚴にする具合を知るのが、修辭研究のおもなる仕事であります。

修辭、詞姿の分類或は、之れを支配する原理などについては、いろ〳〵の說があつて一定して居りません。或は單語の修飾と語句聯絡上の修飾といふ風に、二つに分け說く人もあります。或は人間の心理の三大區分たる知、情、意の三面から見て、詞姿を三つに分けて說く人もあります。或は文字上の詞姿、語性上の詞姿、組立上の詞姿、修辭上の詞姿といふ風に、四つに分けて說く人もあります。或は類似、聯想、對照の三點より見て說かうとする人もあります。或は聯想一點張りであらゆる詞姿を說明しようといふ人もあります。が、私は文章が讀む者の心に與ふる刺戟、その刺戟に對する吾等の心の感應といふ點を標準として八種の原理によつてあらゆる詞姿を說明したいと思ひます。

抑も如何なる文章が美しいか、面白いか、味はひがあるかといふのは、つまり人の心が本來如何なる言ひ表はし方を好むやうに出來て居るかといふ事になります。元來人の心には如何なる言ひ表はし方に對して快感を覺え、いかなる言ひ表はし方に對して不快感を覺えるかといふ一種の本性があります。一切の文章は此の本性に或は調和し或は背反するが故に、或は

名文と感ぜられ、或は惡文と感ぜられるので、此の本性即ち文章を感じ受ける心持が解れば、文章に關する凡べての修飾が根本的に說明せらるべき筈であります。

私の考へによれば、かやうな本性が八つあります。第一は事物のあり〳〵と固めて言ひ表はさるゝことを喜ぶ本性で、かやうな性質のかやうな言表を喜ぶ理法を結體の原理と名づけます。第二は刺戟の强過ぎる或は氣に障る事物を寫す時に朧ろに稀薄化さるゝ事を喜ぶ本性で、その理法を朧化の原理と名づけます。第三は現はさるべき本義が、相應はしい景物を添へて內容を富まさるゝことを喜ぶ本性で、その理法を增義の原理と名づけます。第四は言ふべき事をもわざと省いて餘意を存し、奧行を深くする事を喜ぶ本性で、その理法を存餘の原理と名づけます。第五は作者の言ふ所が讀者の心に苦もなく融け込むやうに段取の無理なく整へられた言表を喜ぶ本性で、其の理法を融會の原理と名づけます。第六は奇異なる意外の言表に讀者の度膽を拔いて、後に其の衝突の解けた所に趣味を覺えさせるもので、其の理法を奇警の原理と名づけます。第七は人の感じ方に順なるやうに、見よく、聞きよく、感じよく、口づきよく、耳ざはりよく、心ざはりよく言ひ表はされたものを喜ぶ本性で、其の理法を順感の原理と名づけます。第八は人の感に逆らふ言ひ表はしでも、場合によつては美に感ぜられるといふ理法で、之れを變性の原理と名づけます。

希臘羅馬の昔から今日に至るまで多くの修辭學者の說かれた詞姿の數は三百餘種の多きに上りませうが、私は三百餘種が、此の八種の詞姿原理によつて、悉く根本的、心理的に說明されるやうに考へられます。左にざつと此の八原理の說明を試みませう。

二五

結體の原理は吾等の心が事物のありくと固めて言ひ表はされる事を喜ぶ理法で、俗に和らげては「固めの原理」と云つてもよいと思ひます。凡そ人の心の中にある思は無形のもので之れを他の人に傳へるには是非とも有形にして、相手の目、耳、口、鼻等の感官が見聞き、感じ得るやうにせねばなりません。是れが人間の社交性の自然の要求であつて、從つて言ひ表はす事物がはつきりと形を結んで感官に著るしく感ぜられる文章ほど、讀者に快感を與へるわけでありますが、殊に無形な抽象的の事物になつて來ると、之れを有形的に、具體的に感覺的に言ひ表はす所に言ふべからざる味はひが生じて來ます。空にぼんやりと考へねばならぬ事を見るやうに、聞くやうに、摑めるやうに言ひ表はした文章、空理を具現した文章、かやうな文章に對して愉快を感ずるのは人性の自然であります。

無形抽象の事柄を有形的に、具體的に感覺的に、見えるやうに、聞こえるやうに言ひ表はせば、むづかしい事が非常に解り易くなるのみならず、其の具體的に感覺的になつたといふ所に一種の味ひが添うて來ます。例へば、眞如といふ語の如きは、坊さんの一日の說法位では容易に呑み込み難い六ケしいものでありますが、之れを有形具體の「月」といふものに寓せて「眞如の月」といへば、佛教に關する知識の殆んど無い者でも、さては宇宙の本體は月のやうに圓滿で光のある、永劫のものといふ事かといふ樣な想像がついて、かやうな難語の味はひでも、曲りなりにどうやら解つて來ます。意義の解つて來るのみならず、それと同時に月を聯想して限りなき味はひを感じて來ます。「志を定める」と云つては、別に面白くもないが、「理想を立てる」といへば有形の物を樹立する趣が思ひ浮べられて面白くなります。「思ふ事を云はねば腹ふくるゝ」といへば、秘密にして置いた考が內攻して腹の皮の膨脹した有樣を思ひ浮かべる故に面白くなつて來ます。「抱負」と云へば赤ン坊のやうに抱いたり負つたりして育てるといふ具體的の樣子が見える故に、「志」「見識」などいふよりは一層趣があり、「肩幅が廣い」といへば、昂々然として大道を濶步する姿が思ひ浮かぶ故に、人に恥ぢぬといふのに比べて大分味はひがあります。『妹背山女庭訓』といふ淨瑠璃に、相思ふ男女が谷川に隔てられて、相見て言葉をかはしながらも一緒になり得ない事を怨み喞つところを寫して「心ばかりが抱き合ひ、せん方涙先立てゝ」と云つて居りますが、かやうな文章の面白味も、主として無形の心持に有形の趣を加へて、見るやうに、摑んだやうに思はせる所にあるのであります。

論理的に謂ふ三段論法の原理といふものは「乙に含まるゝ、甲は乙の含まるゝ、丙に含まる」といふのでありますがかういふむづかしい抽象的の理窟は餘程知力の發達した人にも解りにくいけれども、之れを有形化、具體化して「インキ瓶に含まるゝ、インキはインキ瓶を含む宝に含まる」といへば小學校の生徒にでも容易に理解されるやうになります。すべて無形な精神的の理窟は有形具體の物を離れて容易に考へ得べきものではありません。昔支那の墨子といふ聖人は白絲を見て人間の邪道に染み易きに泣き、楊子といふ聖人は十字街頭に立つて人間の迷ひ易きに涙したと云はれます。楊子、墨子のやうに聖人とも呼ばれて、人生の酸いも甘い

も嚙みわけた達人できへ、白い絲を見四辻に立たなければ、人間の惘れむべき事をしみ〴〵と
は感じ得なかつたものと見えます。これを見れば世の中に理窟くさい慈悲や克己の說法を
聞く者より、地藏樣や不動樣を拜む者の多いのは少しも怪しむべきことではありません。有
形化、具體化を好むのは人性の自然で、人間は生れながらにして偶像教徒であるとも云へます。
私は小さい時分に「論語」を讀んで、朱子一派の儒學者が「仁」は心の德愛の理也」といふ調子の不
得要領な抽象的註釋に苦しまされたことがありましたが、其の後『鳩翁道話』を讀んで、
仁と申す事は畢竟トント無理のないと申すことで御座ります。此の無理のないのが卽
ち人の心ぢやと孟子は仰せられました。此の無理のない心を以て親に事へまするとも孝
行になり、主に事へまするとも忠になり、夫婦兄弟朋友の間もまた〳〵其の通で五倫の道
はやすらかに調ひます。其の無理のない仕樣は親は親のあるべきやう、子は子のあるべ
きやう、夫は夫のあるべきやう、女房は女房のあるべきやうが無理のないところで、卽ち仁なり、又人の心で御座ります。警へて申さば、此の扇は誰れが見ても扇
いとこぢや、扇と知つて、これで鼻汁かむ人もない、これは是れ扇のあるべきやう、禮儀
ぢや、扇と知つて、これで鼻汁かむ人も尻拭ふ人もない、これは是れ扇のあるべきやう、禮儀
に御用ゐなされるか、開いて風を求めるか、此の外に仕樣はない。此の見臺も其の通りで、
棚の代はりにもならず、又枕のかはりにもなりませぬ、やはり見臺のあるべきやう
に御使ひなさる。然れば親御樣を親御樣と覺じたらば、御孝行になされるが子たる者の
あるべきやう、是れが仁なり、人の心で御座ります。
といふ風の具體的な說明振を見て、同じ事が是れ程に解り易く、面白く說けるものかと感心し

たことがありました。『鳩翁道話』は德川時代に於ける言文一致の隨一であるが、その人を惹き
つける主なる味はひは、專門の儒者達が四角四面に喰ひしばつて空漠なる抽象的の說明をす
る仁義禮智孝悌忠信を、俗にくだいて、具體的に固めて見せる所にあります。「心之德、愛之理」は吾々普通人には關係の薄い學者詞であるが、扇を見せ、見臺を見せ
て「此の見臺がかうだ」「この扇がどうだ」と說かれれば、其の說法は、自然に聽く者の目から、耳から、
鼻から、皮膚から、固まつて入つて來るべき筈であります。此の呼吸は熟練なる辯士の演說振
を見れば更によくわかります。原稿にたよるやうなたど〳〵しい演說家は例や譬喩を引く
にも、くつ付けたやうな遠方の借り物を持つて來るが、馴れた優れた演說家になると、すぐ手近
な眼前の物を引いて來る。例へばテーブルの上のコップを持ち上げて「例へば此のコップで
すがね」といふ調子。コップの透き通る影は聽衆の目に見える。コップのテーブルにあたる
音は聽衆の耳に聞こえる。辯士がコップを撫でまはしつゝ水を飲むのを見れば、聽衆の味覺
も觸覺も刺戟されて、自然にコップの舌ざはり手ざはりをも思ひ浮べる。かくして無形なる
精神上の說法も吾々の目、耳、鼻、口、皮膚を通ほして腦の中にあり〳〵と形を結ぶので、此の呼吸
は文章說話を面白くするについて、見逃してはならぬものであると思ひます。

眞夜中の淋しさを寫すにも、唯だ「靜かだ」「淋しい」「森としてゐる」「そよとの物音もしない」と云つ
た丈ではその淋しさを活かして思ひ浮かべる事は出來ませんが、「鼠のカサコソと魚骨を引く
音」「狐のコン〳〵と啼く聲」を一寸點ずると、夜半の淋しさが忽ち固まつて形を結んで來るであ
りませう。唯だ「世帶じみて來た」「暮らしに追はれる」「生活に疲れる」といふ丈では單に事柄が理

解されるといふ丈であるが、長谷川二葉亭氏の『平凡』といふ小說の中にあるやうに、

大抵は皆私のやうに苦勞に負けて、年よりは老い込んで意久地なく所帶染みてしまひ、役所の歸りに鮭を二切、竹の皮に包んで提げて來る氣になる。

と云へば、其の所帶染みた哀れな樣子が、讀者の腦の中にあり〳〵と形を結んで現はれて來るでありませう。

此の樣に無形抽象の事を、具體的、有形的、感覺的に固めて形を結ぶやうにすれば、文章が面白くなる、讀者が之れを見て感心するといふのが、私の謂はゆる結體の原理の趣意であります。而してその固める方法は、成るべく有形の物、感覺的の物に寄せて見るやうに、聞くやうに、觸るやうに感ぜしめるといふことに歸するのであります。

二六

第二の原理は結體の原理の裏ともいふべきもので、之れを「朧化の原理」或は俗語に和らけて「ぼかしの原理」とも申します。銳く人の感を惹き、或は感情を害する傾きのある事をやはらげてぼかして朧ろに薄くするといふ意味であります。本來吾等の心は普通の場合には無形抽象の事物が具體的に固めて言ひ表はされることを喜ぶものでありますが、特に刺戟性の强い事物例へば下掛つた事、性慾に關した事、金錢に關した事といふやうな特殊の除外例になると、具體化、有形化、濃厚化されるよりは、寧ろ抽象化、稀薄化、朦朧化されることを喜ぶものであります。刺戟性の事物には、一部を聞いても直ちに察して眉を顰める類ひが多く、從つて具體化する必要がありません。刺戟性の事物の具體的言表は人の感情を害して、人を怒らせ、羞ぢさせ、顏を赧らめさせるのみであります。朧化の原理は刺戟性の事物を寫して而も人の感情を害せぬのみならず、一種の床しい趣味を添へることを教へるものであります。

例へば糞尿は人の最も厭ふところで、其の語をだも好まぬものであります。故にたしなみのある人は成るべく之れを口にしないが、どうしても云はねばならぬ場合には糞といひ尿といひ、「くそ」といひ「小便」と云はずして「手水」といひ、「不調法」といひ、大用、小用といひ、「山吹色をまき散らす」などいひます。而してかやうな廣い、薄い、漠然として他の事物にも兼ね用ゐられる語が、人の氣に障らぬやうに、當の物をはつきりと指示すのみならず、時には一種の趣味をさへ添へることがあります。便所の事を「かはや」といひ「雪隱」といひ「はゞかり」といひ「かよひ所」といひ、或は外國語にぼかして "Water Closet" といひ、或は更に頭文字だけにぼかして W. C.といふのもかやうな心理の自然に生んだ用語例であります。「金を貸せ」といふ事は言ひにくい事で、又人の氣をわるくすることでありません。故に解つた人は「金を貸せ」とは云はずして、「少々御拜借を願ひたい」とか、「アノ何を一寸都合して戴きたい」とか、「M を少々」とかいふのが、こんな譯のわからぬ漠然たる言葉でも、當の意味を明確と傳へるのみならず、かういふ場合には、かういふ曖昧な語の方が却つて相手の心に柔らかに響いて、目的を達する所以となるのであります。質屋の事を「七つ屋」といひ、「五二會」といひ、「一六商會」などいふのも、賄賂を「袖の下」「臺の上」などいふのも、博奕うつ事を「鹿の角を揉む」といふのも、皆同じ道理であります。病人は神經が昂ぶつて、自分の病氣を云はれることを好まぬものであります。故にもし肺を病む人を見

舞つて「肺がわるいさうだが散々だね」と云ひ「血を吐いたさうだがどの位出たね」と云つたならば、すぐに神經に障つて、かつと來るでありませうが、同じ事でも薄く汎くぼかして「胸の方がよくないさうだが御散々だ」「赤いものが出たつてね」と云へば、云ふ者も云はるゝ者も、快く受け應へすることが出來ます。死ぬる事を「身まかる」といひ「逝く」といひ「永眠」といひ「かくる」といひ「神さります」といふのも同じ意味合ひでありませう。『吾妻鏡』など其の他の古文書には、貴人の死なれた事を唯だ「御事」といひ例へば賴朝の死んだ事ならば「何年何月何日の何の刻に右大將御事」といふ風に書いてありますが、是等は、ぼかしの原理の人性に自然なる事を最も面白く說明したものであります。思ふに、世の中で最も廣い漠然たる言葉は「物」と「事」との二つの語でありませうが、我が國の文章に於いて「物す」といふ語が"to do"の意味になつて、あらゆる行爲動作を表はすに用ゐられ「御事」といふ言葉が人生の最も感傷悲痛の事たる「死」を表はすに用ゐられたのは實に面白いことであります。殊に此の二語が情の生活に最大の興味を感じた平安朝の文書に盛んに用ゐられたのは更に面白いことではありませんか。

人の心の働きは實に微妙不思議なものであります。「汝は不德な男である」「汝の魂性は腐つて居る」と云はれて、ムキになつて怒る青年でも、「今の青年は皆不德を敢てする」「今の青年は悉く魂性が腐つて居る」と云はるれば、自分も不德を敢てする腐敗漢の中に含められて居ることを知りつゝも、平氣で怪まないのが常であります。朧化の原理は、一つはかういふ人情に合ふのでありませう、本來人の感情を害する事でも、朧ろにぼかせば不思議に人の氣に障らぬやうになるのみならず、其のぼかした所に一種の趣味さへ生じて來ます。井原西鶴の浮世草子と源氏物語とが、同じやうな情生活中心のたはれた事を書いて居りながら、西鶴が內務警視の御目玉を喰つて發賣禁止の厄に遭ひ、不義破倫を一層多く寫した源氏物語が堂々と女學校の教室に講義されてゐるのは、一つはぼかす筆致の有無多少から來て居るのであります。我が文學の中で最も多く此の筆致を用ゐたのは平安朝の假名文學でありますが、男女間の情に最大の興味を見出だした平安朝文學に、朧ろに言ひかすめる筆致の最も多く用ゐられたといふのは、それまた朧化の原理の人性に自然なる事を面白く說明したものであります。

二七

第三は增義の原理、和らげて言へば「ふやしの原理」で、言ひ表はす當の事物に關係のある事物を添へ加へて內容をふやし意義を富ますといふ意味であります。例や譬喩を引き、古事古語を引き、枕詞、掛詞を用ゐるなどは、一つは皆此の目的によるのであります。つまり言ふべき丈の事を通り一遍に竝べる丈では面白くないが、相應はしい添物をして內容を豐かにしてやると、文章が面白くなるといふのが、此の原理の教へる所であります。例へば唯だ「非常に危い」といふだけではつまらないが「累卵の危さ」と云へば、卵を累ねた危險な樣子が加はる故に、非常に味はひが豐富になつて來ます。「賴朝を伊豆に流しては末が恐ろしい」といふ丈では平凡であるが、「虎を野に放つが如し」といへば、添物の譬喩の爲めに大層面白味がついて來ます。唯だ「日本國」或は「瑞穗國」と云つた丈では面白くないが豐葦原の千秋の長五百秋の水穗の國と序詞を添へれば、文句が非常に光つて來ます。「改心せよとは無理だ」と云ふ丈ではつまらないが「極

無理な意見魂入れかへろ」といへば、諺のやうに、味はひが深くなります。「餅はつくこれから嘘をつくばかり」と云へば、「つく」といふ一語が「吐く」「着く」といふ二語の役廻りをなしてゐる故に意味が豊かになつて來ます。昔の文學書の名前などは、概ね此の方針でつけたものでありました。例へば「大阪落城記」とか、「片桐且元の末路」とか云つた丈ではつまらないが「桐一葉」といへば、桐一葉落ちて秋の到るを知るといふ、豊臣家の滅亡に瀕した淋しみや、豊臣家の紋が桐であつた事や、片桐且元と其の妻一葉の前とか作中のおもなる人物である事やが思ひ浮かべられて、三重四重の豊かなる味はひがついて來ます。

景物の添ふことを喜ぶのは人情でありまして、意味で讀者を悦ばす所以となり、從つて斯様な文章は味はひの豊かな面白い文章として愛でられるやうになるのであります。

二八

第四は存餘の原理で、和らけては取置の原理、餘しの原理省きの原理と云つてもよい。言ふべき事を言ひ盡くさずに、一部を省いて讀者の想像に補はせるといふ意味で、一部を取つておいて想像の餘地を存するといふところから名づけたのであります。世話にも行き屆き過ぎて小言を云ふ隙間の無いやうな嫁は却つて姑の氣に入らない、それ故利巧な嫁は、わざとよい程に過失を見せて、姑に指圖をさせると云ふではありませんか。いかにも人情を穿つた言で例へば賢い嫁ならば、掃除をする時に隅々を綺麗に掃く位の事は、とくに承知して居るが、承知しながらわざと大きな塵を片隅に殘しておくと、姑が見廻つて「これお花や、何といふ掃除のざまだ。此の隅の塵を見なさい。」「居候角な座敷を丸く掃き」と云つてな、これは居候掃除といふものだ。氣をつけなさい」と云ふ。「どうも濟みません、これから氣をつけますから、どうぞ御許し下さい」といへば、姑は餘計な事に頭を使ひながら、ほく〳〵喜んで居る。文章も其の通りで、讀者は此の姑の様なものであります。讀者の頭を使ふ必要が全く無いやうに、言ひ盡くした目のつんだ文章は讀者に歡ばれずして、左迄骨折らずに補ひ得る事は、わざと言ひ殘して讀者の想像に任せる方が却つて歡ばれます。作者の世話が屆き過ぎて言ひつくしてゐると、くどいと言ふ。此の位の穴は貴君の頭でお塞ぎなさいと云つて省いておくと讀者は自分の頭を使めながら、いや餘韻があるとか、暗示に富んで居るとか云つて喜ぶ。人情は實に妙なもので ありますが、此の人情に從つて文章に餘意あらしめる事を教へるのが取置の原理であります。

例へば「拜啓貴君愈御清福」といふのは、しばく〳〵見る手紙の文句でありますが、貴君へやる事の解り切つた手紙に「貴君」とことわるよりは「無い方が床しく面白いであります。『萬葉集』の中に「さきはひのいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が聲を聞く」といふ歌があります。これは「我れは妻を失つて男やもめのあはれな境涯になつて居るが、世の中には黒い髪の白くなるまでめでたく添ひ遂ける夫婦もあらう、そも如何なる仕合人が黒髪の白くなる迄愛らしい妻の聲を聞くことであらうかといふ意味であります、羨ましい他人の上のみを云つて、自分の妻に後れた悲みを言はぬところに切なる悲みが奥床しく現はれて居るではありませんか。「高襟をつけた生意氣な男」「チョン髷を結つた天保時代の御爺さん」といふべきを「あのハイカラ

が…」「このチョン髷が…」といふやうに、一隅を挙げて四隅を察しさせる筆致の面白味もこゝにあります。斷定してよい事を疑問にする文章の面白味もこゝにあります。正面からいふべき事を裏面からいふ文章の面白味もこゝにあります。新井白石が『折たく柴の記』の中に、その父が主君を諫め、情熱の餘り、我を忘れて顔を蚊の刺すのも知らずに居た事を寫して、

また宣ひ出だす事もなく、われもまた申し候ふ事もなくて侍ふ程に、やゝあつて面に蚊の集まりぬるに、逐ふべしと宣ひし程に面を動かしければ、血に飽きて胡頽子の如くになりし蚊の、六つ七つはら〳〵と地に落ちしを懐の紙を取り出だして、包みて袖にして侍ふ。

と云つて居ります。「我れを忘れて蚊の食ふのも知らずに居たが」などと隙間なく書き並べれば、それつきりの平凡な文章となるのですが、一桁おろぬいて、面を動かして始めて蚊のたかつてゐたのに氣がついたといふ餘意多き筆致によつて、此の場合の情景が床しく面白く寫し出だされたのであります。

要するに讀者が頭を痛めずに補ひ得るほどの事は、省いて取つて置くがよい、それが文章に餘韻あらしめて、云はぬは云ふにいやまさる味はひを添へるといふのが、此の原理の教へる所であります。

二九

第五は融會の原理であります。和らげて「整への原理」と云つてもよい。これは段取を整へて我が趣意が讀者の心にたやすく入るやうにせよといふ意味であります。道路に凸凹がなく割れ目や、裂け目や、傾斜や、障壁や、水溜りなどがなければ、道行く者が安心して容易に目的地に達し得るやうに、文章も餘計な附加や、省略や、中止や、飛躍や、横ぞれがなく、着々と歩を追うて、近きより遠くに、已知より未知に、易きより難きに進んで行けば、讀む者が心行く思ひして、頭も痛めず、肩も凝らずに、片隅からうなづきながら理解して行くことが出來ます。教育者が豫備、教授、應用など云うて、三段、五段のやかましい教授法を說き、文章家が起、承、鋪、叙、過、結といひ、或は序論、說話、論證、結論などいうて、やかましい組織體製の論をするのも、一つは此の爲めであります。腦味噌の無駄使ひを忌み嫌ふのは本來人間に備はつた性質であります。從つて腦味噌を無駄づかひさせぬ文章、言ひ換へれば手早く呑み込める文章を見ると快い氣持がして、よい文章だと感ずるのであります。

いつぞや基督教の大擧傳道の演說が東京神田の錦輝館にあつた時に、或辯士が口切りに「我輩は日本人が基督教を奉ぜざれば日本が亡びると斷言する」と云つて、擲れの、殺せのといふ大騒ぎを仕出來したことがありました。そも〳〵斯樣な大膽な結論を掲げるには、その前提として餘程の準備をしなければなりません。例へば實例によつて、古來基督教を信ぜずして亡びない國が一つも無かつた事を證明するとか、或は理論上から、基督教の旨意に合はぬ國に存在の權利のない事を證するとかいふやうな準備を要するものでありませう。かやうな準備があつて着々と論歩を進め論旨を充たして、さて後に結論を掲げるならば、基督教に同情をもたぬ聽衆でも、とにかく靜かに聽くでありませうが、頭から斯樣な暴論を聞かされては、人情として何人も不快を感ぜぬわけには行きますまい。蓋しよく整つた文章は、讀む者をして坦々

たる大道を行き、そよ風に吹き送られつゝ程よい勾配の坂を下るやうな快味を感ぜしめます。人の心の自然の要求に適應して居るからであります。

三〇

第六は奇警の原理であります。和らげては「驚かしの原理」と云うてもよい。融會的の文章とは反對に、思ひ設けぬ立言によつて人を驚かし度膽を抜くのも、亦文章を面白くする一面の要素だといふ意味であります。人の心は坦々たる大道を行く事に愉快を感ずると同時に、危岩怪石の亂れ立つた絶壁の間を行く事にも愉快を感じます。順風に帆を孕まして流れを下ることを好むと共に、激浪怒濤天地晦冥のすさまじき光景にも興味を感じます。文章に於いても其の通りで、一方に解りよく言ひ整へた言表を面白く思ふ心があると同時に、奇抜な、不思議な、突飛な、亂暴な、狂氣じみた言表を面白く思ふ心もあります。此の前の心の傾きに應ずるのが融會の原理で、後の心の傾きに應ずるのが奇警の原理であります。無論兩方とも、つまりは文章中の新觀念を讀者の心に馴染ませ落ちつかせるのを主眼とするのではありますが、唯だ其の落ちつかせ方について、融會の原理の方は、何等の衝突もなく素直にやす〳〵と落ちつかせる方法を教へ、奇警の原理の方は、先づ是れは變るものだ、不思議なものだと怪ませ、一衝突させて後に、成程これも食へる、面白い、やはり敵ではなくて味方であつたと、胸を撫でおろして落ちつかせる方法を教へるのであります。前者は牛乳を飲ませるやうなもので、安心して飲めるそしてすぐに消化する。後者は炒豆を食はせるやうなもの、石塊の樣で、食へさうもないが、噛みしめれば味はひがある、而もたゞの平凡な味ではなく、張合のある手應へのある味を與へる。

例へば警句の如きは主として奇警の原理に立脚したものであります。「急ぐならば近道を行け」「世の中に雪ほど白いものはない」「與ふるは失ふなり」「負けるは敗けるなり」と云へばたやすく解るだけで、張合がないけれども「急がばまはれ」「何と見ても雪ほど黑いものはなし」「與ふるは取るなり」「汝に出づるもの汝に返へる」「負けるは勝ち」といへば、一寸見にはいかにも不合理のやうで人を喫驚させるが、よく考へれば成程と案を打たせる深い味はひがあります。或は「老子が大道廢れて仁義あり」といひ、カアライルが「窓から蜜柑を投げて中たつた奴を大臣にせよ」といつたやうな奇言或は馬鹿者を「お悧巧なお方」といひ、奸物を「大忠臣」といふやうな反語、これらの言表の面白味は皆一見不合理の如くにして、熟考の後眞味を發見させる所にあるのであります。

要するに奇警の原理の味ひは衝突後の融和に存するので、是れまた人の心の自然の働き方に合するがために外ならぬのであります。

三一

第七は順感の原理であります。和らげては「反合はせの原理」といつてもよい。その意味は、人の心の働き方に反りの合ふやうな言表、即ち人の心の感じ方に順應した言表が快く感ぜられるといふこと、悉しく云へば、其の言表を口調よく、見よく、聞きよく、感じよくするのが、文章を

美にする一つの要素だといふのであります。抑も吾等の皮膚は肌ざはりよきものを好み、耳は耳ざはりよきものを好み、口は口ざはりよきものを好み、心は心ざはりよきものを愛する。是れが人間の性質の自然であります。例へば「花は開いたぞ、禽鳥は囀るらん」といふよりは「花咲き、鳥うたふ」といふ方が口調も耳ざはりもよく、隨つて快い感じを與へます。

或日の事なりしが、曾て太閤數多金銀の蟹を造らせ、これを庭の泉水或は其の近傍に放ちて、樂しみとなしける。（湯淺常山『常山紀談』）

といふよりは「太閤曾て金銀の蟹をあまた造らせ、これを庭の泉水のほとりにおきて樂しまれける」とする方が口づきもよく、面白くもありませう。「坂は照る〳〵鈴鹿はくもる、あひの土山雨がふる」「伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ尾張名古屋は城でもつ」といふやうに韻を踏んだ、句拍子の揃つた文章の面白味もこゝにありませう。「柳は緑花は紅」「無邊の風月不盡の乾坤」「花は木ごとに咲きて心の山を飾り、露は草の葉よりつもりて言葉の海となる」「生まれ〳〵生まれて生の初めを知らず、死し〳〵死し〳〵て死の終りをもわきまへず」といふやうな對句の面白味もこゝにありませう。

あるは露おちて花殘れり、殘れりといへども朝日にかれぬ。あるは花しぼみて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。（鴨長明『方丈記』）

といふやうな尻取文句の連鎖の面白味もこゝにありませう。優美な事物は優美な文句で現はすのが相應はしい理由もこゝにありませう。花紅葉のさかりな時分の氣候が人の身體に快いと同じやうに、口づきよく耳ざはりよく、感じのよい文章は、自然に人の心を快く動かして「あゝ面白い、よい文章だ」と感じさせます。これが順感の原理の教へるところであります。

三二

最後は變性の原理であります。和らげては「なりかはりの原理」といつてもよい。本來は人の心の感じ方に逆らふものでも場合によつては其の性を變じて面白くなりかはり、文の美を成す所以の要素になるといふ意味であります。例へば普通の場合には口調のよい、耳ざはりのよい文句が好ましく感ぜられるが、吃者や饒舌家を寫す場合には、口調耳ざはりの悪い文句を用ゐる方が却つて面白いでありませう。二代目の市川團十郎が得意にしたといふ「外郎賣のせりふ」

……一つ、へぎにへぎ、ほしはじかみ盆豆盆米盆牛蒡、つみ蓼、つみ豆、つみ山椒、書寫山のこん、親も嘉兵衛子も嘉兵衛親嘉兵衛子嘉兵衛子嘉兵衛子嘉兵衛古栗の木の古切口、雨合羽かばん合羽か、貴樣の脚絆も皮きやはん、我等が脚絆も皮きやはん……

の如きは、非常に言ひにくい文句を滔々と述べることによつて見物を唸らせたものであります。或は普通の場合には文脈の整ひ、道理の立つことを要するが、夢中の事や狂人の言葉を寫す場合には、文路も道理もめちや〳〵なのが却つて面白いといふこともあります。すべて激した場合、臆した場合或は剽輕な人間のひようけた場合などを寫すには、普通の場合には排斥

せらるべき、不明瞭な、不穩當な、或は意味をも成さぬやうな文句の方が却つて相應はしいものである。かやうな變則、除外例の場合に處し、法則はづれの離れ業をして文を活かす方法を教へるものが、此の變性なりかはりの原理であります。

上に述べた八つの原理を取りすべて云へば、吾等の心は事物の(殊に無形抽象の事の)ありありと寫されたのを見るとを喜び、刺激の強過ぎる事物は薄くぼかされたのを見ることを喜び、相應はしい景物の添ふのを喜び、想像の餘地のあるのを喜び、御膳立の整つたのを見ることを喜び、意表に出づる奇拔な言表を喜び、心ざはりよき言表方を喜び、非常特別の場合には特別に言ひ表はされたのを見る事を喜ぶやうに出來てゐる。此の心の働きに應じた文章が面白いと感ぜられ、名文と稱せられるので、文章を見る吾等の心の働き方を除いて他に文の勝劣美醜を定むべき標準はありません。而して私はをこがましながら、此の八つの原理で古來のあらゆる文章上の修飾を說明し得ると思ふのであります。

尙ほ一二の例を引いて私の原理論の趣意を明らかに致しませう。例へばこゝに「危きこと累卵の如し」といふ文があります。之れに對して在來の修辭學者、文章學者は、唯だ「文章の修飾の中には、かやうに類似した事物を擧けて興を添へるものもある、之れを直喩法といふ」風に說明する丈でありましたが、私はもう一重奥まで入り込んで、斯樣に累ねた卵を比喩に取つた文章が、單に「非常に危し」といふよりも面白く感ぜられる理由は、一つは卵を累ねたグラ〳〵する危なさ、目に見える危險さによつて、天下の形勢國家の運命などいふ無形の消息をあり〳〵と、まざ〳〵と、見ゆる所にある、二つには「卵を累ねた」といふ新らしい光景、新らしい思想を添加して内容を豐富にした所にあるとかう說明したいと思ふのであります。俳諧寺一茶は「おらが春」の中に繼母にいぢめられ、弟に横領されて、廣い世を狹く過ぐした悲慘な境遇を寫して、

梅の魁に生まれながら、茨の遲生に地を狹められつゝ、鬼はゝ山の山おろしに吹かれ〳〵して、晴れ〴〵しき世界に芽を出すことは一日もなく、今年五十七年、露の玉の緒の今までもむれざるも不思議なり。

と云つて居りますが、在來の文章學者ならば、唯だ之れに對して、本事を他の事に寓し、ほのめかした修飾法で、寓言法、諷喩法といふものであるといふ丈であるが、私は一步を進めて斯樣な言表の面白味は、憚りある事を朧ろにぼかして床しく寫した所、幕一重の陰に本義を察せしめる暗示的のところにあると說きたいと思ふのであります。要するに人の心の働き方を土臺とし、文章が之れにぶつかつて或は調和し、或は衝突する其の工合によつて、文章の美醜好惡を心理的根本的に說明したいといふのが私の趣意であります。無論これは私一個の試みでありますから、そこは豫め御承知下さるやうに願ひます。

三三

漢文家が抑揚、頓挫、波瀾、擒縱、照應、襯染などいふ事を口癖に云ふのを見ても解るやうに、文章修飾の論、卽ち詞姿の論はこれまでも修辭學者に最も重んぜられた部分でありましたが、近年は昔ほどは重ぜられぬやうになり、やゝもすれば寧ろ輕んぜられるといふ傾きになつて來ました。是れは一つは、在來の舊式文章家が漫りに文字を弄んで、修飾の爲めに修飾を用ゐると

いふ弊に陥つた所から來た反動で、それにも無論道理はあるが、本來を云ふと修飾詞姿は有るべくして有つたもの、美しい面白い思想感情は自然に美しい面白い姿に現はれべき筈のもので、道理上決して詞姿の廢るべき筈がないのであります。つまり我には内容の思想感情を本尊として、その内容の自然に取るべき形を取らしむればよいので、さうする間に自然にいろいろな詞姿の現はるべき筈のものであり、又此の修飾詞姿の論が先賢の專ら力瘤を入れた部分であるので、私は左に古今に通じて重く視られた詞姿について、簡單に說明を試みようと思ひます。

三百餘種もある數多くの詞姿の中、最も多く用ゐられるのは恐らく譬喩を引く修飾ものでありまず。此の譬喩法に直喩、隱喩、諷喩といふ三種があります。

一、直喩法(Simile)は譬へられる物と譬へる物とを竝べ揭げて比較する詞姿で、いろ〳〵な形式の譬喩の中で、一番素直な一番はつきりしたものであります。「たとへば」「恰も」「如し」「似たり」等の說明詞の附き添ふのが普通の形式であるけれども稀には添はぬこともあります。「芙蓉は面の如く、柳は眉に似たり」「悲しい事を聞かすと思へば此の胸に鑓をかけ、肝を猛火で煎る樣な」の如きは前者の例「樹靜かならんと欲すれども風停まず、子養はんと欲すれども親待たず」の如きは後者の例であります。

漢國などは、道乏しき故にかへりて道々しき事をのみ云ひあへるなり。儒者はこゝをえ知らで、皇國をしも道なしと輕しむるよ。儒者のえ知らねば、萬に漢を尊きものに思へる心は、なほさもありなんを、此方の物知人さへに、これをえさとらずして、かの道てふことある漢國を羨みて、強ひてこゝにも道ありと、あらぬ事のみをいひつゝ爭ふは、譬へば猿どもの人を見て毛なきぞと笑ふを、人の恥ぢ強ひて、おのれも毛はあるものをといひて、細かなるを求め出でて見せて爭ふが如し。毛は無きが貴きをえ知らぬ癡人のしわざにあらずや。(本居宣長『古事記傳』)

彼理の江戸灣に闖入したるや、恰も蜂衙を竹片にて突き壞したるが如く、蟻穴に水を注ぎたるが如く、觀演の眞中に火事の警鐘を鳴らしたる如く、淺草の緣日に大驟雨の降りたる如く、其の如何に當時の人心を動搖攪亂したるかは、殆んど今日に於いて想像の及ばぬ所となす也。(德富蘇峯氏)

直喩の用ゐる方についておもなる注意は、斬新にして人の意表に出づる事、穩當な譬喩、即ちぴたりと嵌まつた、同時に讀者の感觸を害せぬやうな譬喩を引く事、容易に類似を見出だし得べき譬喩を引く事などであります。

二、隱喩法(Metaphor)は表面上譬喩の形式を沒して譬へるものと譬へられるものとを打つて一丸とした文飾で、直喩の近道を行つたもの、直喩から一桁はづしたものであります。故に「煎じつめた直喩」或は「壓搾した直喩」とも云はれます。「艱難汝を玉にす」「三界は火宅なり」の類であります。

弟の時房と泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて都に上す。(『增鏡』)

(芭蕉は)其の葉廣うして琴を覆ふに足れり。或は半ば吹き折れて鳳鳥の尾をいたましめ、

青扇破れて風を悲しむ。(松尾芭蕉『芭蕉を移す辭』)

三、諷喩法(Allegory)は又寓言法ともいふ。表面上本旨を全く隱して唯だ譬喩のみをあらはし譬喩を透ほして本旨を推察せしめるものであります。此の法は隱喩よりも尙ほ一歩を進めたもので、「如し」「似たり」といふ譬喩の形式を省くのみならず、譬へらるゝ主體をも全く取り去つたもの、言ふべき本物は幕の陰に隱しておいて、唯だ其の類似品のみを見せるもの、譬喩を極度に煎じつめたものであります。「かち〳〵山」「猿蟹合戰」「エソップ物語」「鯤大鵬の物語」などが皆之れに屬します。

諷喩には第一、單に類似した事實を擧げるだけのもの、第二、實際あり得べからざる事を假作して之れに本義を含めるもの、第三、實際あり得べき事を假作して之れに本義を含めるものなどいろ〳〵あります。第一の類似した事實を擧げる丈のものとは、例へば豐臣秀次が或時遊行上人の持戒を疑つて「上人は霞の衣霧の珠數、雨氣はなれぬ空念佛かな」といふ歌をよんでからかつたが、上人は之れに對し、

水鳥は水に入りても羽も濡れず、海の魚とて鹽もしみめや。

と咏んで答へたといふ話があります。水鳥や海の魚に寓せて、自分が卑俗な社會に出入はしても眞實清淨だといふ事をほのめかしたのであるが、水鳥の水に入つて濡れず、海の魚の肉の鹹くないのは事實であるから、單に類似した事實を擧げたものとして架空の作り話と度外すべきでありませう。

第二の實際あり得べからざるものを假作するものとはかち〳〵山や、エソップ物語の類ひ皆さうであります。韓退之の雜說に、

龍嘯けば氣雲となる。雲は固より龍よりも靈ならざるなり。」然れども龍是の氣に乘じ茫洋として乾間を窮め、日月に薄り、光景に伏し、震電を感じ、變化を神にし、下土を水にし、陵谷を汨す。雲も亦靈怪なるかな。」雲は龍の能く靈たらしむる所なり。龍の靈の如きは則ち雲の能く靈たらしむる所にあらざるなり。然れども龍雲を得ざれば、以て其の靈を神にするなし。其の憑依する所を失へば信に不可なるか。異なる哉其の憑依する所は乃ち其の自ら爲す所なり。易に曰はく雲は龍に從ふと。既に龍といへば雲之れに從ふ。謝疊山は此の文を評して、「此の篇の主意、聖君賢臣無かるべからず、賢臣聖君無かるべからず。聖賢相逢ひ、精聚まり神會して、斯に能く天下の大功を成すをいふ。龍は聖君を指し、雲は賢臣を指す」と云つて居りますが、之れを見ても明らかなる通り、龍と雲とはほんの表面の見本で、其の奥には天下經營、德教振作に關する大きな理想が潛んで居ります。而して底なる本旨、奥なる主人公の外面に姿を見せぬところが、取りも直さず此の詞姿が文を床しくし奥深くする所であります。

此の三式の譬喩の中、直喩は形式が素直で單純なだけに、一番使ひ易く、技巧を要することが最も少なく、從つて何人が用ゐても危氣がありません。隱喩は一桁はづした譬喩だけあつて、用ゐる方に多少の呼吸があり、穩かな比喩でも、言ひ表はし方が不自然だと、まるで物にならぬ場合が往々あります。最後に手心の一番むづかしいのは諷喩で、これには言はずして而も云うたよりも明らかなるやうに、不透明體を用ゐて、而も陰なる本體の明らかに辨へらるゝやうに、

人の氣に障らずして而も其の心にしみ〴〵と感ぜられるやうに、などいふいろ〳〵の注意があります。

三四

四、活喩法(Personification) は生命の無いものに生命を與へ、動かぬものを動かしめ、言葉なきものに物いはしむる文飾、言ひ換ふれば無生物を生化し、下等動物或は精神作用等を人間化する文飾で、又擬人法とも呼ばれて居ります。此法の最も簡單で程度の低いのは、單に無生物に生を與へるもの、或は低級なる生物に高級なる生物の働きを與へるもの例へば「酷暑に草木喘ぐ」といひ、「朝顏は地をはふことをあぶながり」といふ類でいづれも植物を動物あしらひにしたものであります。英語でも昔は動物化する修飾といふ程の意味で、Animation といふ語を使つたものでありました。次ぎにそれより高級なのは、無生物なり植物なり動物なりを人間あしらひしたもので、例へば「月斗牛の間を徘徊す」「月は雲井に寢しづまり、松は嵐に嘯する」落葉してけろりと立ちし土藏かな(一茶)

つはものの軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背ける草の菴には、しづかに水石を弄びて、これをよそに聞くと思へるはいとはかなし。靜かなる山の奥無常の敵きほひ來らざらんや。その死に臨めること軍の陣に臨めるが如し。(つれ〴〵草)

の類であります。最も進んだのは無生物、植物、動物、精神作用等に言葉を與へ物語せしめるもので、例へば「猿蟹合戰」「かちかち山」「鬼ヶ島退治」「一圓紙幣の來歷談」など皆之れに屬します。而して此の類の活喩法は、おほむね同時に諷喩の寓言物語になつてゐるのが常であります。

五、誇張法(Hyperbole) は事物を實際より誇張して、過度に大きく或は過度に小さく言ひ做す詞姿であります。凡そ何物でも感情の眼に映ずる時には必ず多少の割增或は割引に逢ふものでありますが、誇張法の値打はつまり此の感情の眼に映つた印象をそのまゝに寫す所、即ち主觀的自然を寫すことにあります。從つて誇張の爲めに誇張し、文字の上のえらがりをいふ事は堅く戒めねばなりません。例へば「血は流れて海を成し、屍は積んで山を成す」「日月に鞭つて星辰を叱す」

速須佐之男命、依さし給へる國を知らさずして、八拳鬚胸前に至るまで、泣きいさちき。その泣きたまふ狀は、青山を枯山なす泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是をしてあらぶる神の音なひ狹蠅なす皆わき、萬の物の妖悉に發りき。(古事記)

須彌を接して他方無數の佛土に擲置するも、亦未だ難しとなさず、足指を以て大千世界を動かし遠く他國に擲つも難からず、手に虛空を把つて遊行するも難からず、大地を足の甲の上に置き、梵天に昇るも難からず、乾草を負うて火中に入り燒けざるも難からず。然れども此の經を持するは難し(法華經)

の類であります。

誇張法は情の目で見た所を寫して、讀者の情に訴へるものである故に、これは感情本位の文、即ち抒情文、叙景文或は詩歌、小說等の文學的文章にのみ用ゐるべきもので、精正確實を要とする

科學上の文章に用ゐべきものではありません。例へば、加藤清正の虎退治を描いた文には「眼は二面の鏡の如く」と云つて相應はしいが、動物學の書物に此の腫れあがつた樣な譬喩は用ゐられません。戰記には「血の海、屍の山」といつて面白いが、生理解剖の書物に同じ言葉を用ゐては物笑ひになりませう。要するに誇張法は文學的文章の獨占するところであります。

右の外西洋の修飾學者が誇張法を使ふについて擧げた注意の中には「相手の性情氣分に適應すべき事、卽ち誇張を好まぬ人に向ひ、或は誇張の相應はしからぬ場合に用ゐぬ事」「誇張に興味を持つやうに相手を熱せしめる事」「極めて適切肝要なる場合にのみ、儉約して用ゐべき事幾度も用ゐられ使ひ減らされて陳腐になつた誇張を用ゐぬ事」「緊縮すべし、冗漫なるべからず」などいふ條々があります。要するに「情の文にのみ內容のある適切な誇張を用ゐよ」といふことに歸するのであります。

三五

六、現寫法(Vision)　はまた現在法ともいふ。過去に起こつた事、將來に起こるべき事を、現在目前の事の如く言ひ做す文飾で、形式上から云へば「き」「けり」「ぬ」「つ」等の過去の動詞「らん」「べし」等の未來動詞を用ゐべき場合に現在の動詞を用ゐて遠きを近くし、薄きを濃くし、隔世或は未來のおぼろなる事柄を目の前に見るやうに活躍せしむるものであります。又此の法は前の誇張法と同じく感情の目に映つた通りを寫す所に値打のある修飾で、主觀的自然を生命とするものであります。

過去を現在に言ひ做した例は、戰記其の他に數へきれぬほど多くあるが、未來を現在に言ひ做した例は甚だ少ない。少年を戒めて「今のうちにしつかり勉强すれば將來必ず偉くなる、懶ければ愚物小人になつてしまふ」といふ類ひは、文法的には本來「偉くなるべし」「小人」となるならんと云ふべきを現在に見たやうに書いたので、未來の現在化と云ふべきものであります。左に擧ぐるは過去を現在化したものであります。

天正十二年四月九日午の刻ばかりに、犬山のあなた長湫のほとりにて、德川殿に出あうて味方負戰したりと秀吉の陣に告げければ、秀吉大いに怒つて、やすからぬことかな、秀吉向つて戰すべし、始めより此所の要害を守りたらん者は尙ほよく守れ、其の外の軍兵は一騎も殘らず來たるべしと陣々に觸る。馬ひつ立て、鎧なけかけ、胄取つて着る間に、はや大將軍の陣に貝を吹き鳴らしたれば、先陣既に打ち出づ。秀吉の旗門外に押し立てたり。二番三番押しづつついて十六番まで出でぬれば、秀吉樂田を立て、長湫をさして馬を馳す。後陣は猶ほ引きもきらず。忠勝此の時は小牧の御陣に止まり守りしが、此の由を聞いて今朝よりの戰に味方疲れぬべし、馳せ加はつて、御先を懸けむとて、手勢二つに引き分け、半ばは止めて麥を守らせ、馬武者步卒三百餘人を三手に作り、敵の多勢と道を竝べて行く程に、其の間四五町には過ぎざりけり。猶ほも矢頃近く行く時は、足輕の兵に下知して鐵炮を放ちかけ〳〵靜かに馬を打つ。かゝる所に永井與次郎は沛芟の馬を惡しう乘つて落ちたりければ、馬はなれて飛びあがり〳〵敵に向つて走る。永井は續いて追つて行く。忠勝きつと見て、一鞭あてゝ馬を馳せ永井をつと馳せ拔いて、敵の中に追ひ込うで、終ひに其

の馬を取り返し永井を乘せて歸りけり。秀吉の兵共、憎き本多が今日の振舞かな、馳せ寄つて蹴ちらして通り候はんといへば、秀吉かたく制して、龍泉寺に至る。打ち漏らされたる味方に、家康は勝ち誇りてや居んずらんと問ふ。戰事終はつて、家康の御旗は小幡の方に向つて入りぬと答ふ。秀吉力及ばず、此所に陣を張る。忠勝物馴れたる兵共に、敵の陣の取りやう、見て來れとて遣はす。能く見おほせて歸る。(新井白石『藩翰譜』)

又同じ年(治承四年)の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思ひの外なりし事なり。御門より始め奉りて大臣公卿悉く攝津國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人誰れか一人故郷に殘り居らん。官位に思ひをかけ主君の蔭をたのむ程の人は、一日たりとも疾く轉らんと勵みあへり。時を失ひ世に餘されて、期する所なき者は、愁ひながら留まり居たり。軒を爭ひし人の住居、日を經つつ荒れ行く。家は毀たれて淀川に浮かび、地は目の前に畠となる。人の心改まりて唯だ馬鞍をのみ重くす。牛馬を用とする人なし。(鴨長明『方丈記』)

文法上から理窟をいへば、いづれも過去に寫すべき所であるが、現在にした爲めに、活動の急なる情感の切なる趣が眼前脚下に現はれて來るやうに思はれる。實に背いて却つて一層の眞を得たるものであります。但し現寫と云つても、徹頭徹尾現在の語を用ゐねばならぬといふのではありません。或は冒頭に過去と斷つて後段を現在にし、或は初めに現寫して終はりに過去と註し、或は過去現在こもごもに用ゐて參差錯落の趣あらしめる方が却つて文に風致を添へるのであります。要するに活寫、交寫よろしく鹽梅してよいのであります。

三六

七、對照法(Contrast; Antithesis) こゝに貧しくして獨立自主の精神を失はぬ青年があり、其の心を述べて、人樣の御厄介になつて赤い顏をして居る方が、餘程氣持がよいと云つたとする。之を見ると文句といひ、思想といひ、いかにも面白い。何故かといふに其のおもなる理由は淸貧濁富、赤い靑いといふ對照が面白く現はれて居るからである。吳越の昔物語に、或時伍子胥が、吳王の西施を寵して居る目の前で、裾をかゝげて殿上を步いた。吳王が怒つて其の譯を尋ねると、伍子胥は「このまばゆき金殿玉樓も、三年とたゝぬ中に草深く露しげき野らとならん、其の時を思ひやりてのわざに候ふ」。と答へたとある。此の話も頗る面白い、而して其の面白いおもなる理由は金碧燦爛たる宮殿に凄涼たる荒野が原を見るといふ面白い對照が現はれて居るからである。

大小、高低、遠近、黑白、明暗等は、引き離して考へることの出來ぬ事物の兩端である。人の心は大なる物、高き物、遠き物を思はずに、小さき物、低き物、近き物を考へることが出來ぬ。而して反對した事物を竝べ揭ぐれば兩々互に映發して大いに强さ、鮮さ、面白さを增すものである。炭を隣して雪の白さのいよ〳〵白く、提灯と竝んで吊鐘の大きさのいよ〳〵大きく見えるのは此の爲めである。人の心に此の傾きのあるのに投じて性質の相反したる事物を竝べ揭げる詞姿を對照法と申します。

對照法には語の上にだけ對照のあるものと、思想に對照のあるものとがある。「白酒を飲ん

で赤くなるとは是れ如何に」といふ類は前者の例、「蚊の睫に巣つくる蟲の氣を吹きて富士の峰の雲霧を拂はんとするが如し」といふ類ひは後者の例である。而して對照法の上乘なるものが後者であることは云ふまでもありません。

合抱の木は毫末に生ず。九層の臺は累土に起こる。千里の行は足下に好まる。(老子)

荊棘より無花果を採らず。蒺藜より葡萄を採らず。(舊約書)

我々甲冑の家に生まれながら武林を離れ、三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂うて商賣知らず、賢にして隱にあらず、賢に似て賢ならず、物識りに似て何も知らず、世のまがひ者、唐の大和の教へある道に、伎能雜藝滑稽の類まで、知らぬ事なけに、口に任せ、筆に走らせ、一生を囀り散らし、今はの際に言ふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑、心に心の恥をおほひて、七十餘りの光の陰、思へば覺束なき我が世經畢。もし辭世はと問ふ人あらば、

それ辭世さるほどにさても其の後に殘る櫻の花しにほはゝゝ。(近松巢林子『辭世』)

漢文家の謂はゆる抑揚頓挫波瀾起伏等の文飾は、おほむね對照を基として說明し得べきものであります。

三七

八、引用法(Allusion) 平安朝時代の名高い歌人に藤原俊頼といふ人がありました。此の人が或歌合の折に、

明けぬともなほ秋風のおとづれで野邊の景色よおもがはりすな。

といふのを出しました。一夜明けて秋になつても、なほ秋風の吹くことなく、野邊の景色が面がはりして淋しくならぬやうに、夏のまゝで賑かであるやうにといふ意味で、立秋前日の歌と見えます。此の歌合に、俊頼とは歌に關する意見を異にして、平生仲の惡るかつた藤原基俊といふ歌人が、此の時讀師と云うて、歌を讀み上げる役をつとめて居りましたが、「あけぬともの歌を手にすると、匿名ではあつたが、直ぐに歌がたき俊頼の作と悟つて、腰の句に「て」の字を据ゑるのは體が挫けて聞き苦しいものであると非難しました。俊頼は默つて爭はなかつたが、其の座に琳賢といふいたづら男が居て、口を出して基俊に向ひ、古人の句に、腰に「て」の字を用ゐた例が御座るが、いかゞ心得たまふぞと云つて、紀貫之の、

櫻さく木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける。

といふ名高い歌をよみ上げ、しかも「で」の字を故らに長々と吟じたところが、さすがの基俊も赤面して一言の返答も出來なかつたといふ話があります。基俊朝臣は『悦目抄』といふ歌論の著述をした人で、當時の名高い理窟屋でありましたが、理窟屋でも紀貫之といふ金看板の前には頭を上けることが出來ませんでした。

時は平凡なることをも神聖にします。同じ言でも古人のとあれば今人の前に君臨する趣があり、祖先の事蹟は子孫の前に神さびて現はれて參ります。古今東西、人情に異なる所がありません。同じ「櫻さく」歌がもし俊頼であつたならば、基俊朝臣も口角泡を飛ばして爭うたであらう。同じ「明けぬとも」の歌が貫之のならば、彼れは初めから一唱三嘆したでありませ

う。基俊朝臣が俊頼を攻撃した心は吾々が現代の人の言を重んぜぬ心であり、其の貫之の歌に首を俛れた心は吾々が釋迦、孔子、基督の言の前に低頭する心であります。非常に圖ぬけた思想文章と非常に悪劣な思想文章とを除いて、他の中位並等の列は、大抵其の人物の金箔の有無によつて善悪いづれとも評價し取られるが常であります。

此の基俊朝臣が貫之の歌と云はれて降参した心子供が師父の言葉を恐れ入る心を利用し、古語古事を引いて、文章に品位をつけ、趣味を豊かにする修飾法、之れを稱して引用法と申します。

引用法に三種あります。一つは古語古事を顯はにそれと斷つて引くもの、一つは古事古語を明らさまに斷らず默つて自家の文の中に編み込んでしまふものであります。細かに分けて前者を引用法といふならば、後者は隱引法ともいふべきでありませう。前者の例は、

古の人曰へらく、人は神と財とに兼ね事ふること能はず。されば生命の爲めに何を食ひ、何を飲み、又身體の爲めに何を衣んと思ひ勞らふなかれ。生命は糧よりも優り、身體は衣よりも優りたるものならずやと。人若し吾人の言をなすに先だちて、美的生活とは何ぞやと問はゞ、吾人は答へて曰はん、糧と衣よりも優りたる生命と身體とに事ふるもの是れ也と。(高山樗牛『美的生活を論ず』)

引用法はもと我が立言を明らかにし、文章に品格を添へんが爲めに用ゐるものであるから、此の詞姿を用ゐるには、漫りに難解の古事古語を引いてはなりません、又學德高からざる小人物の言を引いてはなりません。

後なる隱引法は「古語に曰はく」と明らさまに斷らずして、默つてそれを我が文の中に取り込むもの、卽ち引用の形式を沒したもので、壓搾し煎じつめた引用法ともいふべきものであります。例へば諺に「二階から目藥といふ事があるが、君の仕事はまさしくそれだ」といふは第一の引用法であり、斷り文句を省いて直ちに「君のやり方は二階から目藥だ」といふのは隱引法であります。

隱引法は、本來、引用する古語古事を讀者が知つて居るものと假定して用ゐるものゆゑ、濫りに人の知らぬものを引いてはなりません。又踏まへた古語古事に朧ろになりとも思ひ及ぼさぬ讀者に對しては、此の修飾の趣味が半ば失はるゝと云うてよいのであります。例へば宿屋飯盛の狂歌、

歌よみは、下手こそよけれ天地の動きいだしてたまるものかは。

の面白味は、和歌は力をも入れずして天地を動かすと云つた古今集の貫之の序文を思ひ浮べずしては解し難い類ひであります。左の『徒然草』の一段の如きは多少うるさくはあるが此の法を巧みに用ゐたものであります。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に馴れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になり行く習ひこそ、亡き人の別れよりもまさりて悲しきものなれ。されば白き絲の染まんことを悲しび、路のちまたの分かれんことを歎く人もありけんかし。堀河院の百首の歌の中に「昔見し妹の垣根はあれにけりつばなまじりのすみれのみして」。さびしき景色、さること侍りけん。

「風も吹きあへず云々」の句は、紀貫之の、

櫻花とく散りぬともおもほえず人の心の花にぞありける。

及び小野の小町の、

色見えでうつろふものは世の中の人の心ぞ風も吹きあへぬ。

此の二首を蹈まへたもの、白き絲、路のちまたの二句は『淮南子』に「墨子染絲に泣き、楊子逵路に哭す」とあるのを引いたものであります。

三八

九、重義法　一擧兩得は皆人の欲するところであります。能ふべくは杓子をして耳掻の用をも兼ねしめ、長持をして辨當箱の用をも兼ねしめたいといふのが人情の自然でありますが、文章にも亦一擧兩得の法とも稱すべきものがあります。

此の一擧兩得の修辭法、かりに之れを名づけて重義法といふ。一つの言葉に二つ以上の意味を兼ね含ましめるもので、云はゞ小さき容器の中に澤山の品物を入れ、一軒の家族共住居をするやうなもの、二重以上の意義を兼ね表はすといふ意味であります。

「ヘマムシヨ入道」「山水天狗」又は文字を巧みに竝べて畫に見せる戲畫が面白く思はれるのは、一物にして書と畫とを兼ね現はして居るからであります。文章に於いても其の通りで「紅葉にもまだ飽かなくにあき果てぬ（秋飽き）」「海棠かいやさやうにはないしの花（梨、無し）」「まことに是れは困りいり豆山椒味噌（困入、炒豆）」などといふ歌文章の面白味は、主として上に謂はゆる一擧兩得の點にあります。

重義的修辭法の種類數多ある中で、最も單純なのは支那の熟字に日本の熟語の假名を振るものでありまやう。振假名式修辭法ともいふべきもので、主として視覺に訴へ、日本の熟語の意義趣味と支那の熟字の意義趣味とを、一目の下に看取し玩味するものであります。例へば「流石」と書けば邦語のしかすがにの意味を取ると共に、流れに枕し石に漱ぐといふ唐土の故事を偲ぶことが出來、「百日紅」と書けば猿も滑りさうに樹の肌のすべ〳〵した趣と、百日の長き間を眞紅に咲き誇つて居る趣とを同時に看取することが出來、「羊腸」「驚破」と書けば、國語の「つゞらをり」「すはや」の意味と漢語の「羊腸」「驚破」の特殊の味はひとを同時に看取することが出來ます。珍らかなるを「稀見なる」と書き、はじまりを「權輿」と書き、その時を「爾時」と書き、天子の女を娶る場合に「尙る」と書き、日月、風雨、山野、前後と書いて、日月、風雨、山野、前後と倒まに假名をつけるなど、皆此の一擧兩得の策によつて意味を豐かにせんが爲めであります。

重義的修飾法の中で最も多く用ゐられ、而して特に俗間に於いて多大の效果を認められて居るのは懸詞法即ち謂はゆる秀句法でありまして、文章と思ふばかりでなく、曾ては堂々たる歌人、俳人にして、上なく之れを重んじ「秀句は歌の材木、俳諧の花なり、秀句なくして俳諧せんは、棹なくして船をやり、針なくして魚を釣るが如し」とまで云つた人がありました。秀句とは懸詞の事であります。懸詞が秀句といふ名を得たことが、已に此の修辭法のいかに廣く世に持てはやされたかを證明して居ります。

懸詞は世界どこの國の文章にもあるが、我が國ほど多く用ゐられ、多く尊重された所はあり

ますまい。英語の一例を擧ぐれば「汝僞れり」といふ意味で"you lie"といへるに對し"我れ横臥す"といふ意味で"I lie"と答ふる如き、或は英國の諺に「若夫婦は家内に二頭の bear (熊)を飼はざるべからず、一頭は bear (忍)一頭は for bear (怨)なり」といへる類ひであります。

懸詞法は我が國にて秀句、引掛け、兩用る、地口、「しやれ」「駄洒落」などいふ種々の語によつて知られて居るやうに、英語にても Pun; Play upon words; Pivot-words; Paragram; Paranomasia 等いふいろいろな語で知られて居る。Play upon words が「言葉の上の遊び」を意味し、Pivot-word が「蝶番詞」を意味して居るなど殊に面白い。

文學的の文章に於いてはいふに及ばず、談話に興を添へること懸詞の如きは少ない。又た世に謂ふ緣起などいふものも、多く懸詞と密接なる關係を持つて居る。凱旋の祝宴に「うち鮑」「勝栗」「昆布」を用るるのは「敵を討ちて、勝ちて、よろこんぶ」といふ洒落である。除夜の肴に茄子、干と栗の合物とを用るるのは「借金なすぼし、くりあひよし」といふ引掛である。横井也有が安産の句、

十六夜や何の苦もなくはじき豆。

は「いざ産んでもよいやはじき出だせ」といふ地口である。湯が熱いのぬるいのと云つては「熱くは梅王櫻丸、ねるくは松王武部源藏」などいひ、人に禮をいふとては「忝なすびの鳴燒」などいふ類ひ、下らぬといへば下らぬやうなものの、平地に罪なき波瀾を起こして、笑ふ門に福を招く靈妙な呪禁と云うてもよい。

文章の側で掛詞の最も多いのは、中昔以後の歌俳諧を始めとして謠曲、淨瑠璃、其の他徳川時

代の俗文學等である。

覆立ち木のめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける。(紀貫之)

契りおく花とならびの岡のべにあはれ幾世の春を過ぐさん。(兼好)

いかでわれ項羽の力もちの夜の月のかくるゝ山を抜かまし。(宿屋飯盛)

父母の恩のおもしをいたゞいてこう〳〵になれ〳〵

冬ごもり蟲けらまでも穴かしこ(松永貞徳)

腹すぢをよりてや笑ふ絲ざくら(北村季吟)

雪の普魯西も扨アメリカも、馬車で通うてイシギリス、僕はこれほどホルトガル、君はいつでも佛蘭西か、浮世のギリシャと只印度、床をトルコの一つ夜着、エジプトこちらへよらしやんせ、チヤイナ〳〵と取りすがり、オロシヤに見えるが戀の道……(假名垣魯文『西洋道中膝栗毛』)

重義的修辭法には右の外に一つの觀念によつて二つの事物を現はす詞姿、雙叙法、或は一筆雙叙法といふものがある。前なる懸詞法は一語によつて二つの觀念を表はすもので例へば「盆前に誰れかは金をかさゝぎのはした錢でもほし合の空」といふ狂歌ならば「ほし」といふ一語に「星」「欲し」の二つの觀念を表はして居るのであるが、雙叙法は例へば「君子の過や、日月の食の如し、初めや人皆見る後には人皆仰ぐ」といふ類ひで「見る」「仰ぐ」といふ觀念で君子を見、仰ぐ事と、日月を見、仰ぐ事との二事を表はして居るのである。

掛取は細き煙にむせ返り。

我が心石にあらず轉ばすべからず、我が心席にあらず、捲くべからず。

雙叙法は懸詞のやうに洒落詞の弄びといふ嫌ひがなくして、重義的詞姿の中、最も品の好いものである。

重義的修飾法の中にはまた「語路」と云つて成句の語路、口調を眞似るもの、例へば西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮」の口調をまねて、

菜もなき膳にあはれは知られけり鳴やき茄子の秋の夕暮。(唐衣橘洲)

といふ如きものがあり、同類の事物を列擧するもの、例へば笙、笛、篳篥、琴、琵琶、五種の樂器をよみ込んで、

うし(笙)やうし花句ふえ(笛)に風かよひちりき(篳篥)きて人のことと(琴)びはせず。(琵琶)(新拾遺集)

といふ如きものがあり、歌文章を書き整へた上で縦に横に、斜めに、倒まに、讀み方をかへれば違つた意味をなすやうに作つたもの、例へば、折句、沓冠の如きものであり、

折句(五句の頭にをみなへしの五字を折り込みたるもの)

をぐら山みね立ちならし、なく鹿の、へにけん秋を、しる人ぞなき。

沓冠(はなをたづねて見ばや)

はかなしな
をのゝ小山だ
つくりかね
てをだにもきみ

はてはふれずや

その他にもいろ〳〵あるけれども、うるさいから省きませう。

要するに重義的修飾は俗おどかしには一寸面白いものであるが、多くは言葉の上のしやれ、文字の弄びに終はり易く、又下品な趣味を現はしてやゝもすれば人に輕侮され易い傾きのあるものであるから、めつたには使はぬやうに、使ふにしても、藥のやうに儉約して最適所にのみ使ふべきものであります。

三九

一〇 省略法(Paralipsis) 蘇東坡の言に「作文の法、意盡きて言止まる者は天下の至當なり、然而して言止まりて意盡きざるを最も極至とす。」と云うてあります。無駄を省いて煎じつめられる丈詰めることが名文の一資格たる事を道破したのであります。

文章に限らず藝術に於いては、すべて勢力材料を浪費せぬことが必要であります。フランスの或る聲樂家が唱歌の呼吸を說いて云ひました。「唱歌を稽古する者はまづ氣息を無駄費ひせぬやうにせねばならぬ。氣息を無駄に費ふか費はぬかを驗すには、蠟燭を點し、その直ぐ前に口を開いて高く唱うて見るがよい。下手が唱へばすぐに消えてしまふ。多少の修業の積んだ者が歌ふと、消えはせぬが焰がゆらぐ。それが名人になると如何ほど高く發聲しても焰が少しも動かぬ。其の理由は名人の吐き出す氣息は悉く音聲に化してしまふ故に火にあたらぬが、下手の氣息は氣息のまゝで出る故に、風となつて火を消すのである」、

と云つて居ります。

「餘白あれば山書きたがるへぼ繪かき」といふ川柳がありますが、同じ道理で思ひ浮かべたいけの思想文字を悉く竝べるのは平凡文章家の證據であります。童幼に見せる文、達意を主とする說明文ならばともかく、趣味本位の文學的文章に於いては、有る限りの材料を竝べるよりは、寧ろ中心になる感想のみを顯はして、之れに附屬する小感想をば讀者の想像に一任する方がよい。文章に要とする例は臚列するにあらずして、暗示するにある。細大擧げ盡くすにあらずして、根幹を示して枝葉をほのめかすにある。言ひ換ふれば、讀者が骨折らずに想像で補ひ得る程の事は、わざと省略して言ひ表はさぬことが、文章に力あらしめ、含蓄あらしめ、餘韻あらしむる一つの祕訣である。かやうに、言表の精細を要する文章に於いて當然言ひ表はすべき事をば故らに省略して想像の餘地を存する修飾法、之れを稱して省略法といふ。

此の法の好い例は俚諺、格言、俳句などいふ短い形式の文章の中に澤山ある。例へば「犬は夜を守る」といふ諺は、詳しく云へば「犬は夜間人の家を守る」といふべきであらうが、「間人の家」の四文字は、省いても讀者の想像でたやすく補ひ得る故に「夜を守る」と簡單に言ふ方が却つて餘意があつて餘白いのである。「劍は一人の敵のみ、萬人の敵を學ばん」といふ項羽の言は、元來は「一人の敵に對する武技のみ」といふべきであらうが、「に對する武技」は讀者の心で苦なしに補ひ得る故に略したのである。俳家の謂はゆる「七分いうて三分は俤に殘すべし」といふ語がよく此の間の消息を說明して居る。

省略法にもいろ〳〵あるが、其の最も簡單なのは語を省くもので、中について最も主なるは

主語を省くものと、テニヲハ、助動詞等を省くものとである。次ぎなる近松が『日本武尊吾妻鏡』の一節、日本武尊が梟帥を刺す條は第一の例である。

尊叢雲の御劍をかい込み薄衣かつぎ梟帥を目がけ、向ふを見れば暴れにあれたる梟帥が勢ひ、おのれ待ち受け組んで伏せんと待つとも知らず、走せ過ぐるをやり過ごし、腕搦んでいつかと抱く、組まれて事とも脊を屈め、一ゆり搖つてふりほどき、大手をひろげ組み付くを、尊ひらりと御身をはづし後ろざまに頭の髮、えいと摑んで引立つる。引立てられて千鳥足、引き戻さば小踊りし、放さん放さじ組まれじ、組まんと、兩虎のはげみ難なく小脇に取つて引きつけ御劍に肝先一刀ぐつとさしもほ〳〵強く捻ぢつけられ苦しむ息に、物申さん、暫し〳〵と聲をかけ、何條おのれらが劍刺すとも突くとも我が身には立つまじと思ひしに、苦しや堪へ難や、六魂六識を惱亂し、梟帥が最期今此の時、尋常に名乘つて刺せ。いぶかし汝は誰れぞと問ふ。誰れとは愚か景行天皇第二の皇子、以前手にかけ殺せしは、敷妙といふわが使女、神賢姫と名乘らせしは、おのれを討たん計略、王侯に背く天罰の劍覺えたるかとのたまへば、さればこそ〳〵……

「尊云々」「梟帥云々」と一々に斷つては、文がだれて五月蠅くなるであらうが、それを省略して餘韻勢力あらしめ、兩虎奮鬪の有樣を活躍せしめたのである。

テニヲハ抜きで有名なのは井原西鶴及び其の一派の文章である。左に擧ぐる例の中最初の二つは西鶴の一節である。

物には時節、花の喰散、人間の生死、嘆くべきことにあらず。然れども命は養生の一大事な

るに、毒魚と知りながら鰒汁、これに風味かはらずして藻魚といふもの何の氣遣ひなかりき『日本水代藏』

六月中旬に御所柿を好み、此の有樣華清宮もかくやと思はる。曉風殘月、夜の涼、今朝思へば夢。『二代男』

抑も是れは桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なり。『謠曲船辨慶』

第二に此の省略法に比べて多少複雜なのは句を省くものである。例へば、

同じ心にむかはまほしく思はん人のつれづれにて今しばし（）今日は心しづかに（）などいはんは、此の限りにはあらざるべし。『阮籍が靑き眼誰れにもあるべきことなり。『徒然草』

第三に秀句的省略法ともいふべき風味な俗感じの省略法がある。前の句の尾と後の句の首とを一緒にして、掛持にするもの、例へば「百荷の草花をかりそめながら」事治まつて世の中も靜御前は「我れも憂き身を捨て人なり」といふ類で謠曲淨瑠璃等に多く用ゐられてゐるもので ある。此の省略法は趣味の低い俗人には歡迎されるが、多くの場合には文品を低くし、目の高い人に眉を顰めらるゝものである。

もろ〳〵の省略法の中、用ゐる方はむつかしいが、最も上品で安全なのは、書かうと思ふ事柄の要點だけ、或は表面の一部分だけを露はして殘部を讀者の想像に一任するもの、言ひ表はされた小部分をして表はされぬ大部分を含蓄し暗示せしむるものである。例へば「唯だ人は心に

て候也」（阿佛尼）「たゞ世の中は錢ぞかし」（淺井了意）「子川上に在りて曰はく、逝く者はかくの如きか晝夜を舍かず」の類ひである。

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。

の如きは其の適例であらう。表面は「今空を仰いで見る月は昔三笠山に出た月だなあ」といふ丈であるが、裏面には故鄕を偲ぶ哀れなる物思ひが、あらはに云つたよりは遙かに床しく暗示されてゐる。謂はゆる「言はぬはいふにいやまさる」寫し方で、微妙高遠なる思想感情は、此の法によらずしては言ひ表はすことが出來ぬ。陶淵明の名句「悠然見南山」の如きも、表面は山を見るといふ丈の事であるが、文字の裏には脫俗の士が自然と道交して物我の境を忘れた淸い高い尊い姿が、床しく隱約の間に現はれて居る。

要するに省略法は無駄を省いて含蓄を多からしむるもの言はずして言つたよりも多くの效果を收めんとするものである。

四〇

一一　擧偶法　もまた省略といふ立場から見て說明すべきものである。

西洋の修辭學書にシネクドキー(Synecdoche)及びメトニミー(Metonymy)といふ修飾法が說いてある。シネクドキーは揭部法、或は提喩法とも譯すべき事物の一部分だけを揭げ示して全體を推察させるもの、例へば「あのチョン髷は頑固で困る」「あの高襟の言草が氣に喰はぬ」といふが如く、老人の身體の一部分たるチョン髷若者の身體の一部分たる高襟

だけを掲げて老人若者の全體全部分を推察させる類ひである。メトニミーは轉換法と譯してよい。言表の目的たる當の事物に換へるに、これに關係のある事物を以てするもので、例へば記號と實物とを相換へて支那が日本に負けたといふ事を「黃龍旭日の前に斃る」といひ、所有主と所有物とを相換へて支那人、西洋人を豚尾、碧眼といひ、原因と結果とを相換へて、近松の淨瑠璃、馬琴の小說を讀むといふ事を「近松、馬琴を讀む」と云ひ、材料と事業とを相換へて繪畫、苦學といふ事を「丹靑」「螢雪」といふ類ひである。

西洋の修辭學、また之れを眞似た我が國の修辭學書では、概ね此の分類法に從つて、シネクドキーとメトニミーとを分けて別々に說いて居るが、思ふに、これは煩瑣な不必要な區分で、兩方共に一部分を掲げて全體を察知せしめ、一隅を擧げて四隅を知らしむる一種の省略的暗示的の修飾と見る方が穩當簡便であらうと思ふ。例へば旭章旗、黃龍旗は日本、支那の記號とはいふものゝ、又日本、支那の有する一部分、卽ち日本、支那といふ概念の中に含まるゝ一要素と見て差支なく、豚尾、碧眼は云ふまでもなく支那人、西洋人の所有する物の一部分である。近松、馬琴、丹靑、螢雪、いづれも同一の理由によつて說明することが出來る。要するに、轉換法は卽ちメトニミーは揭部法卽ちシネクドキーの中に含まるべきものと云つて差支ない。本講義に於いては、かやうな見方から、二つを總括して擧隅法と名づけたのである。

擧隅法の目的效能の主なるものが二つある。一つは他の省略的方法と同じく、想像の餘地を存する點で、もう一つは事物の主眼點を取り出でて、或場所、或場合に於ける或事物の狀態をありく〳〵と見せる點に在る。イギリスの哲學者ハーバート、スペンサーは文章上のあらゆる事柄を讀者の精神力の經濟といふ點から見て說明して居るが、此の擧隅法をも同じ理窟で說明して居る。スペンサーのいふやう"A fleet of ten *sails*"(十帆より成れる艦隊)といふ文は、"ten *ships*"(十隻の船)といふよりは優つて居る。何となれば、單に船といへば、讀者に靜止した船船渠に在る船を思ひ浮かべさせる憂へがあるけれども、帆と云へば海上航行の姿が直ちにありと思ひ浮かべられるからである。"All *hands* to the pump"(凡ての手はポンプへ)は"All *men*"(凡ての人)といふのに比べて優つて居る。何となれば「凡ての人」と云へば「喞筒を見ようとして集まつた人」といふ意味に取られる恐れがあり、從つて後に火事の折に喞筒を突かうとして集まつた消防夫の活動といふ意味の解つた場合に、初の考を築き直す手數が要る。けれども、"All hands"(手)と云へば、皆人ボムプを突く爲めに集まつたといふ事が直ちに活き〳〵と讀者の心に浮かぶからである。といふやうにスペンサーは說いて居るが、面白い說明である。要するに、擧隅法は、主眼點を强く明らかに示すと共に餘韻あらしめる爲めに用ゐられる修飾法で、從つて之れを用ゐる場合にはその擧げられたる一隅を緖として容易に他の三隅を思ひ浮かべ得るやうに書かねばならぬ事、これが此の修飾を用ゐる際に見逃がすべからざる注意要件となつて來るのであります。

擧隅法の例は古今の文章に、擧げるに堪へぬ程多くある。貝を拾ふことを「渚に出でて螺をしける」といひ、劇場を「七箇所の櫓」といひ、人家を數ふるに何軒或は幾煙といひ、鳥類獸類の事を「空を翔る翼、地を走る蹄」といふ類ひ、すべて擧隅法を應用したものである。『古事紀』に伊邪那岐命が黃泉の軍に追はれ、千引の石を隔てゝ、伊邪那美命と對論したまふ所に、

伊邪那美命言したまはく、愛しき我が夫の命かくし給はゞ、汝の國の人草一日に千頭絞り殺さなと申し給ひき。こゝに伊邪那岐命詔りたまはく、愛しき我がなに妹の命汝しかしたまはゞ、吾れはや一日に千五百産屋立てゝなと詔り給ひき。とある千頭千五百産屋は、平たく云へば千人千五百人といふ事であるが、人體の最要部分たる頭を指し、出産に重要な關係のある産屋を掲げて、苦もなく他の部分を想像せしむるが故に、一層の強み、床しみ面白味が生じて來たのである。

彼れは競爭者の金剛石（ダイアモンド）なるを聞きて、一度は汚され辱められたらんやうにも怒りをなせしかど……（尾崎紅葉、金色夜叉）

はダイアモンドの指輪を嵌めた洒落男（しやれをとこ）といふ意味であるが、その男の特色を最も鮮かに見せる部分を掲げて面白くしたのである。

四一

一二　反語法（Irony）　眞意を表面から言ひ表はしては面白くない場合に、味ひをつける爲め、故らに逆を行つて、眞意を反對に立言する修飾がある。廣い意味では、之れを逆語法と云つてもよい。例へば東といふべきを故らに西といひ、上といふべきを故らに下といひ、馬鹿と罵るべきところを故らに「えらいお悧巧だ」といひ、色の黒い醜婦を故らに「色白の御美人樣」といふ類ひで、昔から倒語「さかさまことば」といひ、入間樣（やう）といひ或は俗は「あまのしやく」など云つたのが即ち是れである。

逆語法は或は單に戲れに用ゐることもあり、或は政略の爲め、他聞を憚る事を言ひくろめる爲め、もしくは凶事を忌み、世直しをする爲めに用ゐることもある。面白い事を「面黒い」といひ、「夏の日を涼しといふや入間樣」何と見ても雪ほど黑いものはなし」といひ、「なし」の音を忌んで梨を「ありの實」といひ「切る」といふのを忌んで、膳の緒を切る事を「胎衣をつぐ」といひ、日蝕月蝕を「日はゆ」「月はゆ」（榮映）といひ、失火を「水流れ」といふ類ひ、すべて之れに屬するものである。

是等の逆語は要するに知識上の戲れに過ぎないが、こゝに他を諷刺嘲弄するために逆語を用ゐ、相手をして怒るに怒られず、喜ぶに喜ばれざらしめて、正面から罵詈したよりも一層の效果を收めんとするものがある。此の言に毒のある逆語を稱して反語といふ。英語にアイロニー（Irony）といふのがそれである。例へば、

或所に儒者あり、家貧にして一僕を召使ふ。隣家は富有の家にて家僕多し。かの儒者の僕が、隣家の僕に對し隣家を貴びほめて我が事を賤しめ譏る事度々に及ぶ。儒者怒りて僕を召して、汝常に隣家の事を貴びほめて、我が事を賤しめ譏る、不義不禮なる奴かなと叱り詈りければ、かの僕笑ひて、私は聖人の道を行ひ候ふといふ。儒者いよ〳〵怒りて、汝が云ふ聖人の道とは何事と問ふに、僕答へて、君常に弟子衆に教へ給ふ事は、聖人の道にて候ふと承り候ふ。弟子衆と御物語に、いつも日本を賤しめそしり、中華とやら申す外國を御ほめなされ、御羨みなされ候ふを、常に承り居り候ふ事故、聖人の道と申すは、かやうなる事と存じ罷在り候ふ。私が隣家を貴びほめ候ふは中華とやらを貴びほめ候ふと同じ意にて候ふ。主人の御家を賤しめ譏り候ふと同意にて候ふ、これ聖人の道を行ふにて候ふ。

儒者いよ〳〵怒りておのれにくき奴めといひたれども、呵るべきに詞なくして閉口しけるよし、承り及び候ふ。（伊勢貞丈、幼學問答）

必ず去られて戻るなと、念に念をつかうた今度の嫁入よう戻りやつた父様お聞きなされたらお悦びなされうぞ。お顔見せる折があらう、必ず聲高に物しやんな。（近松門左衛門、宵庚申）

四一

一三、設疑法(Interrogation)　は容易に下し得べき結論を、わざと疑問にして讀者に判斷せしむるもの、言ひ換ふれば、豫め結論に到達すべき道を作りおき、讀者をして自分の力で其處に進み入らしむる文飾である。此の法の面白味は知れた事を言はずにおいて、言ふに優る效果を收むる所、讀者の心に活動の餘地を與へて快く考量し解答せしむる所にある。それ故設疑法において揭ぐる疑問は難解の疑問にあらずして容易に決し得べき疑問でなければならぬ。例へば酒の害を列擧して後に、酒を飲む者は自暴自棄の愚者である」と斷定するよりは、「然らば酒家を稱して智者と云はれませうか」と、疑ひ問うた方が讀む者に面白く、奸人賣國の所行を敍して「武士といふべからず」と斷ずるよりは「之れをしも日本武士といふべきか」と問うた方が讀者の興を惹く類ひである。

神は我れなり、外に求むべからずといひたる人は、……いで我れなりと思ひ給ふならば、又よく思ひて見給へ。我が如く色に染みたる神ありや、酒好みて程知らぬ神ありや、見る物に魂奪はれ、聞く毎に心とられ、人に欺かれても知らぬ神ありや。たゞ神は人なり、我れは神なりといふはいと易かめれど、正しく直き神德の曇ることなく、照らさゞることなきを得て後にこそ。（松平定信、花月草紙）

犬れ三尺の童子は至りて無智なり。犬豕を指して、之れをして拜せしむれば、則ち怫然として怒らん。今醜虜は則ち犬豕なり。堂々たる天朝相率ゐて犬豕を拜す。曾て童孺の羞づる所、而して陛下忍んで之れを爲すか。（胡濬菴「上高宗封事」）

四二

一四、倒裝法(Hyperbaton)　は又倒敍法、換序法と云つてもよい。文法上、論理上普通なる句作りの順序を倒まにする修飾法である。感情が高まつて普通平生の言ひ表はし方をなし得ぬ場合を寫すに適した方法で、述部を前にし主部を後にする方式が最も多く行はれてゐる。例へば情の激した場合に「早く來ないか」と云ふよりは「來ないか、早く」といふ方が面白く、「貴樣は馬鹿だ」と云ふよりは「馬鹿だ、貴樣は」といふ方が面白く、「あの男の心は高潔だ」と云ふよりは「實に、高潔だ、あの男の心は」といふ方が活きて來る類ひである。「人の咎むるを恐れむよりは、如かず自ら守るの固からんには」「未だ聞かず、悦びありて世を捨つとは」など、是れである。

此の御末ぞかし、今の世に源氏の武者の族は。（天鏡）

搖れぬやうにやつてくれと、警部は更に人夫に向つて諭告した。護送掛は劍欅を握つて門外に立つた。天白く星疎らに、風は梧桐を動かして鷄の聲

が遠方近方に聞こゆる時。（尾崎紅葉、青葡萄）

本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきが故に。惡をも恐るべからず、彌陀の本願を妨ぐる程の要なきが故に。（親鸞歎異鈔）

四四

一五、漸層法(Climax)　は語句思想を次第に強く、大きく、高く、深く按排する修飾法で、謂はゆる一級高一級、一歩進一歩の法である。例へば韓退之の「伯夷頌」に「一家非とするに力行して惑はざる者寡し。一國一州非とするに力行して惑はざる者に至りては、則ち千百年に一人のみ。伯夷の若きは天地を窮め萬世に亙つて顧みざる者なり」とある類ひで、第一句は第二句の爲めに準備し、第二句は第三句の爲めに土臺を置き、かくして一歩々々に調子を高め行くのが此の法の姿である。此の法は演說に於ける論陣の布き方などに應用して殊に效果のあるものである。

佛曰はく百人の惡人に食を與へんよりは、一人の善人を養ふに若かず。千人の善人に食を與へんよりは、一人の佛の五戒を守る者に食を與へんよりは、一人の須陁洹に食を與ふるに若かず。百萬人の須陁洹に食を與へんよりは、一人の阿那含に食を與ふるに若かず。千萬人の阿那含に食を與へんよりは、一人の阿羅漢に食を與ふるに如かず。十億の阿羅漢に食を與へんよりは、一人の辟支佛に食を與へんよりは、一人の三界の佛を養ふに若かず。過去、現在、未來、三世の佛千億萬に食を與へんよりは、一人の無念、無住、無修、無證、卽ち智識偏頗、修養、悟等の上に超脫せし人に食を與ふるに若かず。（四十二章經）

漸層法は人を勸誘折伏するに大效があると共に、人を誑しそゝのかすにも驚くべき效力がある。通常の言ひ表はし方では齒牙にも掛けられぬほどの暴說暴論も、漸層の形を取れば、往往にして人を感奮昂激せしめる。いつぞや足尾銅山に暴動の起こつた時、社會主義者の一辯士が工夫等に演說して「諸君はマッチを買ふ權利を有して居る、從つてマッチより火を出す權利がある、從つて物を燒く權利がある、從つて足尾銅山數百萬の財產を灰にしてしまふ權利を有つて居る」。と云つたといふ話であるが、論理から言へば「我等は刀を買ふ權利を有して居る、從つて人を斬る權利もある、從つて親を殺す權利もある」といふのと同じ暴論であるが、巧みに漸層の形に現はされた爲め、遂に無智なる工夫の怒火に油をそゝいで、ゆゝしき大事を惹き起こすに至つたのである。古歌に、

雨ならば宿もかるべき夕暮に霧にぞいたく袖ぬらしぬる。

といふのがある。潛淵暗長で、漸層は詞藻のあやとしては面白いが、道理上から云へば、人の說を聞くにあたつて大いに警戒を要するものである。

四五

一六、連鎖法(Concatenation)　は蟬聯格、文字鎖ともいひ、俗には尻取文句ともいふ。前句の末の語を再び次ぎの句の首に置くもの、同じ註を前後に排列して上授け下受くる推移連接の工合

に云はれぬ妙味あらしめるものである。例へば「三界皆佛國、佛國それ衰へんや、十方悉く寶土、寶土何ぞ壞れんや」の類である。

其のあるじと住みかと無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝顏の露に異ならず。あるは露おちて花殘れり、殘れりといへども朝日に枯れぬ。あるは花しぼみて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。（鴨長明、方丈記）

楚山秦山皆白雲、白雲所所長隨君、長隨君、君入楚山裡、雲亦隨君渡湘水、湘水上、女蘿衣、白雲臥君早歸。（李白）

是等の例を見ても知られるやうに、連鎖法の美は思想、内容の上にあらずして、主として形式の上、即ち語句排列の上に存する。故に之れを濫用すれば厭味を生ずるけれども、節約して巧みに適所に用ゐれば、云ひ知らぬ趣を生ずるものである。例へば「彼れはえらい男だけれども、油斷なさるな」と云へば一通りそれ丈であるが、「彼れはえらい男ですけれども油斷なさるな」と言へば人に首をひねらせる丈の力が生じて來るであらう。要するに此の法を用ゐるに當つて注意すべき事は、之を濫用して文字を弄ぶ弊に陷らぬこと、成るべく儉約して適所にのみ用ゐべきことである。

四六

一七、警句法(Epigram)とは言ふ所奇拔にして人の意表に出で、言簡單にして、旨味があり、而もぴりッと人を刺す所のあるものをいふ。「警句は蜂の如く、形小にして蜜あり、又針あるべし」とはうまくも云つたものであります。

警句には唯だ言の奇なるものがあり、表面は平凡なやうで、中に深長なる意味を含むものがあり、又言葉は不合理なやうで、而もよく道理を穿つたものがある。例へば「瑠璃も玻璃も照らせば光る」「得手に帆をあぐ」「二階から目藥」「泣きつらに蜂」などいふ諺をはじめとして、イギリスのカーライルが「窓から蜜柑を拋り投けて中たつた通行人を大臣とすべし」といへる、フランスのピュラフォンが「天才は忍耐なり」といへる、希臘のセミストクルスが「娘をやるなら、人間の無い金によりは、金の無い人間にやる」といへる類ひである。

警句の中最も價値のあるものは、語逆理順の警句(Paradox)である。例へば「急がば廻れ」「負ける は勝ち」等の諺を始めとして、「隱れたるより見はるゝはなく、微きよりあきらかなるはなし」「事修まつて謗興り、德高うして毀來たる」「煩惱卽菩提、差別卽平等」「理が非になるは公事の常例で御座る」といふ類ひである。

大道廢れて仁義あり、慧智出でて大僞あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠臣あり。（老子）

善人なほ以て往生を遂ぐ、況んや惡人をや。（親鸞、歎異鈔）

小早川隆景ある時急速の事ありて、右筆に物を書かするに「急用の事なり、靜かに書すべし」といはれしとぞ。（隆景言行錄）

四七

一八、反覆法(Repetition)　芽出度い事、芽出たからぬ事、うれしい事、悲しい事、面白い事、奇妙な事、すべて深く人の興を引き情を動かすものがあれば、一度云ふ丈では滿足せず、再びも三たびも繰り返して、其の深い興味感情を傳へんとするのが人情である。君家に幸あれと祈る心は一言で述べ盡くせぬ故に「君は千代ませ、君は千代ませ」と繰返し、松島の景色の美しさは、一個の感詞では現はし切れぬ故に「松島やあゝ松島や〳〵」と繰返し、顏回の學德は一言では譽め足らぬ故に「賢なる哉回や、賢なる哉回や」と反覆する。而してかやうな反覆は感情興趣の深さ、高さ、烈しさ、大いさを傳ふると共に、反覆其の事が一種の美を人に感ぜしめる。語句の反覆が人に面白味を感ぜしめるのは、並行した直線、曲線或は並樹、行列などが人を喜ばすのに異なることがない。

かやうに同一の語句を繰返して趣味を高め、感興を添へる修飾法を稱して反覆法といふのである。

白河殿にはかくとも知ろし召さゝりしかば、左大臣殿(賴長)武者所の親久を召されて、內裏の樣見て參れと仰せければ、親久卽ち馳せ歸り、官軍既に寄せ候と申しも果てねば、先陣既に馳せ來たる。其の時鎭西八郎爲朝申しけるは、爲朝が千度申しつるは妥候々々と忿りけれども力及ばず。(保元物語)

秀賴事成立ち候樣に、この書付候衆しん、賴み申候。何事も此の外には思ひ殘すことなく候。かしく。返すゞ〳〵秀賴事賴み申候、五人の衆賴み申上候。名殘惜しく候。(太閤秀吉遺言)

廣い意味で謂ふ反覆法の中には、右の外に、同一の語を句首(頭韻法)又は句尾(脚韻法)に於いてのみ繰返すもの、同一の調子を繰返すもの(對偶法)、同一の語句を文の處々に點ずるもの、文の頭において語句を再び文尾に繰返すもの、文尾の語句を再び文首に繰返すもの(連鎖法)など、いろいろある。

一九、頭韻法(Alliteration)　は句の頭に同じ響きのある語を繰返すものである。俗に「火まはし」或は「火なぶり」などいふのは頭韻法を應用した遊戲と見るべきものであらう。例へば「ひらひら、ひらめく日の御旗」「鶴が岡に鶴を放し鶴の紋をつけらるゝ」「人待つ宵の火なぶりや、引き裂き紙のひねり元結で火廻はしを火斗、日野絹、獨寢緋無垢、冷酒、引舟、火桶、ひよどり、姫小松……」の類である。此の詞姿の面白味はたゞ頭の音の同じ語を揃へた所にあり、從つて、その弄語的の修飾は、文章の本領から云へば、寧ろ末技に屬するもの、俗子を悅ばず洒落に過ぎぬもの、拙く用ゐれば文の品位を害ふべきものであるが、其の音調をよくし、耳を喜ばす點より見れば、少なからぬ效力のあるもの、用ゐる樣によつては、少しも文品を傷つけずして利用し得べきものである。現に西洋の文學に於いては滑稽物は云ふに及ばず、一流の大家の堂々たる大作にも立派に用ゐられて、大いに光彩を放つて居るが、惜しいかな、日本文に於いては多く洒落滑稽の下品な方面にのみ用ゐられて、此の修飾法の價値を高めるやうな例が甚だ少ない。

頭韻法と相竝んで脚韻法といふものがある。

脚韻法は語(ことば)の末、句の脚に同じ韻(ひゞき)の語を繰返すものである。例へば喜撰法師の

木の間より見ゆるは谷の螢かも、いざりの舟の沖にゆくかも。

或は俗歌の

お前百までわしや九十九まで、共に白髪のはえるまで。

揃うた揃うた踊子が揃うた、稻の出穗よりなほ揃うた。

の如きをいふ。しかしながら嚴密にいふと、日本文には散文にも律語文にも、特に脚韻といふべきものがない。昔の歌などの中に韻と稱されて居るものもあるが、それは多く偶然に揃つたので特に押韻といふべきものではないらしく、又近年になつて脚韻法を試みた人もあるが、其の企ては大抵失敗に歸して居る。三十餘年前の『新體詩集』に載せた外山正一氏や矢田部良吉氏等の試みたものは云ふに及ばず、近頃の新體詩人の試作ですら、韻を踏んだ爲めに面白くなつたといふ點は殆んど無いのみならず、却つて之れが爲めに趣致の害はれた傾きさへある。少なくとも支那や西洋の詩歌の如く、押韻の爲めに趣致の加はるといふ事は殆んど無い。それは恐らく押韻といふ事が、日本語に相應して居らぬ爲めではないか。とにかく日本の詩歌文章と押韻との關係は、將來詩文を作る者、論ずる者の熟考すべき問題である。

たゞ脚韻法のみならず、頭韻法とても其の通りである。頭韻法といひ、脚韻法といひ、西洋もしくは支那の修辭論者の說く所によつて、しばらく其の名稱を譯し、又それに合ひさうな例を竝べては見るものの、實は之れを一括して平たく句拍子といふ方が適當である。英語に謂はゆる Tautophony であらう。句拍子とは舌に任せて口調よく言ひつゞけること、例へば大祓の祝詞に「荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開津姫といふ神、持ちかゝ呑みてん」とある、催馬樂の「東屋」に「あづまやのあまりの雨そゝぎ」とある、或は俗話に「引ツくりかへし、おつくりかへし」「やツとすツと」「一かばちかの運だめし」「二ツともさツともきかぬ」頭を振る、舌ふる今ふるな鈴ふる樣にいひけれぱ」のびた鼻毛の絲目が切れる、れる〳〵絲目が鼻毛が切れる」などの類ひをいふ。是等の例を見ても知られるやうに、頭韻脚韻、句拍子等は、我が國に於いては、とかく低級な文學に專用されて居る傾きがある。少なくとも下等な俗な趣味を表すべき部分に用ゐられて居る傾きがある。此の修飾を今後の文章に於いて、如何ほど多く又如何に上品に用ゐ得べきか。それは今後の文章家の趣味手腕によることであらう。

四八

二〇、對偶法(Parallelism ; Antithesis)　文章の形を整へる事に注意した人で、對句の構成に頭を痛めぬ人はあるまい。文の形式を過重した世に於いては、修辭の精髓は對句にありとも認められた。形式に拘泥して文章を張子の虎にする傾きのある漢文家の之れを重んじた事はいふ迄もない。漢詩に謂はゆる律排律の如きは、全く語の對偶を生命とするものである。我が源平時代、鎌倉時代より德川時代にかけての文學にも對句濫用の弊に陷つたものが頗る多く、形式上の技巧を斥ける氣味のある我が現代の文學に於いてすら、此の修飾法は猶ほ盛んに用ゐられて居る。

對偶法は調子の反覆法ともいふべき修飾法で、口調の似よつた文句を並列して並行の美、對立の美を成すものである。對句法ともいふ。漢文家の間には對法、對喩、雙綰、駢麗とも稱せられ、之れに對して上句下句相對せざるものを離支、缺偶などいうて忌んで居る。

對偶法はまた物好きな文章論者によつて、細かにうるさく分類される。唐彪の『讀書作文譜』には對法に五種ありと云つて、

一曰、正名對―例へば、天地日月。

二曰、同類對―例へば、珠玉丹青。

三曰、借字對―例へば、伍相千軍。

四曰、就句對―例へば、一麾五部餘二十萬一以臨一北、白首丹心歸二彤庭一而遇二主。

五曰、流水對―例へば、自二有生民一以來、未二有孔子之盛一。

など說き、我が弘法大師の如きも對に二十九種あると云つてくだ〳〵しく分類して居る。しかし是等はいづれも牽强附會なる、煩瑣なる、非科學的なる分類で、實際に益なきものであらう。

對偶法の種類や小分に關しては二句の對あり、三句以上の對句が一團を成して更に他の一團に對するものあり、同類の事物相對することもあれば、反對の事物の相對することもある。此れ位で先づ澤山であらうと思ふ。例へば「棹はうがつ波の上の月を、船はおそふ海の中の空を」「倉廩實ちて禮節を知り、衣食足つて榮辱を知る」は同類二句の對偶、「清貧は恆に樂しみ、濁富はつねに愁ふ」「君子の德は風、小人の德は草」「好事門を出でず、惡事千里を走る」は反對の事柄の事物の二句の對偶「伊勢の海の、清きなぎさの、潮がひに、なのりてや、摘まん、貝や、拾はん、玉や、拾はん」は三句の對偶、「耳も目も聾ひず霞まず」は交互隔置の對偶、「春過ぎ夏來たれども進み難きは出離の道、花を惜しみ月を詠めても起こり易きは輪廻の妄念なり」は對句の一團が更に他の一團の對をなしたものである。

對句より成つた文章には名句が頗る多い。「煩惱は首に乘る、盃は花に乘る」「恨みの至りて恨めしきはさかりにて親に先だつ恨み、悲みの至りて悲しきは老いて子に後るゝ悲み」「花下に歸るを忘るゝは美景による、樽前に醉を勸むる此れ春風」「水は濕へるに流れ、火は燥けるに就く」「滿は損を招き、謙は益を受く」「譬には手を以て酬いんと思ふこと多く、恩には口をもて報ずること多し。」この類ひである。

古の事をも事の跡にあらはし、行きて見ぬ境をも看ながら知るは、たゞ此の道なり。しかのみならず、花は木ごとに咲きて心の山を飾り、露は草の葉より積もりて言葉の海となる。しかはあれど難波江の海人の藻汐は汲めどもたゆることなく、筑波山の松木は拾へどもなほしけし。（續古今集、序）

人の己れを譽むる、己れに於いて何をか加へん。若し譽によつて自ら怠らば則ち反りて損せん。人の己れを毀る、己れに於いて何をか損せん。若し毀によりて自ら强うせば則ち反りて益せん。（佐久間象山）

夫れ當山（羽黑山）は……烟翠色を埋みて千里に連り、日晴嵐を射て一方に聳ゆ。危巓は箕を學んで風木の葉を簸、懸泉は布をたれて水聲礎を打つ。峰崎嶇くして劍を立てたるが如く、道めぐりて羊腸に似たり。旦に牧笛雲を穿つて過ぐれば、夕に樵歌月を帶びて行く。或は塊石頭の上にあつて蹲る虎かとおどろかれ、又は老松足もとに橫たはりて蟠る龍とも云ひつべし。頭をめぐらせば山嶂遠うして重疊、耳をそばだつれば猿猴鳴いて寂寞。數株の松柏森々と茂り、晝も日影をもらさねば、苔滑らかにして常に雨の後の如く、暗きこ

と月なき夜に似たり。（柳亭種彦、淺間嶽面影草紙）

對偶法を用ゐるについて注意すべきことは、成るべく節約して適所にのみ用ゐるべきこと、及び對偶の間に變化あらしむべきことである。

四九

二一、避板法　支那の劉勰といふ學者の『文心彫龍』といふ書物には圓轉變化を貴び、方板、雷同を忌む、篇々一律なるが若きは方板雷同の至り也」と云つて居る。同じ語句同じ調子を繰返すのは一種の美であるが、過ぐればうるさくなつて厭味を生ずる、而して此の累語累調の厭味を避くるには反覆の間に變化あらしめねばならぬ。方板雷同を忌み、圓轉變化を貴ぶのは、啻だに論文に於いてのみならず、各種の文章一つとして然らざるはない。故に反覆對偶の修飾を用ゐようと思ふ者は、常に反覆の利弊を考へて、適宜の場合にのみ反覆し、而して反覆の間に變化あらしめることを謀らねばならぬ。反覆の美と變化の妙とを兼ね備へんことを工夫せねばならぬ。前節の最後に引用した種彦の『淺間嶽面影草紙』の文の如きは、わざとらしく對句を累ねたもので、弊に陷つたものである。

同語重複の厭味、同じ調子の句が竝び過ぎ揃ひ過ぎて一本調子になり過ぎた厭味を板といひ、或は呆板、平板、方板ともいふ。而して同調子の句を累ぬる際に、其の間に變化あらしめ、板の厭味に煩はされずして累調の美を味はゝしむる修飾を避板法といふ。避板の方法に主なるものが四種ある。第一は語句前後法、第二は用語轉換法、第三は長短參差法、第四は諸體交用法

である。

第一の語句前後法とは、語句を前後に置きかへて變化あらしめるものである。例へば「年々歳々花相似たり」を承けて「歳々年々人同じからず」といひ、「うつし世いふに足らず」を受けて「いふに足らぬうつし世」といふ類ひで、「行こか歸ろか行こか」「花が蝶々か、蝶々が花か」など、皆同じ語句を前後して變化をつけたものに外ならぬ。

第二の用語轉換法とは同じ事物を言ひ表はすに異つた語を用ゐて變化をつけることで、異辭同義の語を用ゐ、異性の品詞を用ゐ、係結を異ならしめ、用語の一部分を換へ、或は添詞を用ゐるなどが、その主なる方法である。例へばする事爲す事、いすかの嘴とくひちがふ、憂への上に憂へを添へ、歎きの上に歎きを重ね、貴族院は時に猫の如く時に虎の如く、時に鼠の如く時に獅子の如し」の類である。

太郎をば賴家といふ、弟をば實朝と聞こゆ。（増鏡）

山川悉に動み、國土皆震りき……高天原皆暗く、葦原中國悉に闇し。（古事記）

見るうちに、見るうちにふる花吹雪、彩雲も薄れに薄れ、妙音樂の、調べも遠く、遠くなつて、天の羽衣燦然に閃く羽袖も微かになつて、やがて纖塵も中空に、只だ明月ぞ殘りける、明月ばかりぞ殘りける。（坪内逍遙氏、ゞゞや姫）

第三の長短參差法とは、語句を長短打ちまじりにして變化を添へることをいふ。例へば「あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ」「月夜よし夜よしと人に言ひやらば來てふに似たり待たずしもあらず」……大方ならぬ因果とやこれを申すべし。悲し。」といふ類ひで、或は短斷迫促の調

に次ぐに悠長なる調を以てし、伸びやかに續いて來た文句を短促の句にて止むる如き、或は七五、五七の間に三四六八等種々の長短句を交へるなどが其の主なる方法である。

寸陰をしむ人なし。これよく知れるか。愚かなるか。愚かにして怠る人の爲めに云はば、一錢輕しといへども、これを重ぬれば貧しき人を富める人と爲す。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。（兼好、つれ〴〵草）

第四の諸體交用法とは、いろ〳〵反對の文句を交へ用るて變化をつけることで、例へば肯定句と否定句とを交へ用る、平敍、咏嘆、疑問、等の諸體を併せ用るる如きをいふ。肯定句否定句の交用とは例へば

風は形なくして松にひゞき、花は色あつて物いはず。（西鶴、町人鑑）

ひそかに指を折りて古人を數ふれば、賢きも去り愚かなるも留まらず、たゞ空しき名をのみ殘すことの哀れさよ。（西行、撰集抄）

平敍、疑問、咏嘆の諸體を併せ用るるとは、例へば、

重仁國知らすべき才あり、雅仁何等のうつはものぞ。（上田秋成、雨月物語）

綠樹影沈んで魚樹に上る景色あり、月海上に浮かんでは兎も波を走るか。面白の景やな。（謠曲、竹生島）

あだし野の露消ゆることなく、鳥部山の煙消え去らでのみ住みはつるならひならば、いかに物の哀れもなからん。世は定めなきこそめでたけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つく〴〵と

一年を暮らすほどだにもこよなうのどけしや。あかず惜しと思はゞ千年を過ごすとも一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に見にくき姿を待ち得て何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ目やすかるべけれ。（つれ〴〵草）

要するに單調の美と變化の妙とを兼ね備へること、方板雷同の弊に陷らずして回轉變化の妙を得ること、それが反覆法の對偶法を用るる者の常に注意すべき要點である。

五〇

二二、擬態法　は事物の態度を摸して、それを活き〳〵と寫し出だす修飾である。例へば「おどろ〳〵と鳴る神」「ちう〳〵と鳴く雀」「こう〳〵と鳴く鳥」といふ類ひで、聲を摸する場合が最も多い所からして英語にてはオノマトピーア（Onomatopoeia）といひ、譯して聲喩或は擬聲法などいふけれども、是れは單に音聲のみならず、目に見える形（そろ〳〵、のろ〳〵、はき〳〵の類）肌ざはり（ぬる〳〵、すべ〳〵、ちく〳〵の類）嗅覺（ほやりと香ふ、クンとこたへるの類）などについても言ひ得ること故、おしひろめて擬態法といふ方が穩かであらうと思ふ。「かきつばたべたりと鳶のたれてけり」「下駄ころりからりきやつらが夕涼み」「水さつと鳥はふわ〳〵ふうわふわ」の類皆それである。

足もすわらぬ行燈の我が影にびつくりして、わな〳〵ふるふ箱階子ぎし〳〵ぎし〳〵鳴る音も、耳にこたへ胸に沁み氣を押へ息をのみ、やう〳〵惱み登りつき、溜息ついたる女業……（近松、淀鯉出世灘德）

寢られぬまゝに私は夜着の中で今聽いた母の說明を反覆し〳〵味はつて見た。まづ何處かの飼犬が緣の下で子を生んだとする。小ぽけなむく〳〵としたのが重なり合つて、首を擡げてミイ〳〵と乳房を探してゐる所へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へドサリと横になり、片端から抱へ込んでベロ〳〵舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくコロ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷ぎして起き返り、又ヨチ〳〵と這ひ寄つて、ボツチリと黑い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽てゝチウと吸ひついて、小さな兩手で揉み立て〳〵吸ひ出すと、甘い溫かな乳汁がどく〳〵と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何ともいへずお甘しい。と腋の下から、まに乳首に有り附かぬ兄弟が鼻面で割り込んで來る。奪られまいとして產毛の生えた腕を突張り大騷ぎやつて見るが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸ひ付く。其の中にお腹も滿くなり、親の肌で身體も溫まつて、溶けさうな好い心持になり、不覺うと〳〵となると含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にも狼狽てゝ又吸ひ付いて、一しきり吸ひ立てるが、直に又他愛なくうと〳〵となつて、乳首が遂に口を脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない……其の時忽ち暗黑からもじや〳〵と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がヌツと出て、正體なく寢入つてゐる所を無手と引つ攫み、宙に吊す。驚いて目をボツチリ明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息氣が塞りさうだから、出ようとするが、出られない。しばらく藻掻いて居る中に、ふと足掻が自由になる。と頸元を撮まれて高い〳〵處からドサリと落された。うろ〳〵として其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な所で、誰れも居ない。

五一

擬態法は事物の狀態を活躍させるに最も有效なる詞姿の一つで、其の最も多く用ゐられるのは日本文だとも云はれる。又多くの詞姿の中には自然を欲し、無技巧を標榜する新式の文字から斥けられるのも多いが、擬態法は舊式文章よりも寧ろ多く新式文章に用ゐられるといふ傾きがある。但し此の詞姿には場合によつて讀者の感情を刺戟し過ぎる嫌ひがあり、又とかく文の品位を輕くする傾きがある故に、謹嚴を主とし、品位を重んずる文章に於いては、特に其の用ゐ方を謹まねばならぬ。

二三、咏嘆法 (Exclamation)

切なる思が胸に滿ちて之れを語り得ざる時は、之れを咏嘆の聲に漏らし、之れを語りて盡くし得ざる時は、添へるに咏嘆の語を以てする。咏嘆法は此の人性の上に立つ詞姿で從つて常に深き高き、強き、激しき感情を表はす爲めに用ゐられるものである。此の法の形式は一樣でない。或は平叙文の最後に「あはれ」「嗚呼」「かな」「かも」「や」「よ」等の感投詞の添へたのもあり、主語、述語、客語より成る通常の形式によらずして咏嘆の語のみから成るものもあり、又疑問式にして咏嘆の實があるものもある。「此の花の思ふことなけに美はしき哉」「賢なるかな囘や」の如きは第一の例、「人知れぬ思ひかな」「詛ふべき世の中よ」の如きは第二の例、「是か非か」「美はしきものなどて脆き」の如きは第三の例である。

家は聖護院の森にかくれて、寒き梟の聲におどろき、名は落柿舍の梢に殘りて、空しき秋の色を恨む。世ははた如何ならん、我れはたかくならん。窓のあらしに燈を守り、軒のしづくに影をしたふ。惜しむべし、あゝ、悲しむべし、あゝ。(支考、落柿先生の挽歌)

(主上)山鳩色の御衣に、びんづら結はせたまひて、御涙におぼれ、小さう美しき御手を合はせ、先づ東に向はせたまひて、伊勢太神宮正八幡宮に御暇申させおはしまし、其の後西に向はせたまひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱きまゐらせて、波の底にも都の候ふぞと、慰めまゐらせて、千尋の底にぞ沈みたまふ悲しいかなや、無常の春の風、忽ちに花の御姿を散らし、いたましいかな別段の荒き波、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長きすみかと定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歳のうちにして、底の水屑とならせおはします。十善帝位の御果報、申すもなかゝ〳〵おろかなり。(平家物語)

* * *

餘りに不揃ひなしどろもどろのお話でありましたが、右に說いた所で、今までの修辭學書に說いてあるおもなる詞姿、殊に今日の新しい目で見ても價値があると思はれる詞姿の大要は悉くしてある積りであります。

それで修辭學の中心要部たる四大要素の中、基礎論、修飾論の二つが濟みました。これから節を改めて第三の要素たる文體論の說明に移りませう。

五二

文體論の說明をする前に極ざつと文章分類のお話をしたいと思ひます。

文章の分類は國により、時代により、人によつて、それ〴〵に違つて居ります。支那人は本來細かい列擧を好む國民で、その有名なる文章學者の著述の中には、文章の種類を百幾十種に分けたのもあります。しかしながら、是れには唯だ煩瑣なばかりで、道理の根據といふものが殆んど有りません。

今の我が國では、殊に學校の作文教育の方面では、文章の分類に書翰文、記事文叙事文、紀行文、抒情文、叙景文、感想文、寫生文、儀式文、說明文、議論文などいふものを適宜隨意に擧げるのが普通になつて居りますが、これもよい加減の列擧で、道理の根據といふものが殆んどありません。例へば最も普通なる記事文と叙事文との區別、特色などについてすら、はつきりと說明したものが殆んど無い位で、その他については尙更の事であります。

日本、支那の文章學者の分類は、十分要を得て人を頷かしめるものがあります。彼等は概ね文章を散文及び韻文の二種に分かち、而して散文を更に分かつて記實文、叙事文、說明文、議論文の四種として居ります。

記實文(Description)は記物文の意で、物を有りのまゝに寫す文章をいふのである。例へば人物の顏容や、山水の景色や、草木の有樣や、鳥獸の樣子、物の形狀、色彩、位置など、簡單にいへば物の落ちついた靜かな有樣を、見えるがまゝに書くのをいふ。短い例を引くと、「荒海や佐渡に橫たふ天の川」「柳散り、清水かれ石ところ〴〵」

西へ西へと降りて行くと、空が急に曇つて來て、四方には深靄が降り、とんとまあ歩きつゝ

夢を見て居るやうな心持。と、いつの間にやら、繁つた大きな木が蔽ひかぶさつてゐて、昼とは思へんやうな昏い、物凄い溪間へ出てゐた。はつと思ふと、すぐ目の前に、大きな十抱もあらうといふ上下八股の樟の木が横倒しのやうに生えてゐて、其の股に何とも言へん怖ろしい――獣類だか、鬼だか、神だか分らん――者が横ねぢれに挟まつてゐて、のたうつては呻き、呻いてはのたうつ。のたうつ度に、木も岩も地震のやうに震動する。其の呻く聲は冬の暴風のやう。(坪内逍遙氏『役の行者』)

叙事文(Narration)は事の移り行く道程を寫す文章である。記實文が主として、空間に於ける靜態を寫すのに對して、是れは主として時間に於ける活動進行の模様を寫す。旅行、難船、饗宴、戰爭といふ類がその取扱ふ題目で、從つて小説や旅行記、戰爭記などは、おもに此の部類に屬するものである。例へば「時雨れけり、走り入りけり、晴れにけり。」の類である。

去程に、一の谷の軍破れにしかば、武藏の國の住人熊谷次郎直實、平家の公達の助船に乘らんとて、汀の方へ落ち行き給ふらん、あつぱれ好き大將軍に組まばやと思ひ、細道に懸つて渚の方へ歩ませける處に、爰に練貫の鶴繡うたる直垂に、萠黄匂の鎧着て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作の太刀を帶き、二十四差いたる截生の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乘つたりけるもの一騎、沖なる船を目に懸け、海に颯と打入れ、五六段ばかりぞ游がせける。熊谷、あれは如何に、好き大將軍とこそ見參らせて候へ。正なう敵に後を見せ給ふ物哉、返させ給へ〳〵と、扇を擧げて招きければ、招かれて取つて返し、渚に打上らんとし給ふ所に、熊谷浪打際にて押並べ、無手と組んで、どうと落ち、取つて抑へて首を掻かんとて、甲を押仰のけて見たりければ、薄化粧して鐵醬黒也。我が子の小次郎が齢程して、十六七許りなるが、容顔誠に美麗なり。抑も如何なる人にて渡らせ給ひ候ふやらん。名乘らせ給へ、助けまゐらせんと申しければ、先づかういふ和殿は誰そ。物共の數にて候はねど、武藏の國の住人熊谷次郎直實と名乘り申す。さては汝の爲めには好い敵ぞ。名乘らずとも首を取つて人に問へ、見知らうずるぞと宣ひける。(平家物語)

五三

[一]序に、日本、支那の文章學者の謂はゆる「記事文」「叙事文」の意義の不精確なる事について一言したいと思ふ。此の數年このかたの我が文章論者の中には、往々「記事文は物の靜態を寫す文、叙事文は事の推移を寫す文、といふやうな定義を下して居る人もあるけれども、是れは西洋の四種別論によつて一といふよりは寧ろ四種別論を翻譯した論によつて、新たにつけた定義であつて、和漢の文章學者の考へ用ゐてゐた本文の意義ではない。是れは『文體明辨』に「按ずるに紀事は記志の別名にして野史の流也。古は史官時事を記すことを掌りて、耳目の逮ばざる所の者は、往々にして遺せり。是に於いて文人學士見聞するあるに逢へば、手に隨つて記錄し、或は以て史官の採擇に備へ、或は以て史籍の遺亡を補ふ。名同じからずと雖も、其の記事たるは一なり」といひ、『讀書作文譜』に「記は記事の文なり、單に事を叙する者あり、議論を純とする者なり、半叙事にして半議論なる者あり、又物に託して意を寓する者あり……」と云つて居るのを見ても解るであらう。又我が國の『記事論説何々』など云つて類題文例を集めた書物に、登山や運動會

の事を書いた文を記事文と稱し、古人の偉業や戰爭などを書いた文を叙事文と呼んで居るのを見てもわかるであらう。要するに記事文も叙事文も昔は大まかに「物事を書きしるした文章」といふ位に取られたので、是れといふ定義もなかつたのである。

思ふに此の記事、叙事の二語について從來最も普通に慣用された意義をいふと、現在普通の出來事を書いた文を記事文と稱し、歴史上の品位ある事柄を寫した文章を特に叙事文と呼んで居たやうである。例へば、伊達正宗と直江兼續との間の小判に關する問答を書いたのが記事文と云はれるが、子供仲間の金錢いさかひを書いたのは叙事文と云はれる。武田信玄や蘇我入鹿の最後を書いたのは叙事文と云はれるが、ボチや三毛の最後を書いたのは、叙事文と云はずして記事文と云はれる。同じ花見でも太閤樣が桃山御殿ですれば、それを書いたのが叙事文となり、今の吾々が上野や向島ですれば、それを書いたのが記事文となる。同じ布や簾の上げ下げでも、平安朝の清小納言が簾を撥げた事は叙事文となり、今の吾々が洗濯物の上げおろしは記事文になる。と、まあ斯ういふ譯合で記事文、叙事文などいふ我が從來の文章分類の不精確な事はこれでも知られるが、とにかく是れが長い間の用ゐ習はしであつたのであります。又「記事文」といふ語にはかういふ不精確な由來がついてるので、しかし「記物文」といふ語も如何にも變なので、熟さないと知りつゝ、わざと「記實文」といふ語をあてて見たのであります。

五四

說明文(Exposition)は、事由を、說明する、文章である。是れは道理や、事實や、手續などを公平に、冷靜に明瞭に說明すれば十分とするもので、法律學、物理學などの文章がそれである。例へば路行く貧者あり、人なき露塵に財囊の遺しあるに氣附きしと想像せよ。諺に云ふ貧の盜み、恐らくは、それを懷ろにして走らんとの慾念を起こすべし。然し又それと共に一種無類の心識を浮かべ來たりて、其の欲念は果たすまじきものと覺知するならん。此の貧者は右の心識の何の故に現はれ、何の處より來たるかを知らざるべし。然れども唯だ心中を顧みれば、其の心識の儼然として其の居を占むるあるを見ん。之れに面せざらんと欲するも面せざるを得ず、之れを蔽はんと力むるに容易く蔽ふを得ざるべし。若し又其の爲す勿れと告ぐるにも拘はらず、右の財囊を懷ろにして走りたらんには、財を得まくほつせし欲念は立ちどころに滿ち足りて其の跡を收むべきも、それが爲めに抑壓せられし右の特殊の心識は、恰も復讐を爲さんとするものの如く、我が心中の安堵を奪ひて、一種不快の感を催起し來たるべし。卽ちさきに「爲してはならぬ」と禁めたる心識は、今は「爲してはならぬ事を爲せし」といふ心識となり更り、萬感之れが爲めに壓倒せられて、折角充たしたる欲念も、遂に其の甲斐なきに到らん。

の命令といふ。又更に形容の語を用ゐて良心の聲ともいふ。(大西祝「良心起原論」)

此の中には記實文、叙事文の要素も含んで居るが、其の目的とする所が、貧者の財囊を盜む有樣を面白く描くにもあらず、竊盜行爲の經過を叙するにもあらずして唯だ良心の何物かを明らかに說明するにある。此の點に於いて說明文は他の二種の文章と混ずべからざる特色を有

つて居る。

議論文（Argument 或は Persuasion）は單に論文とも又勸說文ともいふ。勸誘說服といふやうな意味で、讀者を動かして我が意見を納得せしむることを主眼とするものである。說明文に相手を服させようとする個人的企圖の加はつたものともいふべく、四種の文章の中で、人格に待つことの最も多いものである。

西洋の文章學者の中には、右の四種別の外、便利の爲め、別に「書翰文」即ち「手紙の文」といふ一目をおく人もある。手紙の領分は甚だ廣く、同時に甚だ曖昧なものである。記實文でも、叙事文でも、說明文、議論文でも、手紙體に書けないものは一つもない。どんな文章でも宛名を書いて人に送れば皆書翰文になるであらう。それ故書翰文は四種別のいづれにでも屬して、同時にいづれにも屬せぬものであるが、實用の點からいふと、右の四種の中の片隅において附屬物扱ひをするには餘りに勿體ないものである故に、假りに取り出だして特別の說明をしようといふのである。

此の四種の分け方は、二千餘年前から今日に至るまで、長く廣く西洋に行はれた分類でありますが、日本支那に於ける從來の分け方とは比較にならぬ程はつきりした、そして道理の根據のある分け方であると思ひます。

五五

以上は在來はれて來た文章の分類について說明を試みたのでありますが、こゝに便利の爲に加へたいと思ふ分類法は二つあります。

第一はあらゆる文章を知解の文、情感の文の二つに分ける二種別案である。知解の文で十分とするもので、届書、願書、受取、送狀などを初めとして商業用文、諸種の手續方法の說明書、數學、物理學、法律學等の文章がこれである。情感の文とは相手の知識に訴へて理解をすれば、それで十分とするもので、詩歌、小說、旅行紀、その他趣味本位の文章が皆之れに屬するものである。無論多くの文章の中には、此の二種別の雙方に跨つて居るものもあらう。けれども大體この二つに分けて、「是れは相手に理解して貰へば澤山ない文章である」「是れは理解させる上に趣味を加へて相手の快感を惹き起こすべき文章である」とにらんで、見當を定めるのが、實際上非常に便利な考へ方であると思はれる。

第二は書翰文、記事文、論說文の三つに分ける三種別案である。書翰文は極つた相手（多くは一個人）に宛てゝ送る文章で、禮儀に合することを要する點や、其の他に於いて特別の注意を要するもの、又實用の多い點に於いて特別扱ひされる資格のあるものである。

こゝに謂ふ記事文は、物を寫し、事を叙し、景を描き、情を抒べる一切の文章を含むので、在來の稱呼による記事文、叙事文、抒情文、感想文、紀行文、叙景文、寫生文等のすべてに亙つて、あらゆる記叙描寫の文をいふのである。

各種の文章悉くさうではあるが、殊に事物の記叙を主とする記事、叙事、抒情、感想、寫生等の文は、大抵の場合入り交つて居るのが普通で、他の種類を混へずに、純然と獨立して居ることのめつたに無いものである。例へば玆に或る一人の學者の講演を聞いて、其の樣子を書くとする。

壇の上には小形のテーブルがあつて、其の上に草色の卓布が、掛けられ、其の上には、右に寄せて純白の水差とコップとがある。壇上の人は中肉、中背、色白で鼻筋が通り、眼が涼しく、口が締まつて、いかにも見識がありさうに見える。

といふのは靜態を寫す記實文であらう。

壇上の人はやがて說き出した。まづ過去の日本人の生活を說いて、それから現代の新らしい生活に及んだ。それから二つを比較して、斷案を下して斯う云つた。……

といふのは、時間に於ける事の推移を寫す叙事文であらう。

自分は此の人の說にすつかり醉はされて了つた。吾等の今の生活には、かやうな隱れた深い意味があるのであらうか。吾等は之から、どういふ道を取つて進むべきであらうか。それにつけてもあの人の辯舌の爽かさ、理義の透徹して居る具合、何といふ氣持のよい講演であらう、などと、百感胸中に往來して、しばらく茫然として居た。

といふのは感想文、抒情文であらう。風景を寫すにもさうである。

かやう〳〵の水の流れ、岩のたゝずまひ、草木の色彩——忽ち日光が射して明るくなつた、雲が動いて翳つて來た、風が吹いて來た、草木が靡く——あゝ美景だ、天下の奇觀だ、嘆賞之れを久しうした。

と云へば、もう記實、叙事、寫生、感想等、あらゆる記叙描寫の文種が混り具はつて來るわけである。

それ故吾等の考では西洋の記實叙事の分類は、理窟は面白いが、實際にはさまで適して居らぬ。昔の支那の學者の分類や、今の日本の雜然たる分類は、理窟がはつきりと立たぬ上に、實際上もさまで便利でない。是れは寧ろ、かやうな種類の文章を一括して之れを記事文と稱し、時と場合とに應じ、吾等が事物に見出だす要點や、吾等の心の動かさるゝ工合やに應じて、それ〴〵に或は靜態描寫の記實方面に力を入れ、或は事件推移の叙事方面に力を入れ、或は感情活動の心持の記述に力を入れるといふ風にする方がよいと思ふのである。

論說文は道理を說明し、相手を說服する文章をいふので、在來の說明文、論說文を其の中に兼ね含めるのである。

すべて世の中の事物は、人が註文するやうに、劃然と分かれて居るものではない、それと同じやうに吾等の書く文章も、一種類に個々分立し得べきものではない。從つて嚴密に云へば、知解の文も、情感の文も、書翰文も、記事文も、論說文も、皆それ〴〵に入り混つて居るのが普通であらうが、唯だ理窟と便宜とを併せ考へた結果、吾等は最後の二種別案及び三種別案が最も自然で且つ便利だと思ふのであります。

五六

文章類別論に次いで述ぶべきものは文體の論であります。

文體（Style）は文章の姿である、文の風、匂ひ、容體、風格である。一國の文章には其の國に特有にして、られるが、第一にいふべきは一國の文章の風格である。之れを國風といふ。國文體、漢文體、洋文體等は、此の標準他國の文章の眞似難い風格がある。から見た文體の名稱である。第二に、同じ國の文章でも、時代によつて、それ〴〵に他の時代の

と混ずべからざる特殊の風格を具へる。我が國の文章に例を取れば、王朝體、元祿體、文化文政體といふ如きものは、時代を標準として見た別かちである。第三に、同國同時代の文章でも、種類の異なるに從つて、それ〴〵に特殊の風格を具へる。書翰體、物語體、小說體、淨瑠璃體、俳文體、叙事體、論文體といふが如きは、文の種類を標準とした別かちである。第四に同じ國同じ時代、同じ種類の文章でも、品位により、其の時代の通用語に對する遠近により、又外來の影響を受くることの多少によつて、それ〴〵に特殊の風格を具へる。雅文體、俗文體、雅俗折衷體、談話體、言文一致體、擬古體、和漢折衷體といふが如きは、此の標準より見たる類別である。第五に、以上の諸方面悉く同一なる文章でも、言表する思想材料の性質を異にするに從つて、それ〴〵に特殊の風格を具へる。知解の文に實用文體、科學文體といひ、情感の文に華文體といふが如きは、此の標準より見たる別かちである。第六、以上の五方面悉く同樣なる文章でも、文字排列の方法を異にするに從つて、また特殊の風格を具へる。散文體、律語體、七五調體、五七調體といふが如きは、此の標準によつた別かちである。第七、以上の六方面悉く同樣なる文章でも、用語の多寡選擇を異にするに從つて、それ〴〵に特殊の風格を具へる。言少なくして意多きを簡潔體といひ言多くして叙說周到なるを蔓衍體といひ、用語の音調、行文の剛くして強みあるを剛健體といひ、柔らかにして優しみあるを優柔體といひ、思想の骨だけを言ひ表はして、光澤をつけざるを乾燥體といひ、多く修飾を施すを華麗體といふが如きは、此の標準より見たる別かちである。

文體を別かつ最後の標準は個人である。國を同じうし、時代を同じうし、種類を同じうし、品位を同じうし、現用語に對する遠近を同じうし、外より受くる影響を同じうし、言表する思想の性質を同じうし、文字排列の方法を同じうし、用語の多少選擇を同じうしても、猶ほ一の文章を他と混ずべからざる特色あらしむるものは、文章家自身の手振である。文章は此の手振があつて始めて活動する。思想を竝べる丈で一家の風格を備へざる文、古文の模倣補綴に止まつて作家の特色の發揮されざる文は、まだ文章として一人前の資格の無いものである。近松體、馬琴體、山陽體といふが如きは、此の個人的手振を標準とした名稱である。

五七

文體は凡そ右の八方面より見られるが、修辭學者のおもに說く所は、殆んど此の中の第七なる用語の多少選擇によつて生ずる文體に限られて居ると云つてもよい。而して此の種の文體の中で、彼等に重く視られ、廣く說かれてあるのは左の十種内外に限られてゐる。

第一は、内容と言語との釣合によるもので、之れに簡潔體、蔓衍體の二種がある。簡潔體（Concise style）は、思想をば成るべく僅かな語に約めて言ひ表はすものである。蔓衍體（Diffused style）は其反對に澤山の語を用ゐその思想を十分に開展して現はすもの、種々の方面より說き、完全に理解せしめんが爲めにあらゆる手段をつくすものである。『論語』『書』『易』『老子』『伊勢物語』『土佐日記』の如きは簡潔體に屬すべきものである。蔓衍體は今日の文章界に最も多く行はるゝ文體で、講話、寫生文などいふものは、概ね此の種に屬する。簡潔體の例は、

子曰、位無きを患へず、立つ所以を患ふ。己れを知る莫きを患へず、知らるべきを爲さんとを求む。(論語)

萎衍體の例は

厭でも應でも生きてゐねばならぬ必要上から食つたり飲んだりするのは萬人皆一樣だが、少し立入つて査べて見ると、態度に少なくとも三樣の區別がある。只もう生きてゐたいの一點張で飲食するのもある。所謂飢ゑたる者は食を擇ばずで、何でも關はず肚が充くなればよいといふ氣で食ふ。味ひなどは全然かまはぬ、解りもしない。生上の利害も滋養分の有無なぞも問ふ遑もなければ問はうともしない。これを農夫式といつてもよい。極低い意味で實用的なのである。

次ぎに一層進んだ意味で實用的に飲食する連中がある。先づ滋養分の多少といふ事を考へる、消化の難易といふ事をも考へる、又時としては經濟上の損德といふ事をも考へる、それから美味不味といふ事をも考へる。中には此の四拍子が揃はねば快く飲食せぬといふ程の神經家もあるが、大抵は此の中の二拍子だけ揃ふを程度として飲食する。此の連中は只生きる爲めに飲食するのでは無く、健康に、壯强に、安易に、愉快に有爲に生きてるようと願つて飲食するので、第一種の飲食家に比べると立派に有目的の飲みかた食ひかたをするのである。(坪內逍遙氏「人生道樂」)

第二は文章に於ける勢力の有無、或は勢力の質によるもので、之れに剛健體、優柔體の二つがある。剛健體(Nervous style)は强い、骨張つた、力を主とした文章で、優柔體(Feeble style)は弱い、柔らかい、優しみを主とした文體である。剛健體とは例へば左の如き文である。

日蓮は日本國の大難を拂ひ國を持つべき日本國の柱也。余を失ふならば日本國の柱を倒す也。但今此の國に大惡魔入り滿ちて國土ほろびん時にこそ日蓮が立て申す法華經の法門、正義とは見え候べけれ。經文限りあれば力無し。其の時こそ人々は思ひ知り給ふらめ……國の恩を報ぜんが爲めに、國に留まり三度は諫むべし。用ゐずんば山林に身を隱せといふ本文ありと本より存知せり。如何なる山中にも籠もりて命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は佗事なし。時に五十三、同じ五月十二日鎌倉を立ちて甲斐の國に分け入る。路次のいぶせさ、峯に登れば日月をいたゞくが如し、谷に下れば穴に入るが如し。河猛くして船渡らず、大石流れて箭をつくが如し。道は狹くして繩の如し、草木しげりて路見えず。かゝる所へ尋ね入る事淺からざる宿習なり。かゝる道なれども釋迦佛は手を引き、帝釋は馬となり、梵王は身に立ちそひ、日月は眼に入りかはらせ給ふ故にや、同じき十七日甲斐の國波木井の鄕へ着きぬ。(日蓮「波木井殿御書」)

優柔體は左の如きものである。

繪にかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆かぎりあれば、いとにほひなし。太液の芙蓉、未央の柳も、氣にかよひたりしかたちを、唐めいたる粧はうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思しいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。朝夕の言種に、羽をならべ枝をかはさんと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、盡きせずうらめしき。(「源氏物語」)

剛健、優柔二體の用ゐ方については、前者は壯烈雄大なる男性的の事を寫すに適し、後者は優美婉麗なる女性的の事物を寫すに適して居るといふ程の事はいへるが、これは結局文章家の好みによることで、定まつた方針を下すことは出來ぬ。但し剛健體は粗野に陷り易く、優柔體は弛緩に陷り易い傾きがある。これは常に戒めねばなさぬ。

五八

第三は修飾の多少によるので、これに乾燥體、平明體、清楚體、高雅體、華麗體の五種がある。

乾燥體(Dry style)はあらゆる修飾を斥け、唯だ理解さるゝに滿足して、讀者の感情を喜ばすことを期せざるものである。此の文體は達意專一の實用文、或は學問上の說明文に限られて、文學的文章には殆んど見られぬ。例へば

凡そ人類と動物とを問はず、苟も社會的生存に加はる所の一個體となりて、他の侶伴と共に生存營爲する者が、寸毫も侶伴の利害を顧慮せずして己れ獨り利益を占有せんとすることあらば、假令己れ大いに他に優る所あるも、遂に多數侶伴の妨害を受けて其の志を遂ぐる能はざるのみならず、遂に己れを危くするに至るべきは甚だ覩易き道理なれば、人類と動物とに論なく、已に多少此の理を知らざる者はあらず。是は於いてか、社會の一個體たる者は、假令侶伴に優る力ある者と難も、已むを得ず自ら多少其の愛己心を抑制して以て侶伴の利害を妨害せざるに注意する事となるなり。(加藤弘之「道德法律進化の理」)

平明體(Plain style)は修飾使用の點に於いて乾燥體より一步を進めたるもの、修飾は用ゐるが、殆んど意義を明らかにし、多少の趣味勢力を添へる程度に止まるものである。清楚體(Neat style)は修飾使用の點に於いて平明體より更に一步を進めたもの、修飾を用ゐても燦爛たるまでには至らず、言葉を擇み、排列を雅馴にし、詞姿を用ゐるにも大膽光耀を期せずして寧ろ穩當確實を期するものである。高雅體(Elegant style)は清楚體より更に多く修飾を用ゐるものに過ぎず、不適切ならざる限り豐かに修飾を用ゐ、題目の許す限り想像の美を取り入れるものである。華麗體(Florid or Flowery style)は修飾過度にして華の實に勝つたもの、若い作者の作に於いては將來の有望を證する一つの徵候であるが、大體に於いて稚氣があり、厭味を伴ふものである。

右の五種別は多くの西洋修辭家の取つて居るものであるが、平明、清楚、高雅、華麗の四種は、名の特色本領が漠然として境目の判然たらざる嫌ひがある。吾等はむしろ此の修飾づきの四文體を高雅體もしくは華麗體の一語に統べて、乾燥體に對せしめる方が穩かであらうと思ふ。左に此の四種の中に屬するもの數節を掲げて見る。

内の樂みを本とし、耳目を以て外の樂みを得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景氣のうるはしきを感ずれば、その樂み限りなし。此の樂み、朝夕常に目の前にみちみちて餘りあり。これを樂める人は卽ち山水月花の主となりて人に乞ひ求むるに及ばず。たからもて買ふにあらざれば、一錢を費さず。心にまかせて恣にとりて用ふれども盡きず。つねに我が物として領すれども人いさはず。如何となれば、山水風月の佳景は、もとより定まれる主なければなり。かく天地の内きはまりなき樂みを知りて樂める人は、

富貴の驕樂をうらやまず、其の樂み富貴にまされればなり。(貝原益「樂訓」)

私の若い時は如何だと申すに中津に居たとき子供の時分から成年に至るまで、何としても同藩の人と打解けて眞實に交はることが出來ない、本當に朋友になつて共々に心事を語る所謂莫逆の友と云ふやうな人は一人もゐない、世間にないのみならず親類中にもない、と云つて私が偏窟者で人と交際が出來ないといふではない、ソリヤ男子に接しても婦人に逢うても快く話をしてどちらかと云へばお饒舌の方であつたが、本當を云ふと表面ばかりで實は此の人の眞似をして見たい彼の人のやうに成りたいとも思はず、人に譽められて嬉しくもなく惡く云はれて怖くもなく都て無頓着で惡く評すれば人を馬鹿にしてゐるたやうなもので假初にも爭ふ氣がない……(福澤諭吉「福翁自傳」)

(嫩草)山は一面に黃色な芝草を地として、卓出でてゐる草に薄がある、草萩がある。薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする輕やかな穗を出して、かすかな風に搖れて見せる。草萩も花はもう無いが、折り取つて見ると小鳥の脚のやうに赤い水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戰つてゐるのが無殘である。

しばらく草の上に坐つて此の山と親しんで見る。秋の嫩草山を人化したら、二十五六の美女の尼が、黃絹な袈裟ころもを着て端坐した心持である。(島村抱月氏「奈良より」)

右に擧げたのが西洋の修辭學者の說く文體の中の最もおもなるものである。要するに文體はいろ〳〵な語文句詞姿、事例を用ゐて居る間におのづから現はれる文章の容姿格好である、いろ〳〵の要素を踏まへて其の上に出來る癖、特色である。云はゞ文章の個人性である。

五九

修辭學の中心をなす第四の要素は組織論卽ち組立、段取の論であります。此の組織、組み立の事を漢文家は普通に體裝といひ、英語ではArrangement卽ち整理と云つて居ります。

一語々々に對しては組織の論も起こりませんが、二語を聯ね竝ぶれば、もう其處に組織上の優劣選擇の論が起こります。語を聯ねて句を爲し、センテンスをなし、センテンスを重ねて節をなし、章をなし、篇をなし、一部の作をなす、其の重ね方、聯ね方を自然にし、確實にし、穩當にし、立派にし、面白くする理法を研究する。それが組織論の役目であります。而して文章の組織に關する要求は、煎じつめて云ふと、秩序、聯絡、統一の三事を出來すこと、平たく云ふと、順序が立つて、よく續いて、よく纏まるやうにすることの三事で、古來の修辭學者の組織論は要するに此の三事を出來す爲めの方法を講じたものに過ぎません。

六〇

文章の組織に關して古來多く世に行はれたのは、二段說、三段說、四段說、五段說、八段說等であります。その中、漢文家の多く取つて居たのは、起、承、鋪叙、過、結といふ六段別の組織法で、此の說の本家たる元の代の陳繹曾といふ學者は、此の六段を人間の身體にたとへて「起は人の眉目の如し、明切を貴ぶ。承は咽喉の如し、疏通を貴ぶ。鋪は心胸の如し詳悉を貴ぶ。叙は腹臟の如し、轉折を貴ぶ。過は腰膂の如し、重實を貴ぶ。結は手足の如し、緊快を貴ぶ」と云つて居りま

す。わざとらしい譬喩の爲めに却つて曖昧になり、うるさくなつて居る嫌ひはありますが、つまり先づ一番に序出しの文句を書いて、次ぎに本部に繋がる承の文句を書いて、其の次ぎに中心の肝要なる趣意を鋪きつめ叙し並べて又繋ぎの文句で一過して收結をつけるといふので ありませう。大分考へた組立方で、理窟のないわけではありませんが、いかにも拵へたやうな趣があつて、自然の組織法とは云ひ難いやうに思はれます。

西洋で早くから最も廣く行はれたのはギリシヤ傳來の序論、說話、論證、結論(Proem, Norrative, Argument Perooration)といふ四段別の組織法でありました。アリストートルなども、自分ではあらゆる場合に通じて必要なのは叙說、立證(Statement, Proof)の二段だけであると云つて居るが、實際はやはり當時の流行に從つて此の四段組織を取つて居た。是れはおもに論說文についての立案であるが、其の趣意はつまり、まづ序出を書いて、第二に立論の根據となるべき材料を並べ、第三に其の材料を使つて其の論の成立する所以を證明し、第四に要點を撮み、讀者を納得させて收まりをつけるといふのであらう。漢文流の六段說などに比べると、遙かに優れて理窟の立つた組織論である。

こゝに一つ參考になるのは佛敎學者の取る段別であるが、彼等は文章を讀むにも書くにも序分、正宗分、流通分の三段に分けることになつてゐる。序分とは序出の部分といふこと、流通分とは末尾の部、卽ち正宗分の餘波或は應用の部分といふことである。我が日本の序、破、急といふ分け方はおもに音曲についての段別であるが、同じ種類に屬する分け方と見ることが出來る。

六一

吾等は是等のいろ〳〵な組織論を考へ合はせた上で、第一に、最も自然で、理窟にも合ひ、役にも立つのは、日本流及び佛敎家流の三段說であると思ふ。本來文章は口でしやべつて耳で聞く言葉を、文字といふものに固めて、目で見るやうにしたもので、其の本來の性質や原則を知るには、本元たる口語、說話の場合を考へて見るにましたことがない。第一に音問の挨拶をする、是れが序部である、第二に用向を話す、これが本部、正宗部である、第三には暇を告ける、これが結部である。演說をする時は、第一に登壇の謂はれや演題の說明をする、(序部)第二に主要部分の聞かせ所を話す、(本部)第三に要點を撮み述べて降壇の挨拶をする(結部)。是れが談話演說の場合に、吾々が殆んど常に取る所の段取であるが、文章も根本に於いて之れと違ふ道理がない。それ故吾々は文章を學ぶ者、殊に初學の人の取るべき組織法は、談話、演說の場合に引きくらべて「斯う出して、斯う說いて、斯う說いて、斯う收まりをつける」といふ三段別の法であると思ふ。

しかしながら、是れは昔からの主なる組織論を並べて、いづれが最も自然で、理窟が立つて居るかといふことを考へて見たので、かやうな組織論の起こる謂はれは、つまり秩序、聯絡、統一といふ三つの註文を充たさんが爲めである。平たく云へば順序が立つて、よく引き續いて、纏まりがつきさへすればよいので、吾等の考では三段、四段、六段、などいふ段別などに心を惱ますよりは唯だ「穩かに引き續いて、よく纏まるやうに」と狙つた方が遙かに文を活かす所以であると

思ふ。

六一

上に述べた體製段別はおもに論文や辯說の組織に關する說であるが、單に論文や辯說に限らず、あらゆる種類の文章を取り統べて考へると、吾等は文章の形式を、組織上より見て、凡そ左の五種類位に分けられさうに思ふ。その第一は追步式、第二は散叙式、第三は頭括式、第四は尾括式、第五は雙括式である。

第一、追步式とは、事物の端より端に、一步々々に叙述を進め行く方法である。冒頭、承引、轉折、結束などいふ面倒な技巧を用ゐず、唯だ家から學校まで、麓から山頂まで、起きてから寢るまで、元日から大晦日まで、有つたまゝ、見たまゝ、聞いたまゝを書き次ぎ書き序でて行けばよいので、古來の組織論には無いことであるが、是れも簡單自然なる一種の組織法と見らるべきものである。之れを圖に示せば、

頭——·——·——·——尾

のやうなもので、牛涎式と呼んでもよい。

第二、散叙式とは事物を散り〳〵に列べ叙したるだけで、其の間に關係をもつけず、又統べ括りもせぬもの、但し散列したる間に隱れたる一筋の脈があつて朧ろに全體を繫ぐものをいふ。これも在來舊式の體製論には全く說かれなかつたものであるが、とにかく一種の組織法である。漫筆的描寫法ともいふべく、最近新式の印象的描寫などいふものも、一面此の式を加味したものと見られる。圖に示せば左の如きもので、之れを兎糞式、柳條式と云つてもよい。

第三、頭括式は文の始めに全體を括るべき大綱を掲げて、次ぎに其の中に含まるゝ事物を擧ぐるもの、但し事實例證等を擧げ竝べる丈で、文尾に於いて括りをつけぬ方法である。例へば、初めに「古來歌人にして自然を愛でざるはなし」と云ひ、次ぎに人麿も愛でたり、赤人も愛でたり、紫式部も、西行も、定家も、芭蕉も愛でたり」と云つて筆をとめる類である。此の式を圖に現はすと左の通りで、之れを章魚式と呼んでもよい。

第四、尾括式とは初めに幾多の事物を列擧し、結尾に至つて之れを統べ括る方式をいふ。例へば平家、源氏、北條氏、足利氏など、驕奢を極めて滅びたる多くの例を擧げて、最後に「故に曰ふ驕る者久しからず」と結ぶ類で、歸納式の論文にその例が多くある。此の式を圖に現はせば左の通りで、之れを木の枝式と呼んでもよい。

第五、雙括式とは、前に大括りの綱領を掲げ、次ぎに之れを繫說して後結尾に至つて再び之れを統べ括る樣式である。議論文には最も效力があり、從つて最も多く用ゐられるもので諸々の科學が、初めに定義を掲げ、後に再び同說を收結するが如きは、此の樣式を用ゐたものである。此の式を圖に示せば左の通りで、之れをハンモツク式を呼んでもよい。

右に擧げた五つの形式の中、最も穩かにして最も多く用ゐらるゝもの、初學の採用するに適したものは、第一の追歩式と第五の雙括式とである。追歩式は記實、叙事の文に適し、雙括式は論文に適する。その他の三種は、いづれも並はづれの曲物といふ傾きがあり、才人が特殊の場合に使ふべきもので、初學の濫用すべきものではない。また此の五つの形式はたゞ組織上特色の著しきものを取り出でたので、委しく擧ぐれば、漢文家などの云ふやうに他に幾十種幾百種の樣式があるであらう。しかしながら、其等の諸樣式は此の五樣式のいづれかを本として他の樣式を加味したものとして說明される。又煩瑣なる區劃分類は凡その見當を定めるには多少の利もあらうが、畢竟秩序、聯絡統一を無事に成り立たせる爲めの考案で、之れに拘泥すれば却つて法則に縛られて文を殺す恐れがある。初學のなまじひに心を惱ますべきものではない。

六三

吾等が前節に於いて、已に文章の組織が古來の修辭論に通じて最もおもなる要素の一つであることを知つた。及その組織の段取に二段說、三段說、四段說、五段說、六段說、八段說等、いろいろの流儀のあることを知つた。又是等のうちで最も自然なる段取は我が國の序、說分、正宗分、流通分の三段說であることを知つた。又段取の流儀はいろ〳〵あるが、組織論の中心要事は、要するに順序の立つ事、無理なく續く事、纏まりのつく事、換言すれば秩序、聯絡、統一の三事であるといふ事を知つた。

順序を立て、組み合はせをよくし纏まりをつける必要のあるのは、物事すべてに通じた事で、單に文章のみに限つたことではない。一日の仕事でいへば、朝は準備し、晝は働き、夜は休む。食事ならば先づ液汁物に喉をうるほして、次ぎに魚鳥野菜のいろ〳〵なものを食べ、最後に酢の物、香の物、果物、お湯といふ段取で、口鹽梅をさつぱりとして、そして「御馳走樣」ときめる。人を訪ねるときは、「御免下さい」「お變はりもいらつしやいませんか」で序開きをして次ぎに用事を述べて、「左樣ならば」「お靜かに」で極りをつける。人間の事はすべて此の通りのもので、何等かの方法で、順序が立つて、事が氣持よく運んで、而して全體に纏まりがつくやうにしないと、氣の濟まないものである。

文章も其の通りであるが、但し此大體の心得を通り越して、必ず四段に、五段に、六段に、八段に組み立てねばならぬといふやうな事になると、規則に縛られ、型に責められて、文章に活き〳〵した自然の潤ひが無くなつて了ふ傾きがある。是れは立派な大家に於いてすら常に見るところの弊であるから、初學の人などの取りわけ用心せねばならぬことである。組織に關して初學の心得べき事を約言すれば、細かしい、わざとらしい段取の形式などには頭を惱まさぬ事、たゞ如何樣に書き始めて如何樣に言ひつゞけて、如何樣に締め括りをつけるかといふ大體の見當を定めて、熟した活きた感想を頭から無理なく手繰り出すやうにする事、書き終はつた後に無駄を省き穴をふさいで磨きをかける事、これで澤山である。

六四

おしなべていふと、組織法から見た文章の書き方に、おのづから三種の色別があるやうに思はれる。一つは思ひ出し次第に書く出鱈目流である。一つはやかましい規則に據らうとする型嵌流である。他の一つは極大體の見當をつけた上で細かしい處は頭の働き次第、筆の運び次第にすん〳〵書き進まうとする遠目大摑みの目分量流である。出鱈目流は素人の藪流儀で、初めから御話にならぬ事はいふまでもない。型嵌流は形式をよくし外觀を整へる長所はあるが、同時に文章を乾燥させ硬直させる危險な短所を持つてゐる。思ふに誰れが用ゐても間違ひのない流儀、少なくとも守るは守らざるに勝つて居る流儀は、第三の目分量流であらう。此の意見によつて、左にざつと目分量式の組織法を說いて見る。

或は與へられた題目もなく、豫定の目論見もない場合に、偶然こんな事を書いて見ようかと思ひつく事もある。或は與へられた題目例へば「參宮紀行」「草花培養の趣味」「卑怯なる行ありし友を諫む」「體育の本義」「名勝舊蹟保存論」といふやうな題目について、興味の中心になる思想をふツと思ひつく事もある。

題のある場合でも、無い場合でも構はない、とにかく偶然に「これをこそ！」といふやうな事を思ひつく。或は道行く折に、或は讀書の折に或は人と談話をして居る時に、或は電車に乘つて居る時に、或は畑を掘つて居る時に、電光石火のやうに「ウム是れだな」といふ感想が頭の中に躍るが如く湧き出でて來る。かういふ感想が多くの場合、吾等が文章の種子となり中心となるもので、斯樣な場合には、忘れぬやうに成るべく之れを書き留めるやうにするがよい。

さて中心になるべき思想が見つかると、今度は成るべく之れを培養して肥やし育てゝ行く事を考へる。で、書物も其の心構で讀み、談話の折にも景色を見る折にも、その心構で注意して居るやうにすると、謂はゆる志あれば道あり、妙なもので、その中心思想の味方になりさうな材料が、思ひがけぬ所からポツ〳〵と集まつて來るものである。それをも成るべく逃がさずに雜記帳なり、紙端なりに書き留めておくのである。それが二日、三日、五日、十日と經つ中に、段々と集まつて來る。その集まつて來る材料の中には、自分の趣意を立てるに都合のよいのもあり、又自分の意見に反對したのもあつて、それらの敵味方いろ〳〵の材料が頻りに頭の中でせり合ひ戰ひ合ふ中に、いつとなく自分の考が段々に熟して來る。「ウム、かう書き出して、かう續けて、かう止めれば、大概物になるな」といふ荒木取りの形が見えて來る。此の光、此の形の見え

て來るのを合圖に、材料を整理して、筆を執るがよい。考の熟さない中に書き出すと、とかく纏まりの無い、形の薄い、命の無い、流産をしたやうなものになる恐れがあるから、成るべく熟するのを待つて筆を執るのがよいのである。

六五

筆を執る前には、まづ極大體、始めにこんなことを書いて、それからこんな事を書き續けて、大概こんな所で結尾にしようといふ位の見當を定めて、それから、かねて集めて置いたごた〳〵の材料を、始めの方に入用な分、終り方で入用な分と位に、三つか四つかに分けて入用な分、終り方で入用な分、中程で入用な分、終り方で入用な分と位に、三つか四つかに分ける。それからいよ〳〵筆を執る時には頭の調子をよくし、思想の流出工合を滑らかにする爲めに、或は氣に合つた古今の名文を讀むのもよい。或は自分の今まで書いたものの中で、比較的心に合つたものを口馴らしに讀むのもよい。或は靜かなところを散步して頭を鎭めて來るのもよい。或は好きなお菓子や果物でも食べて氣を養ふのもよい。それから前の材料や參考の書物などを机のまはりにおいて、心を集注して段々と書き出すのである。

始めの部分は一寸極り難いものであるが、もし氣に合はなければ五度も六度も書きかへるがよい。その中どうやら最初の六七行乃至半枚、一枚が曲りなりに極ると、丁度運動會で幅飛をするもの者が遙か向ふから駈けて來ては蹲みをつけて飛ぶやうに、已に書いた部分も幾度も讀みかへしつゝ調子をつけては次ぎの文句へ次ぎの文句へと移つて行くのである。此の移り工合、滑り進む調子は、どうか蠶の絲を吐くやうに、水の低きにつくやうに、自然に無理なく運ぶやうにしたいものである。

かうして前の文句に繼ぎ足し繼ぎ足しして進んで行く間に、前に集めておいた材料をポツポツと嵌め込んで行くのであるが、數多い材料の中には、終はりまで、使用されずに殘つてゐるのが出來るであらう。さういふ場合には、それをば思ひ切つて捨てるがよい。かういふのをなまなか惜しんで無理に嵌め込むと、とかくわざとらしい無理が出來て、自然の風致が無くなるからである。

かうしてまづいながらに一つの文章が纏まつて筆をおいた時には、何とも云はれぬ快感を覺える。この場合には是非一服とし、一遊び遊んで、氣を拔いて、頭をさましてから、讀み直して手入れするのである。

文章には簡單なのもあり複雜なものもある、短いのもあり長いのもある、而して簡單な短いものにはこんな組織上の手數を要せぬのもあらう。又宿題もあれば卽題もあり、分かりきつた用事を卽座に書くこともある、而して急用の卽座書や卽題には、こんな手數をかける餘地がないであらう。それは場合に應じてそれ〴〵宜しきに從ふべきであるが、少し骨折つて、考へて、調べて書くものになると、まづ中心思想をつかむ、材料を集める、熟するのを待つて、材料を大體區分して、一所に氣を集注して書く、といふのが、最も穩かな方法のやうに思はれる。

つまり文章組織の要は三分すべきか、四分すべきか、五分、六分、八分すべきかといふやうなことではなくして、如何やうに書出して、如何やうに發展さして、如何樣に締め括るべきかといふ事にある。秩序、聯絡、統一、之れをおいて文章組織の論がない。

ナトZM-19

修辭學講話 終

六六

これで古來の修辭學、文章學の根幹をなして居る主要部分のお話が濟みました。心あつてわざとしたのではありますが「章」「篇」の區分もなく、だら〳〵と續けた蚯蚓式、さなだ蟲式の講釋には、さぞかしうんざりなされた事でありませう。狹い淺い知識を下手に竝べた講義、手初めの宣言には似も似つかぬやうな講義、古來の通說を說き、斯學の概念を傳ふべきものに自己一家の藪流儀の說明などを交へた身勝手な講義、さぞ〳〵御聞きづらかつたことであらうと恐縮に存じます。どうぞ之れをほんの栞として更に深く研究の歩をお進め下さるやうに願ひます。

（おはり）